

風俗奇譚

10月号

ソドミア
レスボス
特集男同士・女同士の愛欲図絵
新連載 欧米MSの家めぐり
時代多門紫
鋭吉



〈男女性風俗の粒より話題の探究〉

風俗奇譚10月号・通巻23号 毎月1回1日発行 昭和35年11月15日第3種郵便物認可
昭和35年10月1日発行 昭和35年8月30日国鉄東京局特例掛札承認第882号

風俗奇譚

風俗奇譚10月号・通巻23号 毎月1回1日発行 昭和35年11月15日第3種郵便物認可
昭和35年10月1日発行 昭和35年8月30日国鉄東京局特例掛札承認第882号

昭和35年10月号

定価150円

〈グラビア〉
妖美の世界
の女と男

- ・窓ぎわのえもの
- ・緑側の被縛
- ・二つ折り縛り
- ・柱に足を
- ・黒いタイトの女
- ・庭のすみで
- ・ネグリジェ緊縛
- ・襲われた女学生
- ・ハリツケ縛り
- ・胸を張った姿勢
- ・野外立縛
- ・誰かこないかな

〈モデル〉
島崎ユカ
須原圭子
大江美佐江
望月まり子
霧島茂樹
南郷次郎

（表紙）幻想につかれた女……………田上恵子
（色刷り口絵）爬虫類の洞窟……………土居啓子（折込）

（特集）男同士・女同士の愛欲図絵

- 女子 同性 イチジクの木の下で……………獅々村 裕（五四）
- 愛の思出 わが恋終わりぬ……………葦田奈貴（七〇）
- レスボスの精神愛と愛の技術……………かびや・かずひこ（八二）
- 男三 人譚 初秋のある休日……………加川明彦（七八）
- 同性 交歓 白禪は悲しからずや……………百田章治（六五）
- 同性愛は自然への反逆ではない……………奥村世紀男（五二）
- ホモの窓……………（九〇）
- ホモを楽しむ5のヒケツ……………羽井鯨亭（九三）



☆働く男・剣をとる男……………（三）

乗り物責め

- ・ヘリコプター吊り……………古正英生（五）
- ・モーターボート責め……………田上恵子（六）
- ・ケーブール吊り……………江馬美久（四三）

（写真集）プレイ・ガールズ

……………エクスポ提供（四）

縛りあげられた女医師

……………ヌートリクス提供（九）

☆欧米MSのイリスの家の変態娼婦……………谷貫太（二七）

悦楽最中に昇天した伯爵夫人……………一ノ瀬悦子（二四）
私の恋人は乗馬服を着た女性……………森山史郎（二〇）

（絵物語）女旅役者花木一座……………栗橋慎吾（一八）

☆女装愛好の部屋……………（一五）

☆読者サロン……………（一三）

☆編集室だより……………（一六） ☆代理部ご案内……………（一八）

新連載 多門 砦（雲の巻）……………芦立鋭吉（二五）

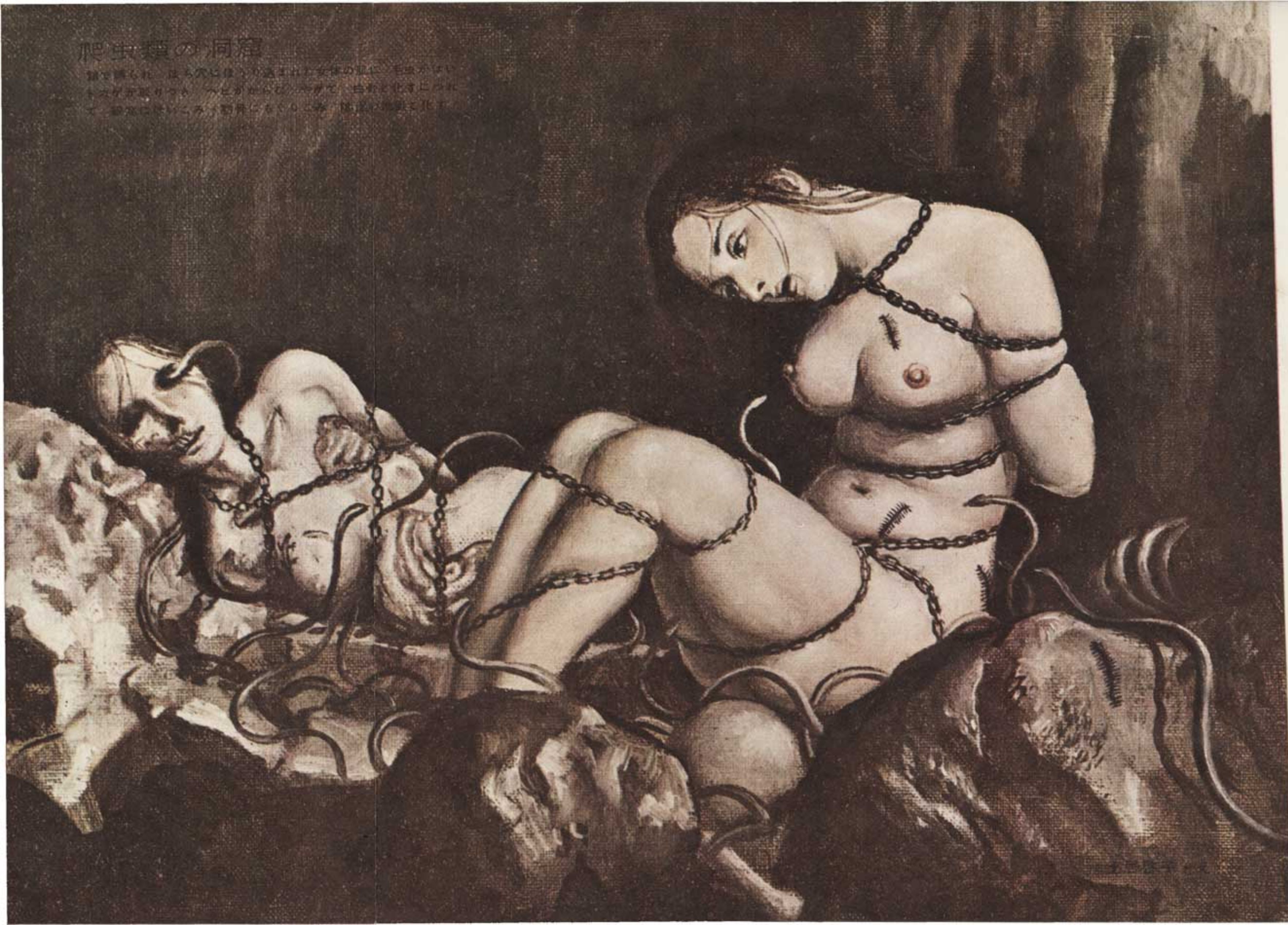
男性目には目を……………青砥伯（二四）

転性黒い日記……………北田克彦（二七）

連載 悦虐の彷徨⑥異常の群れ……………青山三枝吉（二〇）

爬虫類の洞窟

鎖で縛られ、ほら穴に這入り込まれた女体の軀に、毛虫がはいり込み、へじが刺さる。やがて、白粉と化すにつれて、彼女にほらとみ、洞窟に這入り込み、爬虫類の洞窟に化す。



妖美の世界 の女と男

異常な環境におかれたとき 女が魅力を増す時がある 男が不思議な美しさを加える時がある 人間のもつ宿命か それとも 生まれながらに背負わされた業か



女子は
220可愛く
やんちゃか？
220おれもん248ヤンちゃ2子
腹下 奥いっつ2482子





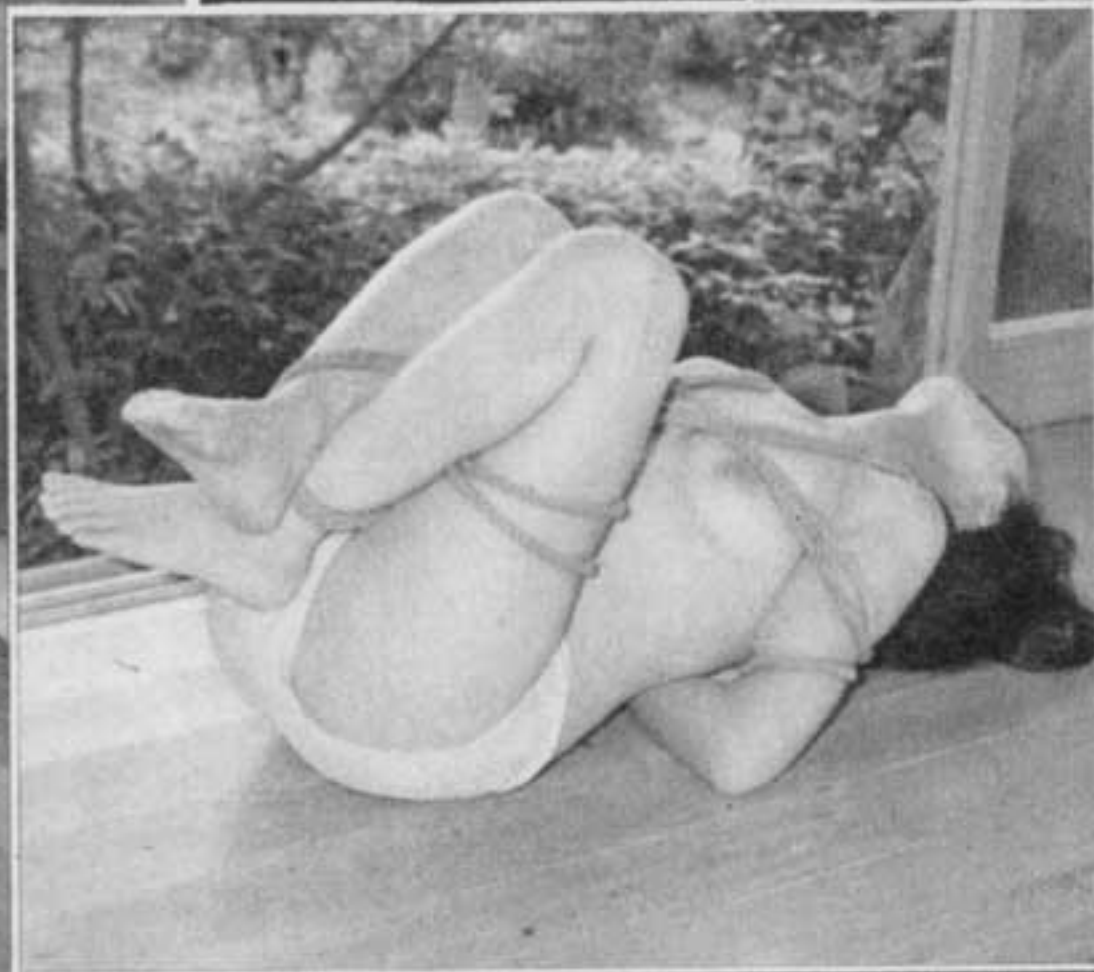
窓ぎわのえもの

クモの巣にひっかかった白いチョウか 細かい窓格子に いろいろな形で縛られた女は 身もだえしても 逃げられない〈モデル・島崎ユカ〉



縁側の被縛

フジだなを控えて 庭は静まりかえっている この静
寂のなかの 静かな緊縛 シワシワと縄がきしみ 苦
痛が 徐々に身内にしみとおるへモデル・須原圭子



二つ折り縛り

足を投げだしたエビ責めとでもいおうか 身動きできずに 女は苦痛をかみしめるへモデル・大江美佐江

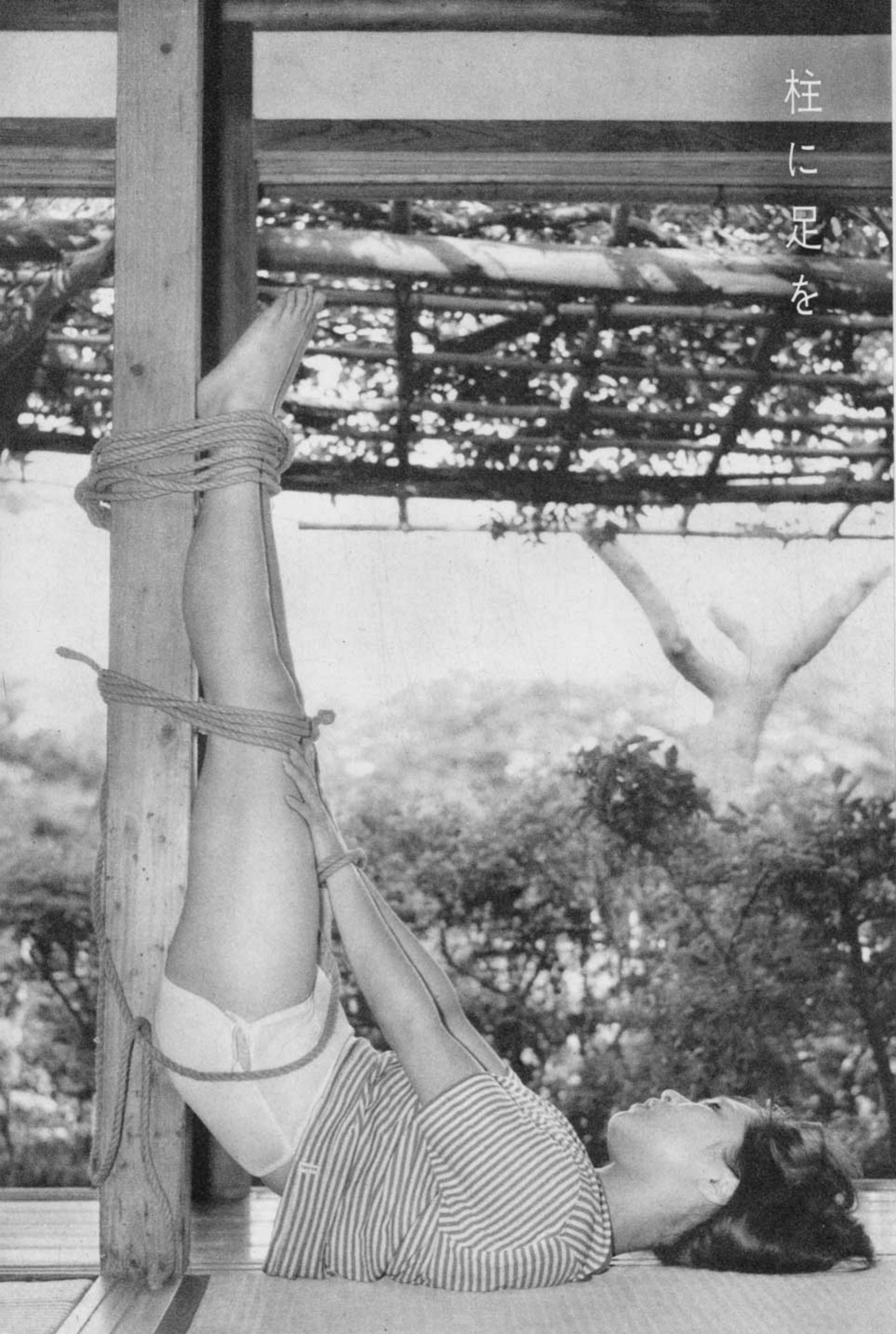






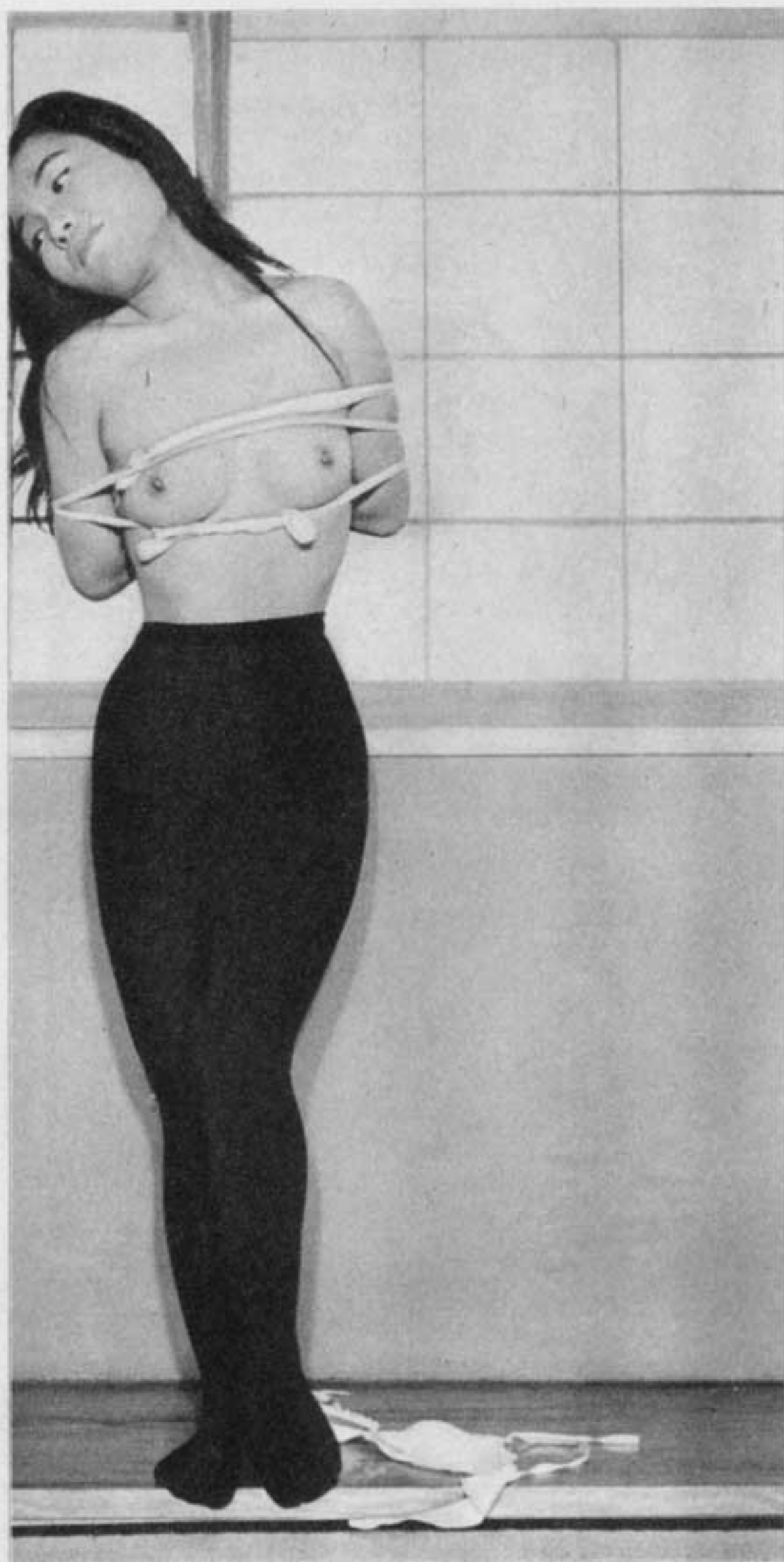
柱に足をさかきにくくりつけられた姿勢は 美容体
操に似ているがとても苦しいへモデル・島崎ユカ

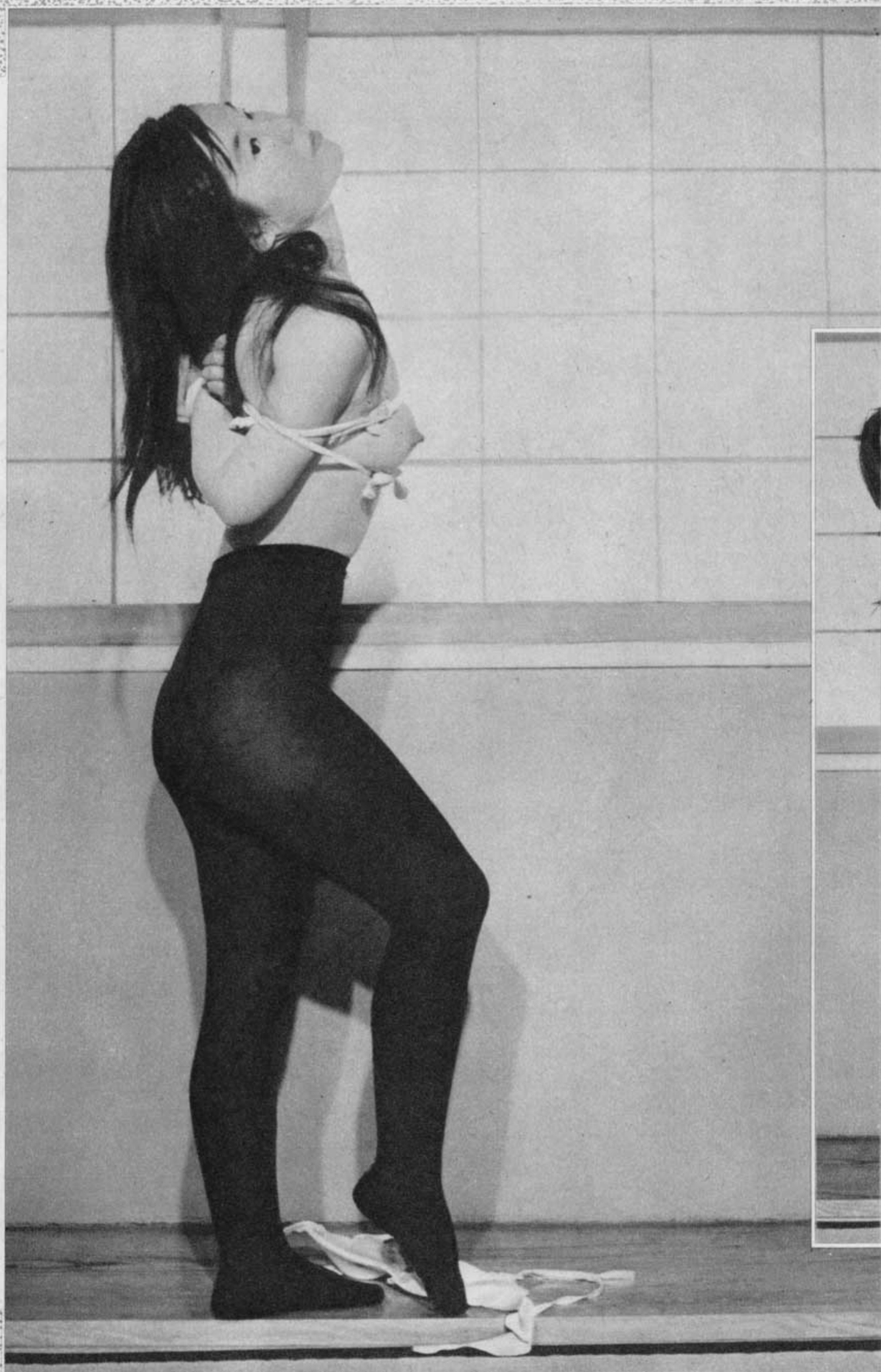
柱
に
足
を



黒いタイツをはいた女

黒いタイツが下半身をあらわにして 足もとに落ちたブラジャーの白と
対照的だ 棧の広い障子の前で 縛られた上半身がもたえ 明るく印象
的なだけに この被虐の姿態は 透明な悲しさを伴って 痛々しすぎる







庭のすみで

戸袋の前で 腰巻き一枚の女が ひっそりと縛られている かたわらのヤツデだけが見ている 静かな緊縛 微風がすそを乱しのぞいた肌が 白い〈モデル・須原圭子〉



ネグリジ エ緊縛

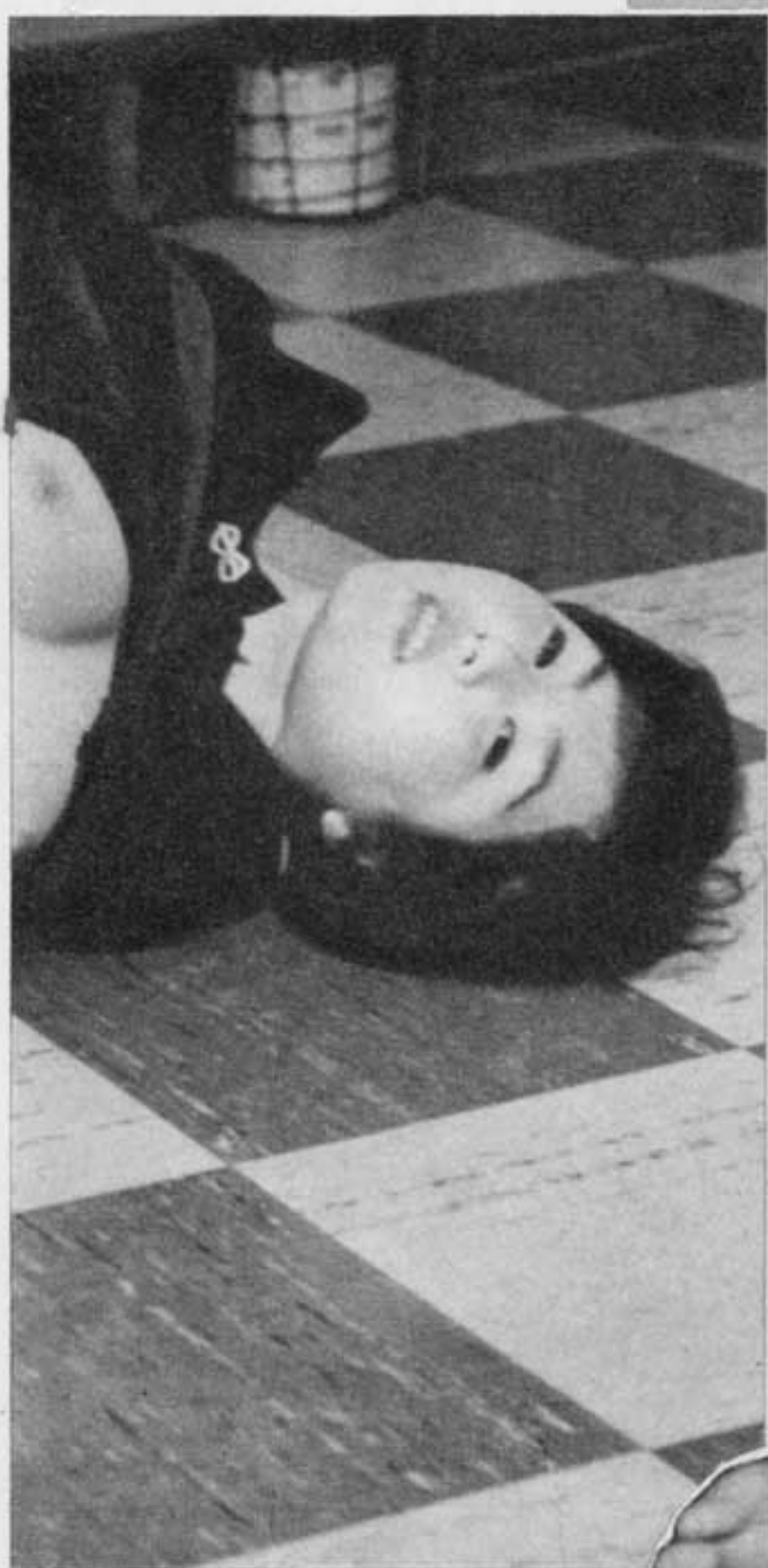
寝込みを襲われたのだろうか ネグリジ
エ一枚で 縛りあげられた女 縄の間か
ら ブックリと乳ぶさが盛りあがり女
はもだえあえぐヘモデル・望月まり子



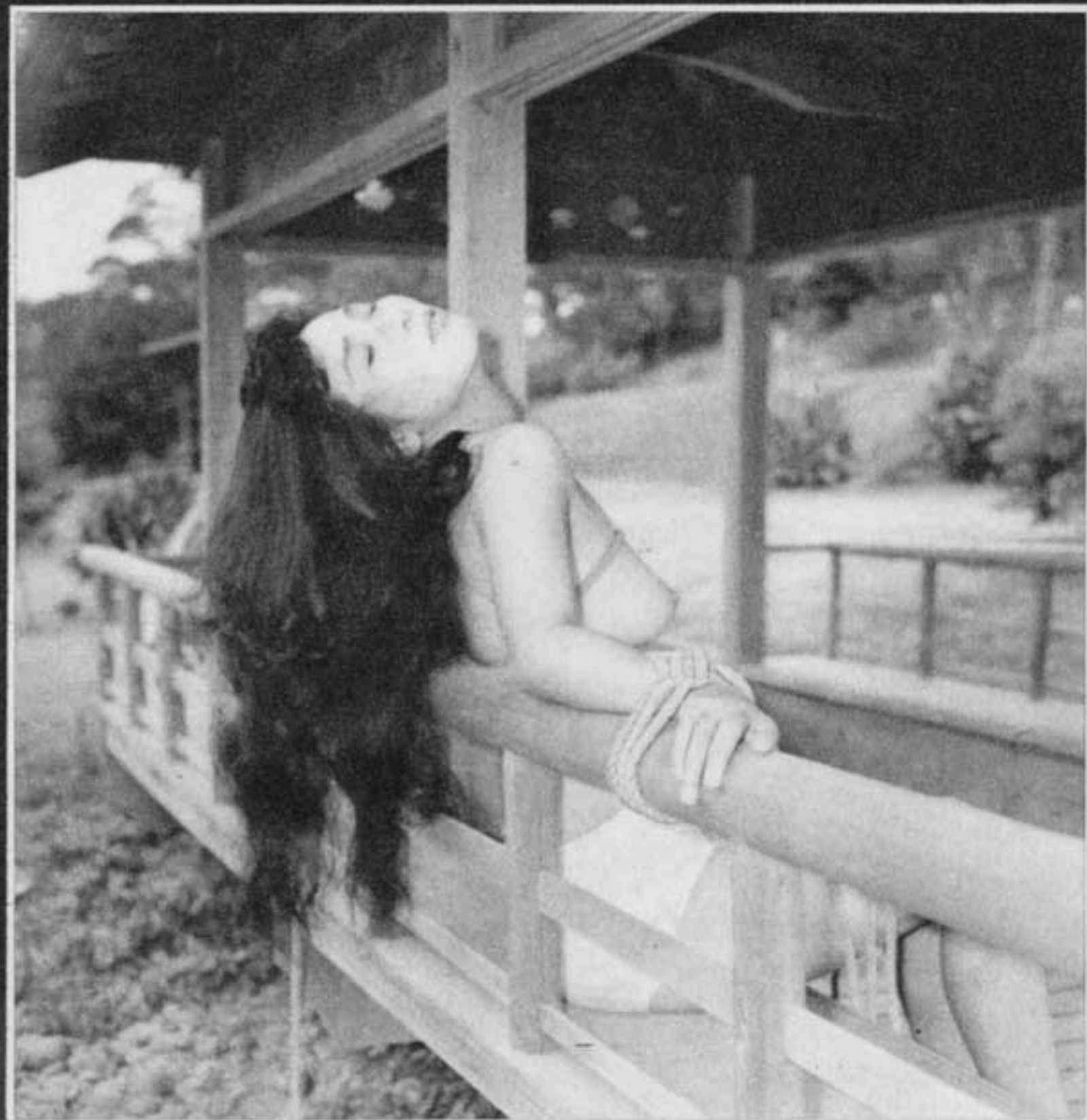


襲われた女学生

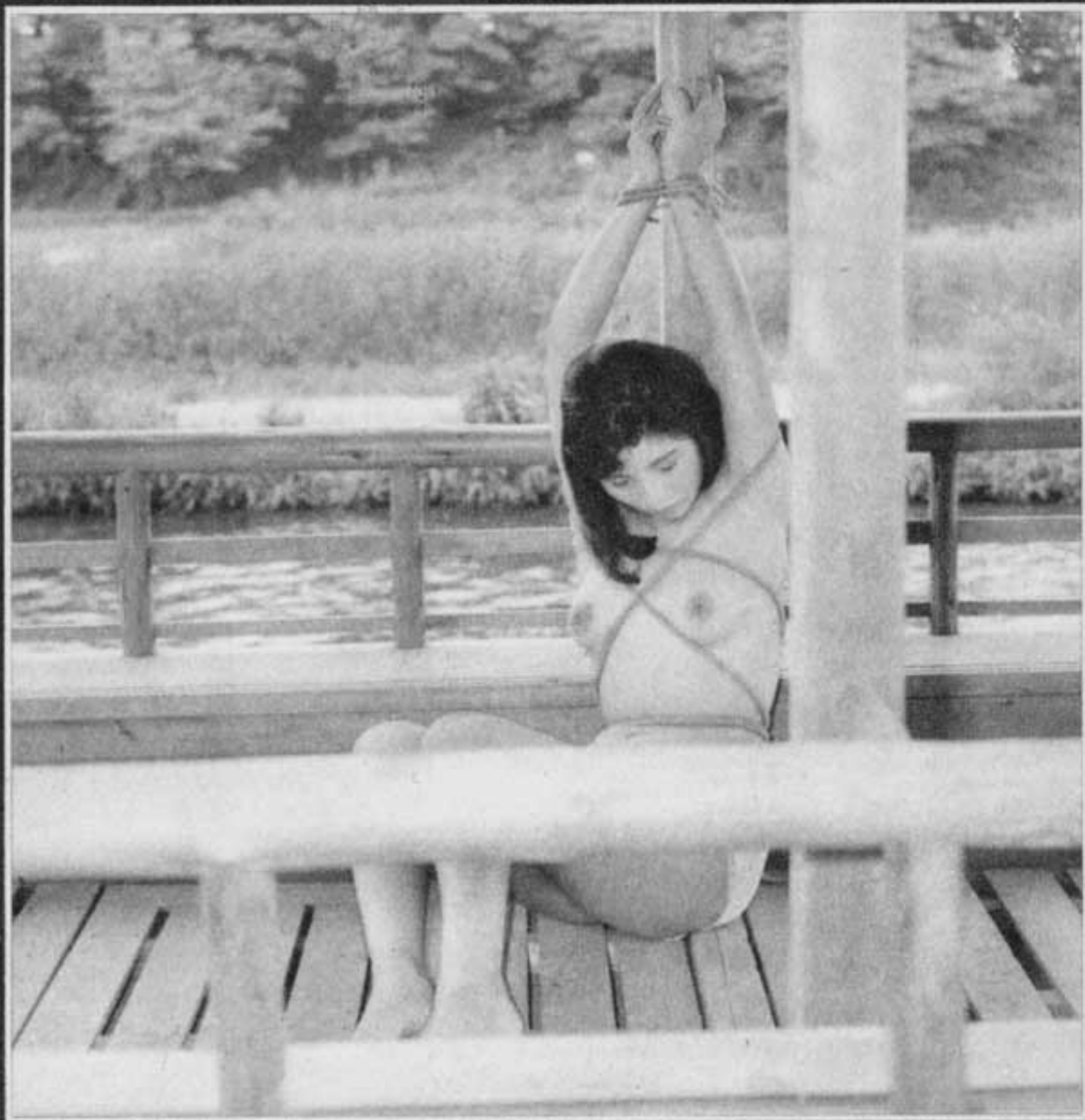
追いつめられ 縛りあげられた彼女に 制服
も無残に乱れて 恐怖の影が 無気味に迫る







両手を開けた姿勢 両手を頭上にのばしたポーズ こんなふうにしばられると
胸から下半身にかけて 無防備にさらけだされるわけだ〈モデル・須原圭子〉





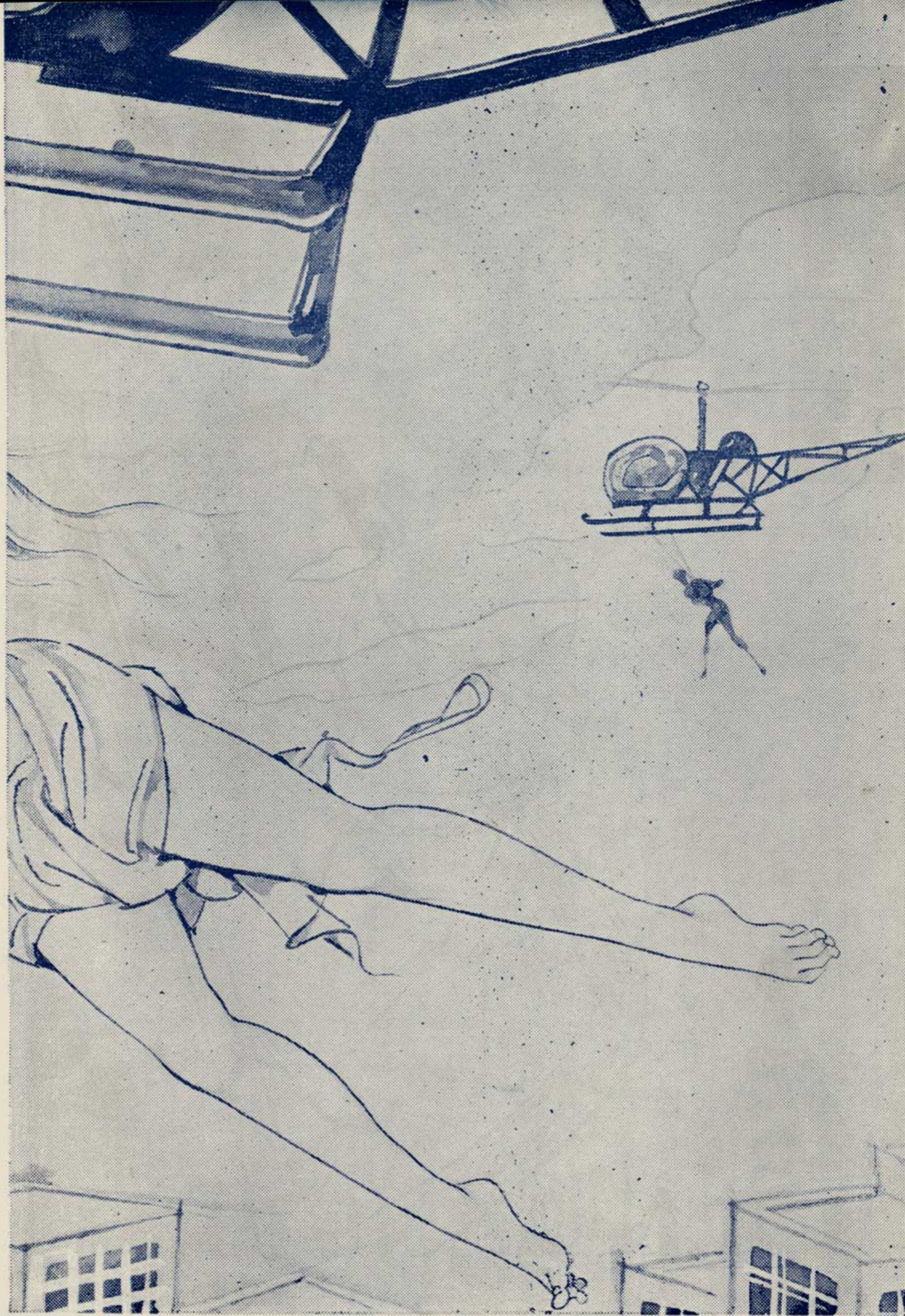
あるハリツケ縛り



乗り物責め7景



空中回転——グルグル回る空中メリーゴーラウンドにくくられた裸身のにえく古正英生・え>

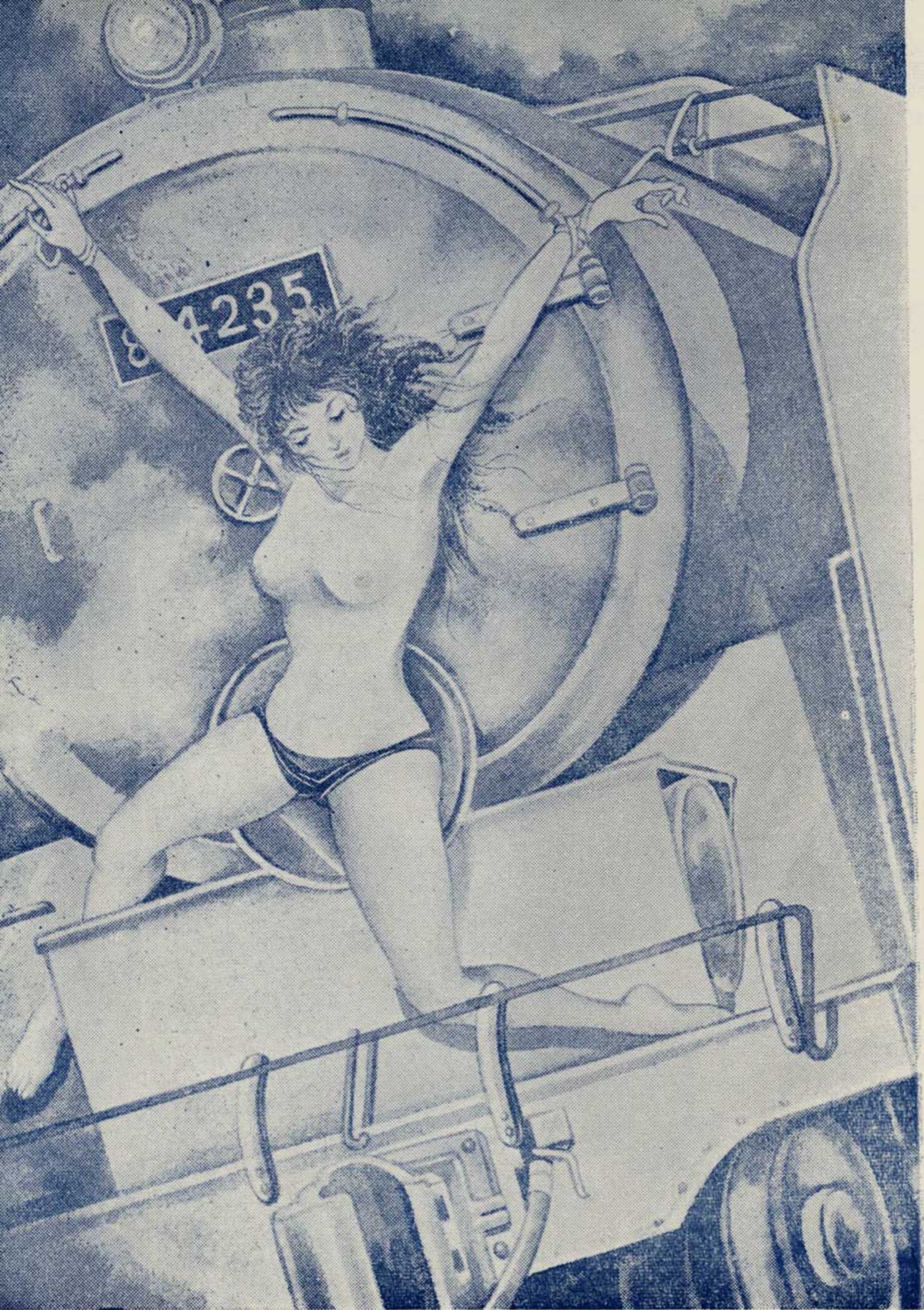


ヘリコプター吊り——手首を吊られて飛翔するとき、ビルのはるか上空で、時ならぬ都会の空中サーカスの花が開く。はなやかな責めへ古正英生・えい





石ころ責め——ダンプカーに積んだ石ころの上で 振動につれ柔肌がくわれる<田島由子・え>



機関車しばり——熱した鉄板に素肌を焼かれ 夜空をつんざく汽笛と女の悲鳴<田上恵子・え>



とぶ 水は 冷たさをとおり越して 肌を切るように痛い 冷感と痛感の加虐境<田上恵子・え>



モーターボート責め——ヘサキの波切りに女を縛りつけて 快速力でエンジンがうなる しぶきが



トランク詰め——縛られた身を窮屈に折り曲げられ「どこへ運ばれるのか」女ばく江馬美久・え>



ケーブル吊り——下は深い谷 うしろ手しばかりで吊るしたまま ケーブルは走るく江馬美久・え>

皮のジャンパーで上半身を包み 太いベルトが急所を締め
める そのうえ 情け容赦なくサルグツワで責められる



床に押しつけ背中にのしかかる 責める快楽と
責められる悦虐が ぶつかって 火花をちらす



責め手は ちょっと一休み イスに腰かけ 足は
いけにえの背中におき このSM交響楽も小休止



風俗奇譚

1961 年 10 月号

特集

男^{ソドミア}同士・女^{レスボス}同士の愛欲図絵

同性愛は自然への反逆ではない

動物にも見られる同性愛

男が女を愛し、女が男に魅力を感じるのは正常と称される状態である。しかし、それとは別に、男でありながら男に欲情を感じたり、女でいて女に欲情を覚えるという人々がいる。ホモセクシュアルな性欲をもったものの群れである。

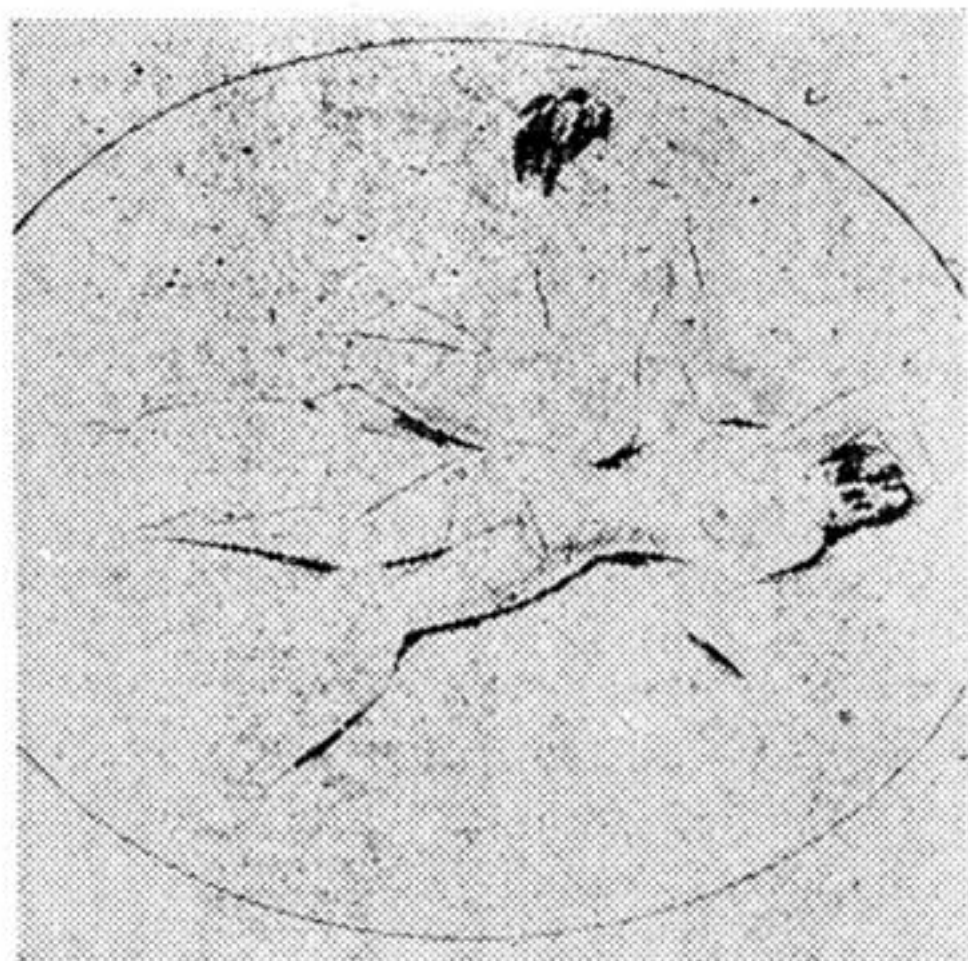
クラフト・エービングは、これを「倒錯」と呼んだが、これは、自然の目的、つまり生殖に役立たない性欲だからというのである。しかも、この同性愛の感情は、人間ばかりでなく、動物にも見られるという。ドイツの精神病医のクラウスは、ペデラスティは、イヌやサルにも見られるといっているし、またある学者は、二匹のオス犬が、お互いに摩擦

しあって、ついに射精に至ったという事例を報告している。

そして一般には、同性の間で男側の役をする、つまりアクティブな役割を受けもつものをペデラストといい、女側の役をする、つまりパッシブな役割を果たすものをウールニングと称している。

しかし、これは、必ずしも射た表現とは言いがたい。というのは、ペデラストというのは、こうした人たちの、ある特別なグループ、すなわち鶏姦するものだけを言うからであり、ウールニングとは、プラトンの『饗宴』のほかのウラノスという語から出たもので、男が男から刺激を受ける場合を指しているからである。

それはいずれにせよ、とにかく同性愛者の



間にも、男役、女役のような受け持ちがあることは、自然の摂理にのっとっているというべきであろうか。

罪と魅力と

古代に、自分たちの勢力を増すためにも、生めよふやせよの思想が根強かったことは容易に理解できる。したがって、男同士の性行為はひじょうに嫌悪されていた。

聖書のなかに、敬虔なロトのところに滞在した、旅人の天の使いたちを汚そうとしたソドムの住民たちのことが語られている。そのために神の怒りにふれて、ソドムの町は滅ぼされてしまった。今日、男同士の間で行なわれる鶏姦や、動物たちの性行為にソドミーということばが使われるのは、このソドムの町の話に由来している。

また、モーゼの第三章「レビ記」のなかでは、神がモーゼに、次のように言っている。「人もし女と寝るごとく男と寝ることをせばこれそのふたり憎むべきことを行なうなり。ふたりともに必ず殺さるべし。その血はおのれに帰せん」

だが、それにもかかわらず、同性愛ことに男同士のそれは、ギリシャ神話にもあらわれ

ているし、ソクラテスやアルキビアデスなどのエピソードは、そのことの少なくなかったことを証明している。

かれが柔らかき臀のなかで、
かれが喜びあふれし臀を、
すでに愛にこがれたる、

麻羅は、そをば、くまなく清めぬ。

これは、ギリシャの抒情詩人アナクレオンの詩の一節だが、このように、詩にうたわれるほど同性愛の風潮は、強かったのである。

女の場合は1-4が

だが、以上のべたことは、男の同性愛で、女のそれは、ずっと少ないとされている。しかし、古代ローマでは、かなりの流行があったといわれ、ことにアラビアのハレムの女たちの間には、盛んであったという報告がある。

もちろん、そのなかでも有名なのは、女流詩人サッフォーがレスボス島で女たちに求めたという話で、これはあまりに有名であり、サッフォイズムとか、レスビアン・ラブとかの名称を生んだゆえんである。

それにしても、アルベルト・モルが報告しているように、ベルリンの売春婦のほぼ25%が同性愛者だという数字は、驚くべきことで



はないか。

しかも、おもしろいことに、彼女らの同棲生活で、アクティブの側を「おとうさん」とよび、パッシブの側を「おかあさん」といつているのだが、夫の場合は、正常な夫婦生活にしばしば見られるように、妻以外との性行為が許されていたという。といっても、この場合の相手は同性でなく、男と交わるということだが――。

だが、女性というものは、本来、自分の愛の行為などは秘して語らないのがふつうであるし、また、女同士がいっしょにいるからと

いって、そう目立つものではない。したがって、外部的に目につかないので、統計としても事例に乏しいのではなからうか。とすれば、実際には、女同士の愛の交歓というものは、想像以上に多いのかもしれない。

冒瀆者ではない

さて、それが「倒錯」であろうがなかろうが、同性愛というものは、現実存在していることは否定できない。しかも、そういった人びとは、その世界でこそ、幸福を味わい、官能を満足させることができるのだ。

だから、それが、いわゆるノーマルな規矩からはみ出していたとしても、一概に、アブノーマルだと決めつけることには、ちゅうちょを感じる。

エービングもいつているが、同性愛者は、不運とはいえるが、決して犯罪者でもなく、人間の尊厳の冒瀆者でもなく、一個の自然のママ子で、なんら軽蔑を受ける筋合いはないということが言えよう。

なんとすれば、かれらは、現実には、この社会に生まれ、生活しているからである。

△奥村世紀男▽

イチジクの木の下で

“やっぱり男より、お姉様が好き”と妖しく身をくねらせながら、その日チサトとユミはイチジクの木の下で……

獅 々 村 裕
古 正 英 生・え

空の青さを仰いで

学校の便所の裏に大きなイチジクの木が枝をひろげている。その葉かげでチサトとユミは、初めて愛しあった。

家がまずしいふたりは、高校にかようのがやっとで、世間のはなやかな暮らしよりもあまり関係がない。その心のかわきを、おたがいに指を微妙にうごかし、からだを接してなぐさめあったのだった。

感覚は、ほそく、鋭く、強烈だった。

どんなに貧しくても、からだだけで、いつときなこんな強烈な陶酔の求められることが、ふたりには涙のするような喜びだった。

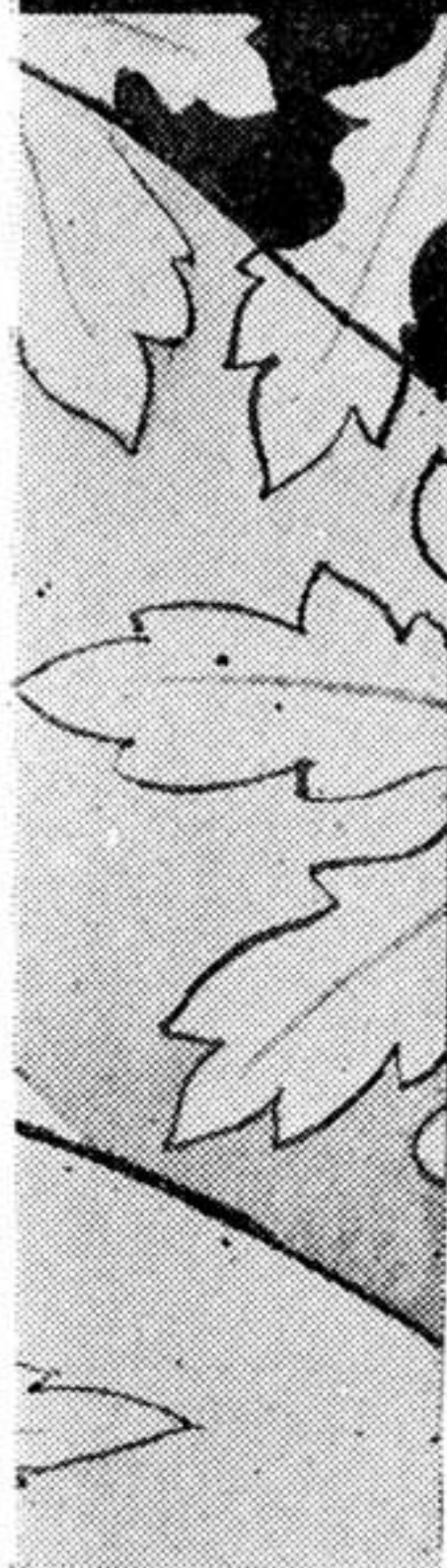
某月某日。ふたりが罪めいたよろこびを知ったこの日を、一生のあいだ胸にきざんで、忘れることがないだろうと思った。

そして、ふたりが立ったまま愛しあったイチジクの木の下も、ふたりには忘れられない土になるはずだった。ふたりは、しみじみとその土においをかぎ、イチジクの木をあおいだ。その日の印象を、空の色までたんねんに心のメモに止めておこうとするようだった。

それから、しなやかな指と指をからんで、校庭のほうへあるきだした。

その日のことは、ふたりの学窓生活を通じて、記念すべき、オレンジ色のプロミネンス(太陽の紅炎)にふちどられたなるだろ思い出にう。そんな感傷が、あまくふたりをゆすった。そして、それからひと月とたたないうちに、卒業の日がやってきたのだった。

「あすこへゆこうね？」





卒業式がおわると、ふたりは、期せずしてひとつの思いにかられ、それを目色にかよわせた。ムズムズと耳のあたりに血のはいあがるようなおもはゆさだった。指と指をむすんで、これからしまろうとするここのよろこびをたしかめあった。

あの日から、まだ、それをしていなかった。

思わしい機会もなかったし、あまりそうしたことにふけるのは、なにかそう恐ろしいことのように思われたからだ。

だが、きょうというこの日を、あの強烈なよろこびで締めくくりたいという願いは、もう卒業式のずっと前ごろから、ふたりの胸の中でうずいていた。別離の哀傷がそれにかさなるだろう。

それは、よろこびをさらにせつなく、かなしく、うつくしいものにするにちがいない。それを通して、もっとしっかり結びつかなければならぬのだ。学窓を出て社会へと巣だち、それぞれ別のコースをあるいても、けっして心はなればなれにならないためにも、そうした誓いをあらたにする必要があるのだった。

その場所——イチジクの葉かげのその場所は、その日のふたりには、不向きだった。

近所の子供があそびに来ていて、そのあたりを占領していたからである。

「こまったわ」

「こまったわ」

ふたりは泣き笑いめいた顔を見あわせた。からだはもう期待でうずきはじめていた。

とどろく胸をおさえるようにして、一步一步校庭の土を踏みしめてこの場所にやってきたふたりだのに、そこがつかえないなんて。

でも、そのくらいの障害で、記念すべきその日の行事ぎぎしをとりやめにする気はなかったのだ。

「どっかほかのところへ？」

「どっかほかのところへ？」

ふたりは目と目で、そう語りあった。

「多摩川の川原にいったみない？」

そういったのはチサトのほうだった。

「そうね。あそこがいいわ」

ユミもにっこりした。

学校は多摩川にちかい郊外にあったので、川原まではあるいて十分ほどでゆける。

十分後にはかっこの場所を捜しだして、例のむつみごとをすることができるとだ。

そう思うと心はずみ、堅くむすばれているものがひとりではころんでくる感じだった。

ふたりは川原にむかって歩きだした。

あまいハミングをくちびるのにせながら――

そして、ときどき立ち止まっては、ニッコリと顔を見合わせた。

春の多摩川原に日ざしはうららかだった。

ふたりが期待していたように、あたりに人けはなかった。対岸の土

堤を、スクーターにのった人がゆっくり走ってゆくのが見える。

「ああ」

「ああ」

ふたりは川原を見渡したまま、もうすでに酔ったようになっていた。川原はかぎりないしとねのように、ふたりに悦楽の場所を提供していた。

ふたりはあらためて指と指を合い図のようにキュッとにぎりあうと、もつれるようにして川原の草むらの中にはいつていった。

そしてほどよい場所までくると、甘美に耐えないようにそこに倒れこんだ。息はひとりではずんでいた。

あんまり呼吸がたかぶって、ふたりともしばらくは口もきけないくらいだった。

しばらくして口をひらいたのはチサトのほうだった。

「きょうはちがったようにやって見るわ」

「え？」

ユミはそれがなんのことかわからないので、きき返した。

「おわかれだもの。いっぱい、いろんなことしてあそぶわ」

ユミにもその意味が通じたので、彼女は、

「アラ」

といって赤くなった。

チサトとユミはどちらがおねえさまというようなハッキリした関係はなかった。

ふたりともおとなしい女らしい娘だった。

そんな同じような性格は、かえって反発しあうものだが、ふたりの場合はそうではなかった。

まるで鏡をみるように、相手のなかに自分をみていた。

人にはいえない心の恥部^{ちぶ}も、ふたりでならおたがいに見せあえるのだった。複性のようなふたりがそうやってむすばれたのは、奇^くしきできごとだった。

そして、やわらかい肉の頂を指でふれあったあの日から、ふたりは一体となったのだった。

でも、やっぱり恥ずかしさはあった。

その恥ずかしさが、むつみごとのすべり出しを、すこしギコチないものにした。

おたがいに求めているものはわかっているくせに、それをいい出すのがなんとなくためらわれるのだった。

あまりあけすけに、はしたないことを要求して相手にきらわれはしないかという懸念^{けんねん}があった。

そうした羞恥の幕を、とりのぞいてみせるのは、たいていチサトのほうだった。同じような性格だが、まだいくらかチサトのほうが積極性をもっていたのかもしれない。

それが、その日はちがっていた。

ユミのほうからすすんで手を染めたのだった。

「まあ」

というようにチサトは目を見はり、ユミの勇気を賞賛し、それを迎え入れるようにぐっとからだをつきだした。

ユミはなかなかうまくやった。

チサトは後ろ手に上体をささえ、はげしく頭をのけぞらせた。目をつぶっていたが、閉じたまぶたのあいだから、空の青さがにじんでくるようだった。そのくらめきに耐えながら、彼女は閉じたまぶたをは

げしくケイレンさせた。

そしてひかえ目なユミの指が、おずおずと動くくせに、とても不良ッぽいことをやってのけたとき、チサトは、

「ウン」

コックリでもするように首をふる、息を大きく吸いこんだまま、しばらくじっと凝結したようになっていたが、

「ユミさん」

吐きだす息とともにオロオロ声で呼びかけたのだった。

羞恥の幕はとりのぞかれた。

自分が求めていることを相手も求めていることがわかったのだった。あたえられたよろこびにはお返しが必要だった。

チサトはぐっと熱っぽく上体を起こすと、その手はユミの太ももを堅くしめつけたガーターの上のあたりへのびていた。

相似形のからだ

あたりはスリ鉢の底のように静かだった。

ときどき、思いだしたように微風がうごいて、草の葉末をそよがせた。風には土と花のにおいがした。それにまじって、かすかにしめった肉のにおいがした。それはひとりのときはとてもおぞましいものと思われるにoidsけれど、相手もやはり自分と同じにおいをもっているのだった。そしてふたりとも狂ったようになって、そのにおいのみなものとをいたためつけ合うのだった。

「チサトとはなれない！」

「ユミとはなれない！」

ふたりはときどき、ウワごとのように、そんなことをいい合った。呼吸を殺した、すばやく、熱っぽいささやきの交換だった。

すると、涙がこみあげるような全身的な感動がふたりをさしつらぬき、ついには声をだして泣いた。

だが、この段階でも、やっぱりまだふたりは未熟な果実だった。

「きょうはいろんなことをいっぱいするの」

チサトはさいしょにそう宣言したけれど、そんなにいろんなことを知っているわけではなかった。

ただ、気もちだけが欲ばって、そんなふうにいってみただけだった。ふたりは幼稚なカギしか持ちあわせていなかったのも、おたがいのとびらを完全にひらくというわけにはいかなかった。

ある種の感覚が、ふたりのからだを裾野すそのほうから浸しつつあったけれど、それだけではない、ということ、ふたりは本能的に知っていた。

あのイチジクの木の下のときもそうだったけれど、それは一つの前

ぶれの感覚であり、その波のかさなりの向こうには、もっと目もくらむようなさまざまな感覚がねむっているにちがいないのだ。

それはどのようなようにして開き、どのようなようにして求めたらいいのだろう。

ふたりは堅く目をとじたまま、かぐわしい花園を模索もさくしていた。

その模索のしかたがおもしろかった。

おたがい自分の花園を探るようにして、相手の花園をさぐった。

それは、手で触れることのできる鏡だった。自分と寸分狂わない位置に、それがあった。それを手でたしかめたとき、相手もおのれの同じ部分に手をふれていた。

動かせば動かす。

静止すれば静止する。

発見すれば、相手もまた同時に同じ部分を発見して、

「あなたはいま、あたしのココに触れているのよ」というように、その部分に触れた。

それが触れることのできる鏡でなくてなんであろう。



いのちのクライマックス

「チサトはあたしのいのちよ!!」
「ユミこそあたしのいのちよ!!」

あのささやきの交換は、いよいよ熱っぽさをくわえていた。
そういわずにはいられない気もちだった。

自分で触れるよりもたしかに、相手は自分のいのちに触れてくれる
のだった。そんな完璧な献身と没我の奉仕が、またとこの世の中にあ

るだろうか。

日は天心てんしんに高く、すこしずつ春の日の時をきざんでいた。

ふたりの女学生が、いのちを産みだそうとする甘美は陣痛は、はて
もなくつついていた。いのちあるかぎり、いのちのよろこびに浸るの
だった。そして、そのよろこびをくぐるように、ヒバリがみじかく鋭
く鳴くのがきこえた。

なおも時がたった。

ふたりのうたげは、まだつづいた。

潮がしだいにみちはじめているのがわかった。



いままで経験したことのない、ただようような気もちだった。そのまま潮がみたされてゆくと、いったいどういふことになるのか見当もつかなかった。

ただ本能の命ずるままに、彫球^{ちようきう}のノミを相手のいのちに加えてゆくだけだった。

突然、多摩川原の天地がくずれおちるようなおそろしいショックがふたりの上にのしかかった。

まったく同じ時期に、同じようにして、あのがやかしい生命のクライマックスがふたりにおとずれたのだった。

「あーっ、ユミさあーん」

「あーっ、チサトさあーん」

おたがい、はるかなものと呼びあうように相手の名を呼びあったが、それは、ことばにはなっていないかった。

「ア、ア、ア」

という奇妙なウメキ声になっていたにすぎなかった。

その瞬間には、そこがどこなのだか、昼だか夜だか、死んでいるか生きているのかわからなかった。

そんな時間がどのくらいつづいたのだろうか。

しだいにハッキリするふたりの意識のなかに、すこし離れた砂利採^{じやり}掘場からダンプカーのおどろおどろしたエンジンの音がきこえてきた。

まるで夢からさめたような気もちだった。ふたりはぼうぜんとして顔を見あわせ、それからニッコリ笑うと、おたがいのひたいに乱れかかる髪を、やさしくかきあげてやるのだった。

多摩川原で——すうっと日がかげりはじめていた。

都会の夜の底で

チサトが梅。

ユミが桜。

それが、ふたりが卒業後べつべつに勤めた会社の名まえだった。ふたりともBG一年生として、勤め先ではまめめしくはたらいだが、それはしよせん、かりそめの姿にすぎなかった。

ふたりがいのちの燃やしあうのは、いっしょにいるときを除いてはなかったのだ。

よく、電話でうちあわせて、帰りに喫茶店などであった。

「きょうは、こんなことがあったのよ」

「あたしも……」

おたがい、勤め先のできごとを話しあった。

ふたりのそんな口調には、勤め先のおとなたちに対する侮^あべつの調子がこめられていた。

妻子をかかえ、味気のない雑務に追いまくられているかれらが、バカッたらしく思われてしかたがないのだ。

それにくらべると、自分たちはサラリーもすくなく、勤め先ではちっぽけな存在だけど、こんなにもスバラしいかくれたよろこびを持っているのだ。

お茶をのみながら一時間ほどムダ話をするのが常だった。

話が終わるころには、ふたりは喫茶店のランプシェードをもれるほの暗い照明の中で、どちらからともなく、暗い微笑をかわしあった。

「いく？」

というように――。

そして、肩をならべて暗くなった町へ出てゆくのだった。

夜の東京には、ホテルにいたりする資金の欠乏している若い恋人たちのための、秘密な野外の場所がいくつかある。

日比谷公園。

神宮外苑。

千鳥が淵公園。

芝山内――。

夜の上野公園もまた、それにふさわしい場所だった。

この風変わりなアベックも、どうかするとそんな場所をうろついた。しかし、さりげなくベンチにいらんで腰をおろし、なんとなく時間をつぶす程度だった。

また、あてもなく大都会の夜の底を、手をつないでウロつくこともあった。

男たちは、そんな女同士のアベックに、何か異質なものを感じた。たしかにふたりには、世間の男たちが入りこむスキのないような奇妙なふんい気があったのだ。

ふたりは、そうやって歩きまわりながら、次の休日の計画について相談した。

そして、よく郊外へ出かけた。

そのなかでも、多摩川原は、ふたりにとってなつかしい場所だった。

「多摩川原――」

そう思い、口に出していっただけで、あの熱っぽいふんい気が、草いきれのようにせまってきた。

その日になると、手製のサンドイッチなどをもって、ふたりでいそ

いそと、その場所に出かけてゆくのだった。

甘くて濃い唾液の味

川原はちっとも変わっていなかった。

草一本、石ころひとつにも、むせかえるようなレスボスの思い出があった。

そんなふたりにとって、休みの一日は、あまりにも早く暮れすぎた。

「また一週間ね」

「また一週間ね」

ふたりはタメイきとともに立ちあがった。

わかれぎわには、人目をぬすんで暗いところで抱擁しあい、たがいの唾液を味わいあった。

若い娘の唾液は、ねっとり濃くて、甘かった。

そのくちづけをもっと甘美なものにするために、ふたりは、

「きのうは何をたべたの？」

「あなたは？」

どうかすると一週間分にもわたって、たがいに食べたものを明かしあった。

それから、きのうの何時何分には何をしていたかとか、何時に就寝したかと、そんなことをたずねあった。

「お通じがなくて、三十分もお手洗いにしゃがんでいたのよ」

「ああ、そのころにはあたしは寢床にはいってジイドの『女の学校』をよんでいたわ。ピーナツの袋をまくらもとにおいといたんだけど、けさになったら、うんと少なくなっているの。高校の弟が試験勉強で

起きていて、盗んで食べたのね」

「ネグリジェだったの」

「ううん。洗たくしちゃったから、浴衣で寝たわ。ホラ、きょねん着ていたアサの葉の模様のね。ことしから寝巻きにおろしたの」

そんな微細なことまで報告しあい、むさぼるようにそれをきいた。

そうすることによって、相手の生活の体臭を嗅ぎだそうとでもするようだった。

そうすることによって、接吻はより味の濃いものになった。排泄や食事や、そのほかいろんなできごとが溶かされている唾液の味を味わうことで、相手と一体になろうとでもするようだった。

そのあげくには、

「いっしょに住みたいわ」

「いっしょに住みたいわ」

きまって口にするのはそのことだった。

それを結婚——ということばに置き変えてみることもあった。

小さなアパートの部屋を借りる。

そこでいっしょに住み、同じものを食べる。できることなら、勤め

もいっしょになりたい。

それがふたりの夢だった。

女の執念の同棲

B G生活が長くなるにつれ、ふたりのうえにはいろんなできごとが起こった。

当然のように結婚話も起こった。

結婚のことなど考えたこともなく、男性に魅力を感じないふたりだったが、周囲から迫られてみると、表面的にはそれをことわる理由がなかった。

それでも、一度、二度——とことわりつづけた。

二十六になり、なんどめかの結婚話がでたときには、もうことわることもむずかしい破目になっていった。

まずそれに屈したのは、ユミのほうだった。

家庭の事情からいっても、断わるわけにはいなくなっていた。

ユミは結婚した。

チサトはレスボスの鬼と化したように、ユミをののしり、呪い、そして化石したように沈黙した。

「あたしは結婚しない。あなたの結婚が破れて帰ってくる日を待っているわ」

呪いをこめてそういった。

その不吉な予言めいたチサトのことばは、適中した。

結婚して一年め、ユミは結婚生活にやぶれた。

「はじめて結婚する女にしては、ひどい





荒れ方だと最初から思っていた。それでも目をつぶっていた。ところが、まったく冷たいじゃないか。あんな氷のような女は見たことがない」

それはユミの夫が、別れたあとで第三者にもらしたことばだった。結婚生活が破れた理由も、それにつきていた。

破婚してユミが家に帰ったとき、チサトは、彼女の家を出てアパートで自炊生活をしていた。

ちょうど夕方だったが、ユミがそのアパートを尋ねると、チサトはひとり夕食のしたくをしていた。

その堅い後ろ姿には、意地でも男となんか結婚するものか、という女の執念のようなものが、にじみだしていた。彼女も、もうユミと同じ二十七だった。

「やっぱり帰ってきたのね」

チサトがいった。

「やっぱり帰ってきたわ」

とユミがこたえた。

「そうよ。そうなるようになってるのよ。あたしたちって、ほかの行きかたはできやしないわ」

ユミはそれには答えなかったが、だま

っていることが、それを肯定するかたちになっていた。

チサトが膳の上をととのえはじめると、ユミは、

「あたしがする」

と、チサトにかわった。

「そう、それじゃあお願いするわ。ひさしぶりだから、あたしビールでも買って来ようかね」

チサトはあとをユミにまかせて使いに出ていった。

その夜――

ユミはチサトの家にとまった。

家へは呼び出し電話で外泊をつたえた。

そんなかたちで、チサトと一夜をあかすのは初めてだった。

寝るとき、スリッパ一つになったユミのからだを、チサトは刺すよ

うに見ていたが、

「あんたはやっぱりダメなのよ。あたしとでなけりゃ――」

そういって、勝ち誇ったようにニヤリとわらった。それから、

「もう二度と、はなれられないようにしてあげる」

かわいたような、ひくい声でいった。

イチジクの木の下から十年たった。

少女は二十七の女同士になっていた。

顔もからだつきも、声も変わっていた。しかし、電気を消し、目を

閉じると、あの日のことがありありとよみがえるのだった。

「もうはなれないのね、ユミ」

チサトがいうと、

「もうはなれないわ」とチサトが答えた。暗がりの中で、地獄の底から湧くようなハスキーのふくみ笑いがきこえた。

サド・マゾ・フェチシストにひそかに贈る 泰西出版資料の2大コレクターズ・システム



第1類

ヌートリクス社出版物の中から
最上の選択で毎月定期的にお手元に
最低の費用で資料をおとどけます。
全30回 30カ月にわたる月ぎめ
コレクション

初回 5000円、以後毎月 2000円

第2類

ヨーロッパの同好者が贈る個人作品の
分割20カ月にわたる大集成
初回 5000円、以後毎月 2000円

○ゴルドン社版短期収集会

5カ月で各種の収集全部がそろふ。
初回 10,000円、以後毎月 2000円

○夏期特別予約

ヌートリクス社小冊子3冊1組の廉価集
(いずれもくわしくは返信料添付のう
えで本社あてお申し出てください)

泰西出版資料会社 横浜市中区北方町 1-67
Sitten-Bild-Verlag KG. TEL (20) 9313

わが恋終わりぬ

葦 田 奈 貴

白い肌に、あたしが求めたものは、——あえぎながら髪をまさぐり、くちびるにふれた。彼女の手が、あたしの首を巻く。女が女を愛することとは、いったい何なのか？



はじめての経験

フト気づいたら、今までまわりでガヤガヤおしゃべりしてた連中があがってしまったて、風呂場に残ったのは、同級のAとあたしだけだった。

「いやだなあ、ふたりまた残っちゃった。早くあがりましょう」

と、なにげなく背中を流してやってるうちに、ひきしまったAのからだに女を感じ、頭のすみで、チャンスだ！ これをはずすな！賭けろ！ とひらめくものがあった。夢中で背後から抱きつき、乳ぶさをつかむ、ハッと身をひき締める、ぐっと手に力はいり、思わず耳に吸いついた。

「ずっと前から、あなたが好きだった。ねえ、許して」

そのささやきにさからいもせず、胸の動気を早くするのといっしょに、自分のからだの中にも、期待以上の興奮を覚えた。ガクガクするような激しい高ぶりをおさえてくちびるを合わせたままタイルの床に倒れ、早急に相手を求めていた。やっと感覚の鋭いところを探り当てた直後、ふたりとも力いっぱい抱きあい、湯気の中で全身を貫く瞬時の快感を、身を引きつらせながら受けていた。

それが、あたしの始めての経験だった。

体験はなかったが、いつも自分のからだへ、やっтерることを、相手に行なってみただ。

——ノートの書き出した。



姉の死後、残された日記代わりの大学ノート二冊が、あたしの運命、生きてゆく道を決づけた。純日本的な静けさと、底に秘めた情熱を感じさせる姉には、何かひかれるものがあった。

その姉が、父母の言うとおりに見合いして、結納まで取りかわしながら、あたしにだけノートを残し、火を噴く火口へ身を投げたのだ。二冊のノートには、ぎっしりと、女でありながら女を愛する自分の姿、女を求め苦悩する心が書かれ、花嫁衣装を一生着ないで生きようと思ひ決めながら、それができない自分の弱さを知ったからには、この世に骨の一片も毛の一筋も残さず消えることは、せめても最後のプライドなのだ……と結んであった。

思いもよらない世界があることを知らされ、改めてあたりを見回してみても、今までなんとも感じなかった級友たちに、どぎついセックスのにおいを覚え、ギクリとしてる自分を発見した。

姉のノートのなかの、女をたたえ、女体を賛美する文に、あたしの心は犯され、染色されていった。

姉の志を継ぐなどという殊勝な心ではなく、姉の心をそっくり移りたててしまったように背徳の世界の妖しさに、いつか魅せられてしまっていた。

体験を得たあたしは、大胆になり、そんなあたしに、女子高校の寄宿舎生活は、楽園のようなところであった。おりおりの行事に男役の二枚目を美しく演じられるあたしのまわりには、気をつけてみると、望むとおり動いてくれる女の子の姿が、意外にも多いのを知った。

女体への刻印

風邪がみで学校を休んだ子を見舞った。二階の一室、「早く元気になって出ていらっしやい、あなたの明るい顔が見えないと寂しいから」「あたし、もう全然元気なんです、お

ネエサマにそんなに思われてるなんてしあわせ」ほおを染めてうつむく子の、青々としたうなじのかわいさに、ぱっと抱き込んで、くちびるをおしつけてしまった。思いがけぬ事態に、腕の中で身をふるわせている。

「かわいい、かわいい子、もっともってあなたがほしい！」

激しく見おろす視線の中で、小さくうなずく子の見返すひとみ、寝巻きを脱がせ、裸にしていく。身をかくして、されるままになっっている。最後のものへ手がいったとき、泣きだしそうな顔をしたが、さからいはいしなかった。

そっと寝かせた上にかぶさり、接吻し、優しく愛をささやきながら胸をさぐり、静かにすべてをまさぐり求める。

初めは、身じろぎもせずにいた子も、少しずつ呼吸を乱し、しっかり見つめていたひとみをとじ、緊張にかたくなっていたからだも、指先の感覚をこらえ、もだえながら受け入れていた。

幼いながら、濡れてきた愛の泉の奥を求めて、あたしの指に力がいったとき、声にならないうめきをもらして、あたしの下の肉体がひきつった。そして、不注意にさらに求め

ようとしたあたしは、さえぎられた。

「やめて、痛い、おネエサマ」

とっさに、なんであるかを悟ったあたしのは、わき上がる喜びでいっぱいになり、残忍な勝利者の思いだった。

「かわいい。ねえ、だれでも初めは、そうなの。がまんして、あたしのために」

うむを言わず手動きを早くする。かく目をつぶり、荒い息を吐き、うめきをもらす口。のけぞり、しっかり握られたこぶし。ピクピクけいれんする四肢。

苦痛のためのこれらのことは、快楽の時のことと錯覚させるほど酷似していた。

狂気に近い荒々しさが、あたしをつきぬけたあとで、別人のような優しさが、あたしを満たしていた。

ぐったりした子のあと始末をしてやって、白いハンカチを色どった汚点を確認し、あたしは満足した。

その後、憑かれたようにあたしは、シーツをよこす血を求めた。

処女膜を破るという行動、女体への初めての刻印を自分の手でおしたという、それだけのことに、ひどく満足し、ひとりよがりの優越感をすらいだいた。

意外な抗議

力をこめたなら折れてしまいそうな細いからだ。ピンク色の乳ぶさが恥じらいを表わす。ぱっと吸いついてやった。ハッとしたらしかったが、じっと動かなかった。きらきらと輝くひとみが、あたしの動きを追って走っていた。

何人めかの女体を前に、慣れたあたしの指は、女の女を探り、荒い呼吸とうごめくからだを計算に入れて走る。

「少し痛いかもしれないけど、許してね」

こんなことばがささやかれ、あたしの全神経が集中された指の動きが終わる……自信をもって笑いかけるあたしに返された冷たい顔。今までにはないことだ。うろたえる。

「おねえさま、見そなたわ。あなたは、女が女を愛する心などわからない人だったのね。男の子のようなスタイルはしてるけど、心は女だと思っていたのに、違った……」

「なぜ？ あたしは女の子よ」

「学校のだれもが、おねえさまを男の代用品として欲しているのね。けっきょくはそれだけ、女として女を愛する愛情など、わかってないのよ。でも、あたしはイヤ。男のように

見せかけた心で、行動で、ことばで愛するな

ら、なんの意味もないわ。外見はどうあろうと、女でありながら女体の神秘的な美しさに魅せられ、背徳の夜に甘美な陶酔を求めてやまず——そんな女であることに誇りを持っていくのがレスビアン。あなたはレスビアンじゃあなかったのね。不満そうな顔をしないで……おねえさまは、あたしを求めた。はっきり言えば、あたしのからだを、もっとずばり言え、処女を求めたとき、少しでもあたしへの優しさといわたりがあった？ 愛情があったの？ 女は、愛がなければ肉体を欲しないわ。あなたは、愛がなくても、ただ肉欲だけで、甘いことばを口に出せる。それは、男の性情よ。あたしへの行為の最中、あなたは笑ったわ。

あの顔を、おねえさまは、試合中、バドミントンでスマッシュを決める時やるわ。ニタリと、相手への勝利と完全な征服を含めて、手中のえものへ舌なめずりしてるような、残忍で冷酷な笑い。あのなかには、ひとつかけらの愛情もない。相手へのいたわりと優しい愛がなければ、レスビアンじゃあないのよ」「わかったわよ。どういわれようと、あたしはレスビアン。かってに変な理屈をつけない

でちょうだい」

思いがけず弱点をつくことばに狼狽しながら、あたしは、痛いほど、その子のことばを胸に刻みこんでいた。

言われたとおり、あたしは、男のまねをして女を愛していたのかも知れない。

まねではなく、女として女を愛するのでなければ、意味はないのだ。改めてあたしは、その思いをかみしめ、卒業までの間、ぴたりと女あさはなくなった。

再会した人は？

遠慮がちな呼び声にふり返った。

「ああ、やっぱりあなたは千恵さんの妹さん……」

声をかけたのは、たしか二、三度姉のアルバイトで会ったことのある、姉の同級生だった由紀子だ。誘われるまま、なつかしさにコーヒーを飲む。

「由紀さん、今どうしてるの？ たしかお家は東京ではなかったでしょ？」

「家からは帰れ帰れって言われるけど、東京を離れるのがイヤで、ひとりでアパート暮らしのBGよ。あなたは？」

「家で反対したけど、かってに出てきて大学

受けちゃった。いま三年……姉貴のあと継ぐ

気でもないんだけど、姉貴の住んでた東京だと思つと、離れがたいの」

「姉妹、仲よかったのね。うらやましい」

「ところが、姉貴に死なれるまで、あたしたちそんなにうちとけて話したこともなかったの。もっとも、あたしが高校三年で、四歳年上じゃ、共通の話題もなかった。それに、姉貴は頭がよかったから、あたしなんか問題にしてもくれなかったけど。自殺したあとで、もっと姉の心を、姉のいつも考えていた心を知っておきたかった。なぜ姉は、あたしの中へ、もっと多くの自分を残してくれなかったのかと、くやしくて……」

あたしのことばを聞きながら、微妙にかけりを見せ、遠い目をする由紀を見て、「ああ、この人と姉は愛し合っていたのではないだろうか？」という疑問を抱いた。

「もう五時か。お店へいっしょにきませんか？」

「お店？」

「ええ、夜、新橋のバーでバーテンやってるんです。学校よりも、こっちが本業みたいになっちゃって……ママさん、知ってるんで、てつだってるうちに、なんだか抜けられなく

なっちゃったんですよ」

愛し合ったが……

ジンフィズのグラスをあけながら由紀が、

「あなたって、本当に男の子みたいね」

「お客様によく聞かれるの、”どっちだい”

ってね。合あいの子ですって答えるの。男の子と女の子の合あいの子ですってね」

じっと見つめる人の視線が、あたしを追う。

姉のおもかげを、顔立ちも姿も似ていない妹から見いだそうとするかのように……。

肩に手をかけ、いたわってやりたい心がわく。

「あたし、もう帰る」

「じゃあ、あたしも今夜は帰りましょう。少しお酒がまわったようだから、送ってあげる。それに、もっと話がしたいから」

ママの非難を含むひとみがそそがれる。町の喫茶店で知り合って三年近く、別に強い愛情もないのであろうけれど、男と寝たあとで「やっぱりあんたが好き」と、口なおしに抱かれにくるママに、女の悲しみをかき出していたのだった。

野心があってアパートへ送ったのではなかった。それが、姉の話で涙を落とす由紀を見

て、ふきあげるような愛を覚えたのだ。この人を姉に代わって、いや姉以上に愛して、しあわせにしてやりたい、この人は今まで不幸だったのだ……。

「由紀さん！」

と言うと、抱きしめていた。

「ああ、あなたもやっぱり……」

由紀のことばは、運命の皮肉さと、宿命の非情さに、悲しくふるえていた。抱かれながら由紀は、若々しい腕と息吹きの中で、死んだあの人の思いをなつかしむ心で、拒こむことを忘れ、動きのままに目を閉じていた。

あたしが、姉の妹だからなのか、それとも、女の生理の悲しさからなのか……あたしの腕の中で、今まで接しただれよりも情熱的にあたしの求めに答える由紀だった。そんな由紀が、哀れにもいとおしかった。

愛の時の過ぎ去ったあと、あたしは、由紀の胸をまさぐっていた。そんなあたしへ、
「あなたって、本当に男の子みたい。あの人は違う。全然違う。あの人は、どこから見ても申し分のない女性だった。すべてが女。だれに言わせても非の打ちどころのない女性だった、それなのに、女が好きだった」
「姉貴あねさまのこと、よっぽど好きだったんだね」

「生まれて始めて愛した、あの人を……」
由起のことばに、姉へのほのかな嫉妬しととと羨望せんぼうがあたしの心の中を横切った。

「ワタシも、今まで人を愛したことがなかった……そんな自分を捨てて愛してみたい由起さん、あなたを好きになりそう。あなたにとって、姉貴の代理でもいい。でも、姉より以上に愛したい。姉貴に負けやしないよ」

そのことばを押えるように、由起のくちびるからは微笑が消え、切りつけるような冷たさとともに、

「あの人は、あたしを愛してなんていなかった。愛されてると思ったのは、あたしのうぬぼれ……あの人は、自分の思いどおりに動く女だったら、だれでもよかったの、あたしでなくとも……」

「なぜ。そんなこと、聞くのイヤ……」

「あの人は、自分ひとりの誇りほこりのために死んだの。自分のプライドのために死んだのよ。三年近くいっしょにいて、あの人を愛してたあたしの存在など、あの人にとって、なんの価値もなかったの。自分自身しか愛さない人……それでも、あたしは好きだった。いっしょに死んで」と言っただけだった。あの人となら、死ぬことなんかなんでもなかった

のに。すぐあとを追って死のうと思った。でも、あたしのためには、一片の紙切れすらも残してくれなかった人、そんなあたしの死なんか、あの人のにとってなんの意味もない。そう思ったら、死ぬにも死ねなかった……だから、今までずるずると生きてきたの、今でもあの人のところへ行きたい……」

ふっとことばがとぎれ、大きな美しいひとみから、キラキラと夜のやみに涙が流れた。

ためらわせたもの

「初めて、あの人を愛して、あたしのすべてをあの人にあげた。あの人が笑えといえは笑い、泣けといえは泣いた。あたしの身も心も、あの人の所有物……ほかの人を好きになろうと努めてもムダ。くやしいけれど、からだもあの人を忘れられない。せめて瞬間でもいいから忘れたい、と遊んだ。ご乱行もしたけれど、だれもあたしを満足させてはくれなかった。同じことをされても、もう少しのところで最後の感覚が得られない。なにもかにもあの人でないとダメ……あの方は、あたしをこんな女に育てておきながら、なんの未練も残さず、ひとりで死んでしまった。そんな冷たい人なのに、今もあたしの心に、肉体に、



あの人の顔、声、体温までが、なまなましく刻まれているなんて……」

絶句した由紀のひとみが、あたかもそこにいる人を求めるような悲しい目の色だった。

ついいつとき前、ワタシの腕の中で情熱にもえ狂って、あのような抱擁は、なんだったのだろう……。

「じゃあ、さっきのは？」

「ごめんなさい。やっぱりダメだったの……あなたの若々しい新鮮さにひかれ、あの方の妹ならば、今度こそはと思ったのに、途中から冷えてくる、いつものあたしを覚えたの。でも、あなたを失望させたくはなかった。演技だったの。……真剣なあなたの心がわかったから、演じなければ、ならなくなったの……はじめからそんなつもりではなかったの、ごめんなさい。わかってほしい……」

全身にしみ渡る新たないとし

さどわき上がる闘志に似た愛を感じた。「この人を最後の最後まで愛し抜くんだ」と。

「ワタシ、やる。由起を愛するんだ。姉貴になんて負けやしない。姉貴にやれて、ワタシにやれないはずがない。どんなことでもする。おしえて！」

答えを得られるはずもないことを口にしなから、ひとりの女をこんなふうにし立て上げた姉に対して、今はライバルとしての強い嫉妬さえ覚えた。と同時に、狂おしいほどの愛が、由起のくちびるをふさぎ、またくちびるを求める。

「ねえ、お願い……縛って……」

思いがけないことばがもれた。すがりつくようにからむ目。必死に激しく見つめるひとみだった。そのひとみにひき込まれるように手にした赤いヒモ……寝巻きのもでもあろうか……なおもすがりつくヒ・ト・ミが、胸に組んだ手首に誘う。

夢中で手首にかけたふたまわりのヒモ、その手を頭上に……そして、さらにくちびるを求めた……想像外の事態にとまどい、心の一部が否定していた。その思いを振り切るように荒々しく、由起の肌へ接吻、胸に顔をうずめ、女の甘いおいをむさぼり吸った。

「足も……そうされないとダメ……」

消え入るような声が、またあたしを追う……「もうこれ以上はできないんだ……自分でも望まない粗暴の行動に、恐怖に近い戦慄を覚え、一瞬たじろぐあたしに、由起の望むとおりすることが、由起を救い、由起とあたしの結びつく唯一の手段なのだ」と心の叫びに励まされ、ぐるぐると縛り上げる。

じっと見おろすあたしの足の下で、両手両足を縛られ、うごめく女体。何もしないのに、縛られたというだけで反応を表わし、せつなげに身をもだえるものなのか……

目を閉じ、くちびるが誘うように赤く、あたしの次の手を待って、ひとりでもえてゆく……抱こうとかぶさりかけたあたしは、あまりにも動物的なあさましい姿に、ためらってしまった。抱くんだ、愛しているのなら……「なおもちゅうちょしているあたしのけは……」を感じて、由起が目を開く。が思わずその視線をさけ、あとずさりながらはき出した。

「愛してる！ でも、できない。ワタシは、由起を縛ることなんか……許して……」

飛び出す!!ノーパンティショウ

★今迄誰も手がけ得なかつた女体の秘密をあます所なく捕らえたステレオ界前代未聞のズバリポーズ!! さらけ出す女学生達の温泉湯面を露出撮影!! 湯みきつた湯に映するむっちりとした魅力のモモきゅんときゅんしたままのステレオの魔力!! 神に身をくわらせて嬉し泣く身も心もとろける様子をクローズアップの体当り演技!! 男子禁制のまばゆいばかりの桃源境を貴方の眼前で再現!! 他秘密撮影演出撮影等各種豊富!! 今評判のステレオも大半が雑誌の口絵写真程度ですが本作品は当会員の特別頒布品の中より、平々な物を選んで一般分譲する本会にお買上げの方は準会員とし、特典あり正会員は準会員中より厳選し個人的ご希望に必ず市販のステレオに不満の方始めの方もぜひ当会にご加入下さい。

7組入千円 20組入二千円 40組入三千円

右は特殊眼鏡一台付千円の価格必ず書留にて型録ナシ会員の皆様へ長い間迷惑をおかけ致しました。此のたび漸く営業停止期間が過ぎましたので紐いも新たに発足致しました何卒引き続き寛くお願ひ致します。従前通り会員特報隔月発送ご通信は必ず私書函宛え!! 大宮局私書函第二十三号

(ステレオクラブ改め)ステレオ趣味の会

ずに「さようなら」とび出していた。

別離のことば

「あさましい」

瞬間起こった嫌悪で、由起を抱けなかったことから、毎夜々々めっちゃめっちゃに飲み明かし、強い悔いとともに、苦しいまでに由起への思慕は大きくなっていった。

「もしもし、由起です。あたし、今度家に帰って、結婚することにしました。あなたのねえサマは、結婚が自分への敗北とおっしゃったけど……あたしは結婚します。そして、最後まで男は愛さない……ただこれだけが言

「いたかったの……さよなら」

無情に切れた受話機を手にしたまま、あの夜から二カ月近く、由起のトリコになりながら、その後一度も会うこともなく、思いがけない電話を受けとったのだ。

由起のことばを一言も返せず、うつろな頭の中で、だが、これだけははっきりと感じたのだ……由起は、やっぱり姉の思い出から抜け出せず、嫁ぐのも姉への面当てなのだ……死んだ姉へ、女の意地を通すほど、あの人は姉を好きだったのだ……ちくしょう、あたしは、あの人が好きだった。生まれてはじめて愛したんだ。

心とからだの落差

「まだいたの、学校へ行かないの？」

「そっちだって、仕事さぼってきたくせに、人のこといろいろうさいなア」

「だって……」

そう言いながら甘えるようにベッドの上のあたしのところへきたのは、高校の時のクラスメートの優子だ。この前、あたしと由起と的一件でいらしてらるちょうどそのころ、同窓会の用件で尋ねてきた。若々しい明るさに、妙な嫉妬を覚え、もえ上がる欲望のまま

に、いやがるのを無理に自由にしてしまった。その後はずるずると、優子のほうであたしに夢中になっている。

近づいてきたのを、有無を言わず抱きしめて、くちびるを押しつけ、ベッドへ倒した。舌をからめて誘い、小きさみに歯を立ててやる。いやいやをするようにしながら、早くもからだでこたえていた。

その反応を、急に腹だたしく感じ、ぱっと突きはなすと平手が小気味よくホオで鳴る。打たれたところを手で押えながら、うろたえる優子を見て、理由のない狂暴さが、あたしを襲う。

グイと近づき、ワンピースのジッパーを荒しくはずす。下のものを次々にはぎとる。

ぱっと、そばの皮ベルトの細めのものをつかむと、物も言わず、まっ正面から胸をめかけてふりおろしていた。

快い手ごたえがあり、悲鳴をのみこみながら胸をかばう手。その手を無理にはらいのけ、またふりおろした。

病院のベッドのような、鉄さびの古ぼけたベッドとはげ落ちた汚点だらけの白い壁の部屋は、ちょうど残虐の場にふさわしい……。ベルトをおそれ逃げながら、おびえたよ

うに身をすくませる優子……赤いすじの二本はいった白い胸。壁に追いつめ、口を吸う。さらに、ベッドに引きずり、うつぶせにさせると、背へ、臀部へと、ベルトを飛ばした。打つたびにピクピクと身をよじる。

なおこれでもかと打ちおろすベルトの下で、グッタリとなった優子を抱き、あえぎながら髪をまさぐり、くちびるにふれた。安心したように首へ回してくる手をグイと締めつけ、ベッドの金具へ……さらに足を縛る。

「いや！ やめて、いや」

哀願のことばを無視して、濡れたくちびるが肌をはう……あたしはもう、白い肌を痛めつけ、苦痛にゆがむその姿に、狂気なまでの喜びを感じていた。

縛りつけたのが由起であればと思いつつ、優子の肌にしつこくからまる……。

不自由なからだで、今はもう観念したかのように、声も立てない優子だった……。

激情の去ったあと、全身を貫く由起への恋情……おそかった……あの夜、このことができたなら……由起はあたしのものだった。もう二度と、この胸に抱くことがないのだ。あたしの恋は終わった。まだ、荒い起伏をみせる優子の胸に、涙のすじが描かれた。

ほも禁秘帖 ⑫

レスボスの精神愛と愛の技術

美少女の美を愛す

長いあいだ愛読していただいた「ほも禁秘帖」も、
今回でひとまず^{かくひつ}擱筆するにあたり、さいごに女性間
のホモ・セクシュアリティについて、すこしく触れて
おきたい。

ただ残念なことに、クラフト・エビングやアルベ
ルト・モルなどの同性愛研究の権威が、女性同性愛
の材料は、男性のそれに比してきわめてすくないと
いつているように、わたしの場合も、ご多聞にもれ
ず、女性同性愛者から直接に知りえたデータという
のは、わずか数例にしかすぎぬという貧弱さなので
ある。

しかも、わたし自身が男性であるところから、女



かびや・かずひこ

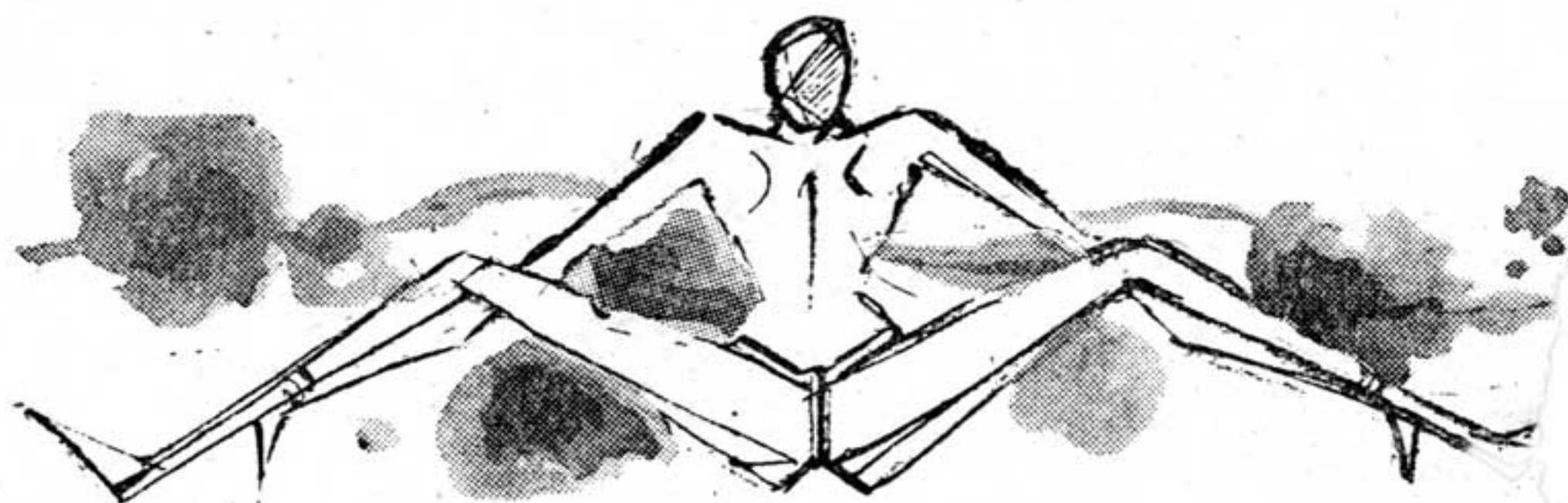
性のホモの深部的な面に、まだ明確に理解できぬところがあり、いわばメクラさぐりの状態なので、マトはずれのところがあるかもしれぬことを、おことわりしておく。

さて、わたしは、いままで多くの人から引例されつくしたエビングやモルやヒルシュフェルトなどの調査を羅列するよりも、現在、わたし自身の懇意にしているふたりの愛すべきレスビアン女性を中心として、女性ホモの心理や生理を分析してみたい。

そのひとりR子は二十一歳のBG、スポーツをやっているだけにガッシリとしたからだつき。少年のような清純な童顔。乳房はふつうのこのとしごろの女性なみに発達しているらしい。どちらかというと無口で、重厚な感じである。短髪、つねにズボンを着用している。

性格はまだ少女趣味をぬけきらないような夢みがちのところがあるが、愛のころはかなりパッシブネートで、ひとりの相手をいつまでも恋いつづけるタイプらしい。

R子は高校を出たばかりの十八歳のとき、わたしの書いたものをみて手紙をよせてきてから、いままで二十通ほどの書信を送ってきているが、その一つに、自分の生い立ちについてしるした次のような一節がある。



わたしの生まれる前、父も母も——とくに軍人の父は——男の子を望み、男の名まえをいくつも考えていたそうです。でも、女の子でした。それから幼年時代、わたしは男の子の持ち物に異常なほどのあこがれをいだき、とくに兵隊には病的なほど氣をとられていたそうです。

「さびしさの泉」(筆者注——作者の名は失念したが、同性愛の女の作家がかいた自伝的小説)の主人公スティヴンの幼年時代、少女時代のくだりを読んで、わたしはなにか決定的なものをみた感じでした。わたしは生まれる前から、なにかそれらのものを胎内で感じとり、女として生まれる運命にたいして、反発をもっていたみたいで、恐ろしく思いました。

まさにR子のいうとおりで、世にいう胎教というものに、ほんとうに反応があるとするならば、彼女は性こそ女であったが、両親の望みをうけて、「男性」のころをもって生まれたのかもしれない。

フロイド流に解釈すれば、人間は本来、両性分を含んだ雌雄団体であるから、彼女の場合は、その男性分子を多く含んで生誕したわけだ。

そして、それゆえにこそ、R子は長ずるにおよんで、女性にたいして思慕の情をいだくようになった。

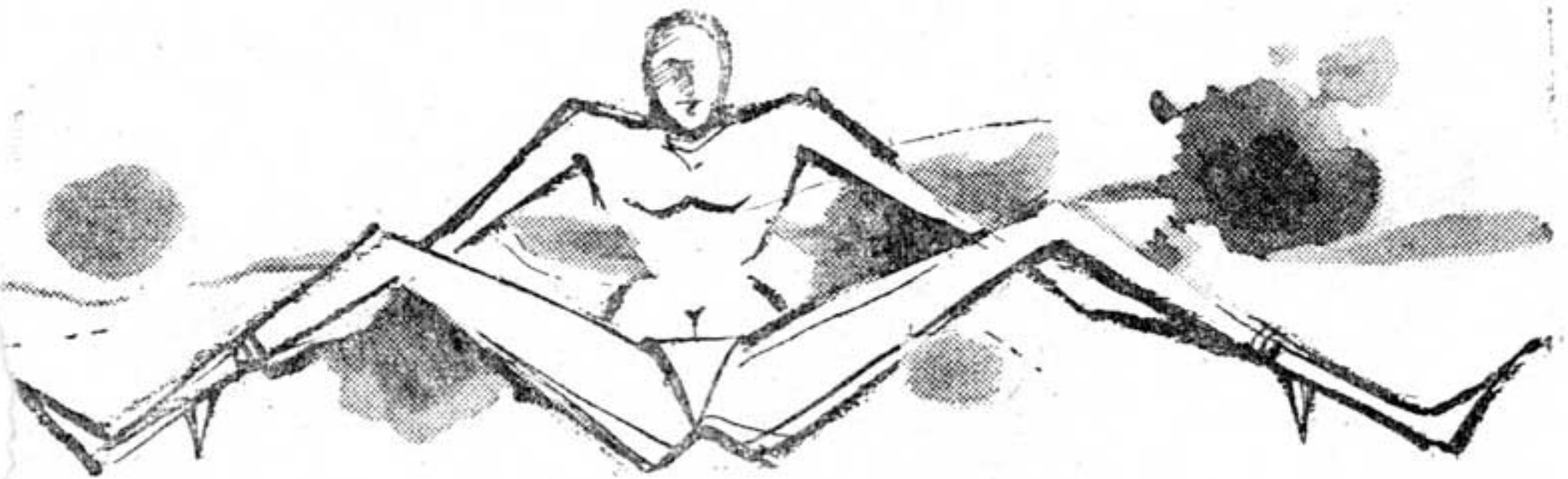
わたしは中学生のころから、自分が異常なまでの同性にたいする関心をもっていることに気づきました。いえ、正確に言えば、小学校の五年のときからでした。一つ上の美しい上級生にあこがれの心をいだき、ある日、思いきって手紙をわたしたのです。

中学時代は、そのひとをはじめとし、ふたりの勉強のできる上級生を、いわゆる「おねえさま」という存在として交際しました。それから二年のときは、他校から転校してきた生徒と友だちになりました。一ときとして家にじっとしていられないくらい、激しいものでした。

高校時代は、一年のときは四人くらいの女の子に夢中になりました。二年のときはふたり、三年もふたりでした。いずれも、そのひとたちの美しさには、だれも否定することはできません。

ですが、わたしたちは一回も肉体的には関係がなかったのです。もちろん、接吻もしたことがありません。それでも、わたしは美しい女のひとには、すぐひかれるのです。そしてそれらを経験したことはありませんのに、女のひとに抱かれたいという思いをけっして、すてることができないのです。(さいしょの手紙から)

このように、いかにも女学生らしいロマンティック



クな、プラトニックな恋ごころに、R子の同性愛は出発している。

わたしは思うに、R子が相手の女性を美しいと形容しているのは、「美しい女性的な女性」という意味なのではないだろうか。というのは、彼女は同性愛における「男性型」と、わたしはみているからである。

「女のひとにだかれない」と受け身の欲求のかたちで書いているが、それはそのまま裏をかえして、「だきたい」というアクティブのころだとわたしは思う。もっとくわしくいえば、「だかれてだきたい」という気もち。その「だきたい」のほうがつよいのではないだろうか。

もっとも彼女のような男性型でも、ずっと年長のマダム型の女性にたいしては、「愛されたい」というパッシブのころがあって、そのことは彼女自身も告白している。

恋と離反と

R子は二年ほど前、上京してきて、そのときはじめてわたしは彼女と会った。そして彼女はしばらく東京に滞在していたが、郷里に帰ってから一ト月ほどして、ひとりの女性と熱烈な恋をしたことをわたしに報告してきた。

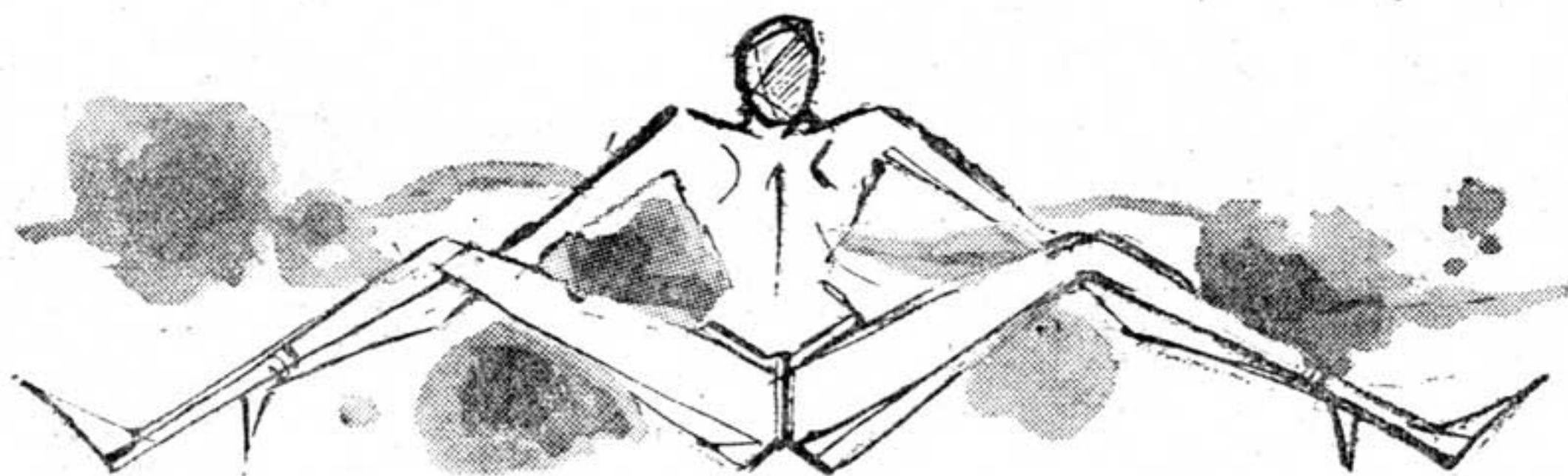
相手の女性は一八歳の看護婦ということだった。

そのときわたしは彼女のからだをみました。なかば強引に、彼女もわたしのからだをみました。どうしてこんなことをするの、と彼女はききます。好きだから、とわたしは答える。なにか感じるの、と彼女。わたしははっとして、しばらくだまってましたが、いや……と首を横にふらねばなりません。だったらこんな無意味なことしないほうがいい、と彼女はいうのです。あなたは？とわたしがききましたら、さっきちょっと感じたっというんです。

その次の日、わたしは喫茶店できました。どんなときに感じるのって。あなたを愛しているときて、彼女は答えました。

彼女の口からときどき、看護婦として当然知っているはずではあっても、専門的すぎる性に関することばがとびだすのです。その朝も、乳ぶさのことで彼女はいいます。こうして乳腺を刺激すると、子宮内の性的ホルモンが分泌して興奮するのっていいながら、彼女はわたしの胸に顔をおしただまま、わたしの乳ぶさへやわらかい愛撫をくりかえします。

わたしは彼女のいう精神的な愛情のみを信じる態度に、ある反発をもっていました。でも、この



朝、わたしは肉体的なものより精神的なものが、どれほど真実で堅実な愛か知ったのです。

わたしは愛撫に自信をもってました。でも、今まで彼女はなにも感じなかったというのです。わたしは愛撫されたことのない人間です。欲求不満のため、わたしは上手な愛撫が相手にできると思っていました。ところが彼女は肉体的な愛など問題にしてないのです。わたしはいままでわたしの指の動きで、彼女がわたしの知らないよろこびを知っていると思ってたのです。そのことに半分嫉妬しとしていたのかもしれませんが。その意識がわたしを不具かたがにしてました。でもそれがその朝破られたのです。

わたしたちは今、ふたりでいっしょにする生活のことで頭がいっぱいです。でもわたしたちがいっしょになったら、ふたりでだまってすわってて、そのまま飢死してしまうかもしれません。ふたりでいれば空腹も時のたつのも感じないのです。

じっさいにわたしは、いまの幸福のまま死ぬことができたらいいます。凍死はわたしの以前からの主張説です。クスリをのんで、山の中で雪をかぶって、樹氷のかさなる林で死ぬことはすばらしいでしょう。

でも、そのまえに、いちど先生に、わたしのアミーをみていただきたいと思います。どんな少女

だとおっしゃるのですか？ わたしよりも小さく細く美しい少女です。

便箋^{びんせん}十数枚に、男のようなシッカリした字体でギッシリと書かれている手紙から、ようやくこれだけを書き書きたが、そのどこから、R子のいじらしいまでに純真な、情熱を賭けた恋であることがよみとれる。

もちろん年ごろの彼女であるから、性の欲望も大きかったのだろうが、そのことがはっきりしるされてないのは、それ以上に大きい彼女の精神情熱が、それを圧伏^{おさ}伏^せしてしまっているのだとわたしは思う。

だが、これほどの激しい恋愛も、やがて破れると気がきた。少女がR子の手から飛び去ったのだ。町かどのポストの前でサヨナラといって……。

その理由はR子の手紙にはっきりと書いてない。おそらく六カ月ほどの恋愛期間中に、ふたりの間にいろいろ心理の曲折があつてのうえのことだろう。ただわたしは、R子と少女の場合のみでなく、すべてのレスビアン^{レズビアン}の恋愛の場合として、次のようなことが考えられる。

それは、男性型レスビアンの愛の相手となるパッシブ^{パッシブ}の女性は、多くの場合、いわゆるノルマルな者だが、ある空白のとき、チャンスがあつて同性愛する。そして、そのよろこびに酔つて、これこそがほ



んとうの恋だと彼女は思う。

だが、彼女のからだは、じつは異性に向けられるべくできているのだ。そのことを彼女は、いつかはからだでかこころでか知るようになる。ここで彼女は、あいてから去るだろう。その離反は、もはや好きとかきらいの問題ではなく、本能なのだ。

そこに男性型レスビアンの悲劇がある。その悲劇にいかに対処していくかは、そのレスビアンの知恵^{ちけ}の問題である。

R子の知恵は、哀別の苦悩によくこたえていくだろう。しかし、いちずの彼女は、離れ去った少女の幻影を思いつづけながら……。

R子はいう――

どうして、性というかたい原始的な壁をうちやぶり、もっと人間的な、すべての人間同士の、男と女、男と男、女と女同士の結びつきが認められないのでしょうか。今は不完全かもしれない、だがいつか、それらの結びつきがごくしぜんにみとめられる時がくることを信じます。

レスビアンに仕立てたもの

N子も、二年ほど前から、ときどきわたしに手紙をよせてきた女性である。

彼女はつい最近、東京で就職することになって上京し、わたしを尋ねてきた。

二十歳というが、年齢よりは二つくらい若くみえる、小さくかわいげな顔だち、小柄なひきしまった肢体の少女だ。

こんな優しい外見に似合わず、N子はレスボスにおける男性型で、断髪、ほそみのズボンというボーイ・スタイル。

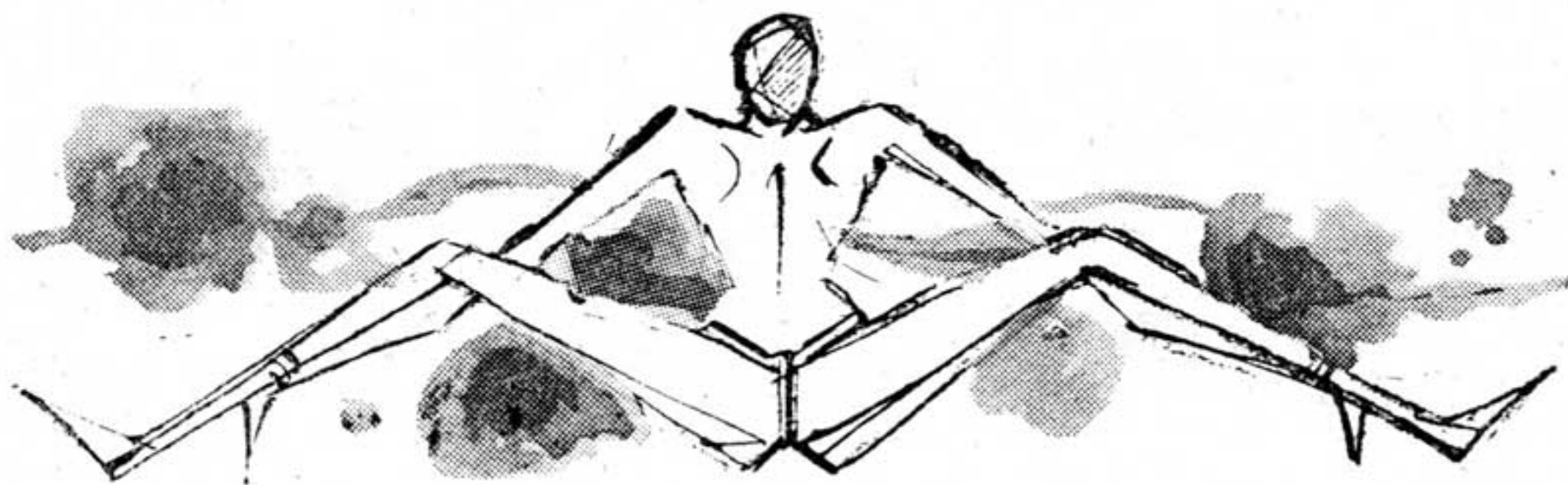
「これで女の子をひっかけようというコンタンですよ。ぼくはビートですから」

とハキハキといって、笑声を天井にふきあげる。

こんなふうにはひとりでも悪がっているが、じつは悪どころか、ものごとに淡泊な、純真な性格のもちぬしである。しかし心の底には、火花を散らすようなはげしいものをもっているとわたしは見た。八月号(本誌)に紹介したN子の手記には省略したが、あの冒頭には次のようなことがしるされている。

わたしの記憶は、アカシヤにかこまれた中学校からはじまる。

学校は男女共学であったが、男性には全然興味がなかった。なにかやさしいやわらかな、お姉さま的のひとがほしかった。母は水商売で顔を合わす時間は短かったが、母の愛情に欠けていたとは思わない。母とふたりきりの生活で、わたしにと



って母への不満はなんにもなかった。現在も母はわたしにとっては絶対であり、すべてである。わたし自身よりも愛することのできる、ただひとりのひとである。

このように母を愛しながらも、わたしには母には求められぬ女のふんい気、女性というものがほしかったのだ。

前項のR子も幼時から母なる人の手一つで生育されたのだが、N子は生まれたときから、父というものをまるで知らず、親といえば母ひとりだったとい、それだけに母なるひとへの愛情は強いらしく、ここに示した一節のほかにも、母にたいする思いやりのことばが、手記中にたびたび現われてくる。

このことから推察して、わたしは、N子の同性愛は、母にたいする尊敬や愛情のところが、因子の一つとなっていると解する。すなわち、幼時から母への敬愛の情が、脳裡につよくきざみこまれ、それが定着したまま、気が異性に移らないで、同性を慕うようになったとみるのだ。

もう一つは、N子自身もいつているように、ナルシシスつまり自己を愛するあまり、自己の影像ともいうべき同性のみを愛の対象とするようになったこと。さらに、も一つは、小学五年のときに、近所の十八歳の少年から、だまされていたずらされたこと

が起因となって、男性嫌悪の念をいなくようになり、その代償として、同性を性対象と思いつめてしまったこと。

これらの因子がまじりあい、からみあって、N子をレスビアンに仕立てあげたものであろう。

性腺の異常があってもなくても、こういう心理条件が一つでもあると、人は正常な性欲発達の軌道を逸しやすいといわれているのだ。

愛撫 底の底は

N子の手記をみると、彼女の同性愛には、サド的な面ももっていることがわかる。

彼女はレスボスに明日はないもの（葦田奈貴のペンネームの由来）と自分の心にいいきかせ、かなりの女体放浪をこころみているが、そのうちでもとくに眉子にたいする心理態度また外見に現われた態度は、多分にサジステックだ。

さいしょから、女体というものを知りたいために眉子にちかづいたという実験的態度、眉子をひっぱってはつきはなし、つきはなしでは、またひっぱる翻弄的な態度、家出のための利用的な道づれにしたこと、その他など。

気もちの優しいN子に、こういう面があるとは、わたしはふしぎだったので、彼女に会ったとき、あ



れは偽悪的な脚色なのではないかと質したところ、「あたしにもSの面はありますよ」と殊勝な顔でN子はいった。

眉子の処女も厚子の処女もわたしが破った、とN子は手記でいっている。女が女の処女を破ったとはどういうことかという、N子の愛撫技術の一つである、手指による相手のシャイデへの攻撃のことらしい。

このほかに彼女が好んで用いるテクニックは、洋の東西をとわず、レスビアンのあいだにもっとも多くおこなわれるというサッフィズム（クニニリングス）だという。そしてその場合、N子は相手にたいしてそれをおこなうのみで、相手からそうされることは好まない。下半身を他人に触れられることはいやだというのだ。

男性型の女子同性愛者には、そういうひとが多いらしく、モルにもその報告がある。モルが、ベルリンのあるアクティブ・レスビアンに、「あなたが相手からサッフィズムされるとして、その結果、あなたはパッシブになるわけだが、それで満足することはできないか」と問うた。するとその女性の答えは、

「それでは全然興奮することはできない」という。モルはさらに、

「あなたは男とのコイツスはできないかどうか」

とたずねたところ、彼女はがぜん、憤激の表情で否定した、というのである。

さいこの質問は、ちょっと愚問のように思われるが、けっしてそうではなく、学者のモルのことであるから、意があつての問いであることは、いうまでもあるまい。

わたしもN子におなじようなことをたずねてみたが、やはり絶対にためであることを、これは微笑とともに答えてくれた。

欲望は自分で処理

さて、N子は、相手に奉仕するのみで、自分はどうして性的な満足を与えるのかというと、

「自分の欲望は自分で処理する」

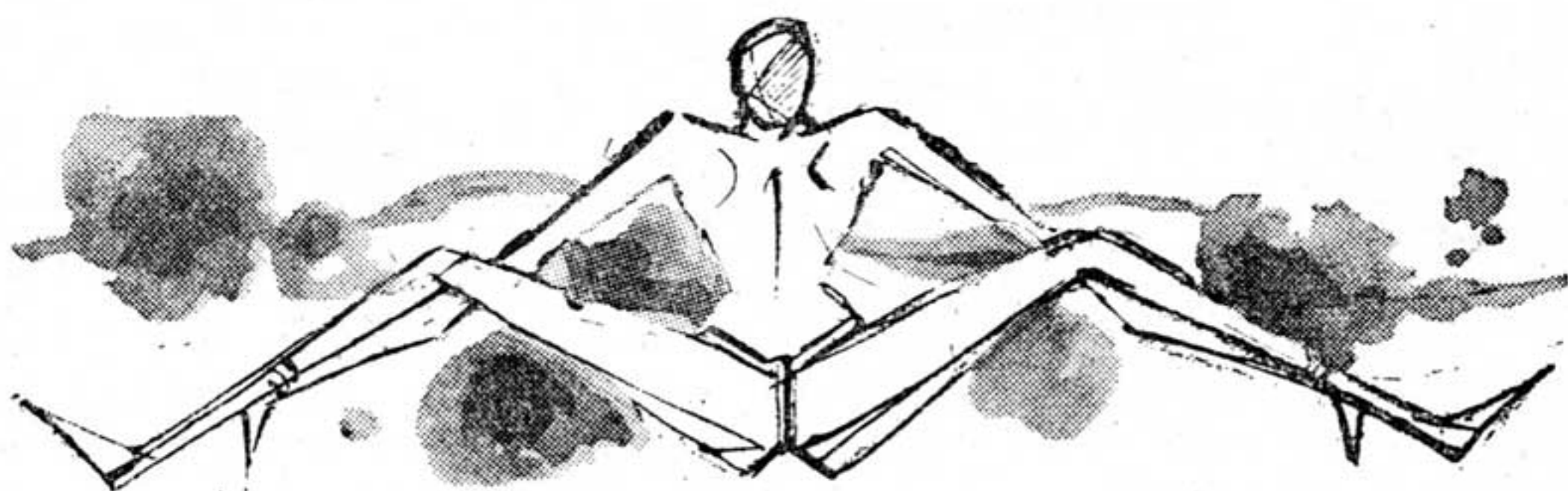
といている。オナニーである。

「あたしはオナニーは知りません、なんて女性は、カマトトじゃないですか」

と彼女はわたしにいった。

N子はすでに中学一年のときに、ひとりですれを知ったという。もちろん、愛の対象たる同性を脳裏にえがきながらのそれだ。

女性におけるマスターベーションとサッフイズムは、その行為に耽溺しやすいとN子はいっているが、それは事実らしく、長いあいだ女性同性愛者の



研究に従事しているドクトル・アルペールという学者は、熱烈なレスボス関係におちいっている女性ふたりが、毎夜その二つの行為を六、七回も反覆していた例を報告している。

こうしたレスボスの愛撫技術をみるに、それらはいずれも、男女間におこなわれるペッティングをでないことである。

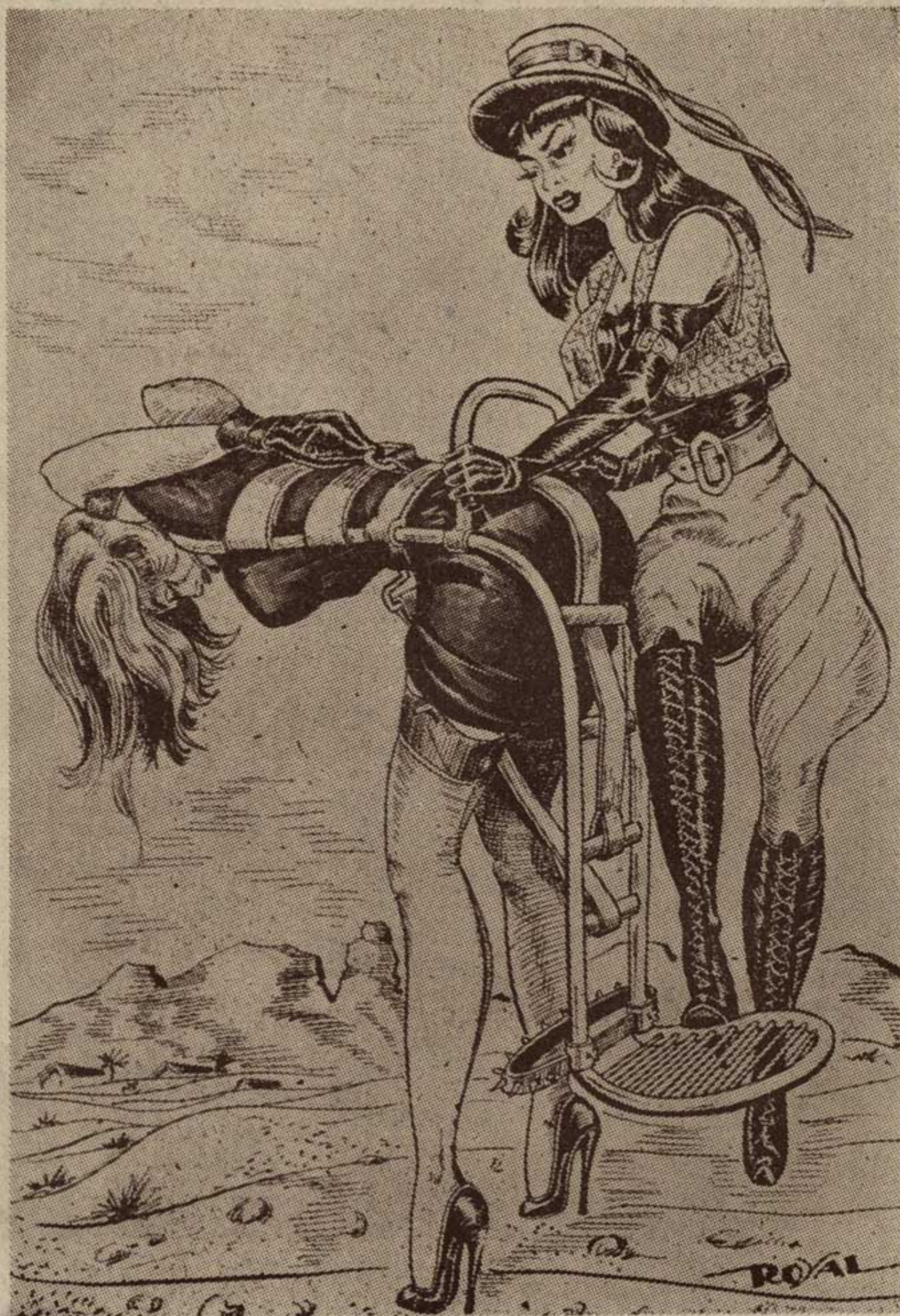
ここにおいて、わたしは、あるパッシブ・レスビアンが、「いちど強姦されてみたい」とその相手にもらしたことと思ひあわして、前項のR子と少女との場合に感じたとおなじような疑問につきあたる。

それは、レスビアン女性の愛撫、彼女らを真隨的な性の満足感にさせることはできないのではないだろうか、ということだ。

強姦されてみたいとつぶやいた女性は、おそらく強姦そのことを望んだわけではあるまい。レスボスの愛撫になにかものたらぬものを感じて、もっとそれ以上の、身も心もモミクチャにしてくれるような強力なものをという望みを、強姦ということばで表現したのではないだろうか。わたしにはどうもそう思われる。

だが、この不満は、レスボスの愛の技術では救うことができない、とすれば、やはりたがいの精神的な大きな愛情こそ、そのような不満を小さくしてくれるただ一つのものではないだろうか。

縛りあげられた女医師



FEMALE DOCTOR FORCED
INTOBONDAGE

本欄はアメリカのヌートリクス社との
特別契約によって提供されたものです

この本は、数人の画家が、一つの物語にさし絵を描いているので、おもしろい効果が出ているように思う。なかでも、まだ発表されたことのない画家ロヴァルの作品が、新しい魅力を持っている。

深夜の訪問者

あるビルの真夜中、女医のライラは、仕事で残っていた。

ガタ、ゴトという音に、ライラは思わず身を震わせるのだった。つい二、三日前に、近くのビルに強盗がはいったことを知っていたからだ。

「風の音かしら」

ライラはそう思ったが、物音は、ゴトゴトと近づいてきた。

かすかにノックする音がした。

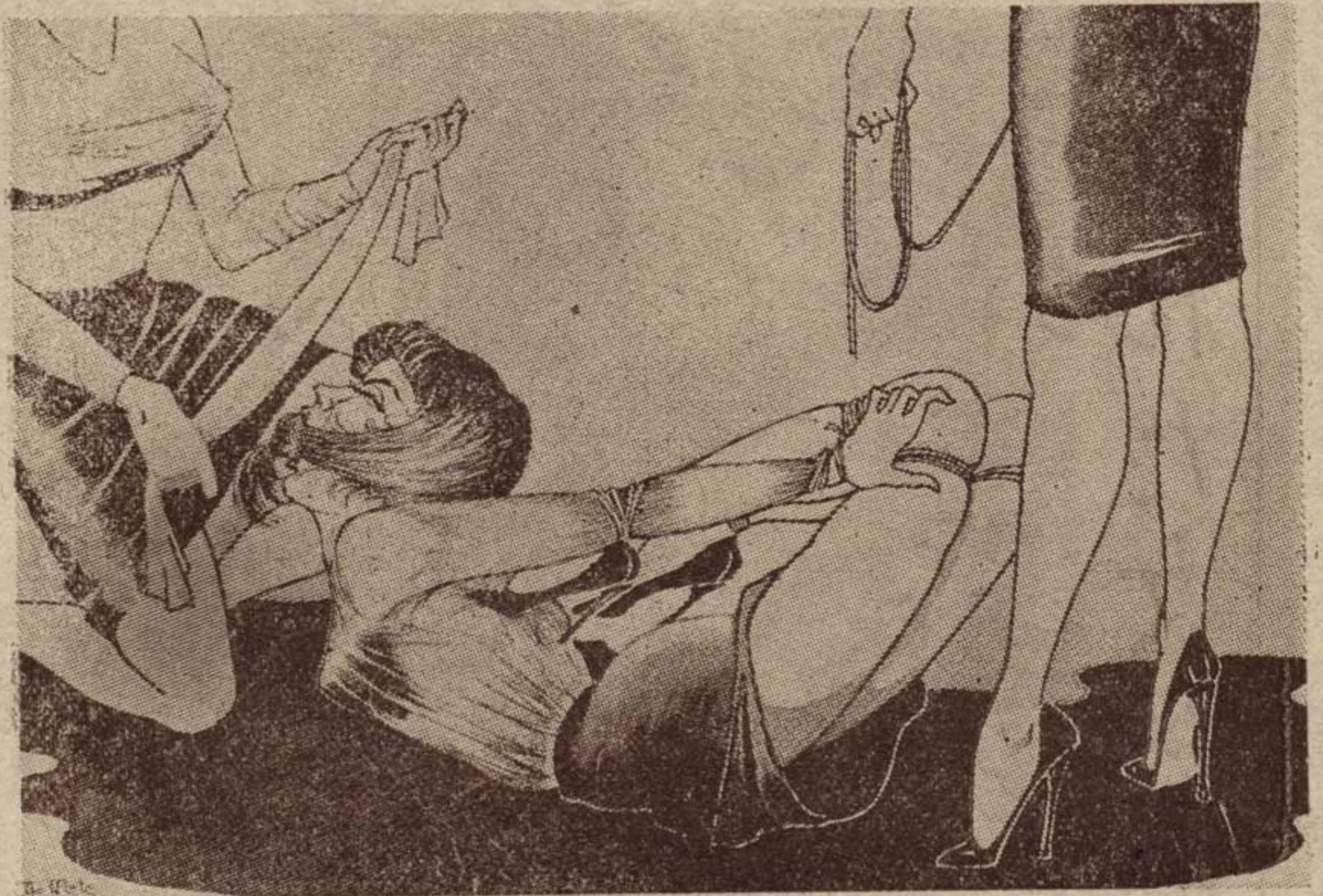
「先生、おいですか」

と、含んだような声がする。

「悪酔いしたんだわ!」

酔っぱらいとわかって、半分は安心したライラが戸をあけると、そこに、三人の異装束の女たちが、無気味に立っていた。

かれらは、部屋に乱入すると、ライラをとらえて、表に待たせてあった車に連れ込むの



だった。まず、両手、両足を縛り合わせたうえで、声の出ないように、しっかりとさるぐつわをかまされたライラは、息もできない苦しさに、ただ、声にならずうなるだけだった。

車は軽い音を残して、まっ暗な街道をつっ走った。

数時間も走ったろうか、ゆれる車中で女たちは、ライラをもう一度しっかりと縛り直したので、ライラは、全身が抜けるように痛かったが、どこにつれてゆかれるのか、どうされるのか、見当もつかぬままに、恐怖が彼女を支配していた。

やがて車は止まった。

かれらは、ライラを

乱暴につき出して、一軒のうすぐらい家のなかにつきとばすのだった。

脱獄の女殺人犯

やがて、その家主が出て来た。

「デラ、よく連れてきました！」

かれらのなかのひとりに、その女は、冷た

「マッジ！ 気に入りましたか？」

い声で言いながら、ライラの様子をジロリとながめるのだった。くちびるに、ひきつったような笑いかうかんでいる。その顔は、ライラがどこかで見たことのある顔だった。ライラを運んできた女たちのひとりがいった。

——そう、マッジ、夫殺しの犯人だわ！マッジといえは、数年前、夫の恋人を発見して、その女を傷つけ、夫の鼻と耳を刃物でそいだ、ものすごい女で、彼女は、裁判で有罪になったが、いつのまにか脱走してしまっ

たのだった。

「マッジ！」

ライラは、自分の置かれた運命のおそろしさに、からだをちぢめるのだった。

彼女が、夫の恋人に対して加えた復讐は、当時、新聞でも騒がれたものだったからだ。

マッジの冷たい声が、ライラに言いすてるようにつづいた。

「ちょっとした訳があって、おまえさんに、わたしの身代わりをやってもらおうというわけなのよ」

残忍に、その口もとがゆがみ、かわいた笑い声が、部屋にひびきわたるのだった。

マッジは、脱走してから、全国に追っ手が待ち伏せているので、自分の顔形に似た替え玉を仕立て上げて、当局の目をくらまそうというわけなのだった。

身代わり整形

マッジは、美しく若い女医が、そのスナ





りとした肢体を、これからどうやって変形されるのか、それを思うと、ゾクゾクと快感がわいて来るようだった。

「では、そいつのからだを直しておやり！」
マッジが命令すると、デラをはじめとする黒衣の女たちは、敏捷に動き出した。

まず、引き延ばし器にかけて、からだをせいいっぱい引き延ばす。マッジより、ライラは少しばかり背が低かったからだ。

つづいて、両手、両脚の活動をすばやくするために、ひどいいじめ方で、くぐられ、打たれるのだった。

女たちの扱い方といったら、それはむごたらしいやり方で、彼女らは、血も涙もないのか、苦しみもだえて泣き叫ぶライラを、いやしい犬でも扱う訓練士のように、情け容赦なく仕込むのだった。

つづいて、蒸気の吹き出している尻打ち器の部屋に引きずりこまれたライラは、素裸のまま、そのおそろしい器械にかけられるのだった。

部屋じゅうに充満しているむし熱い蒸気、その尻打ち器が、純白の裸形を激しく打つ無残な音にまじって、彼女の力のない悲鳴が聞こえるばかりだった。

ゴリラを使つて

こうして、からだの形を変えられたライラは、ついに、もう一つの部屋に入れられた。そこには、もうひとりの少女メアリーが、見るも無残に縛り上げられていた。彼女のういいういしい肉体に、かれらが締め上げた縄が、無情に食い込んでいた。

首カセ、手カセ、足カセ、それに、分銅のついた鎖、トゲをうえにベッド、あらゆる形の万力などが、冷たく、ふたりの犠牲者を待っていた。

非道な女たち——もちろん、デラが先に立ってだが——は、一匹のゴリラを引き出してきた。ゴリラは、背中にデラの厳しいムチを当てられると、喜々として、ふたりの全裸に



された犠牲者に襲いかかってきた。

恥ずかしめられたライラたちは、裏の、広いあき地につれ出された。アルミニュームの馬具のようなものをつけられ、乗馬ズボンに編み上げ長靴という服装で、デラが、その乗り物に乗った。激しい叱声^{しつせい}と、無残なトゲと、情け容赦のないムチが、ライラを恥ずかしげもなく走らせるのだった。

デラたちは、いじめるのを楽しんでいるようだった。

形勢逆転す

そのうちに、メアリイが、ちょっとしたスキを見つけた。デラのポケットから小形のピストルを奪ったのだった。

こうなると、形勢は逆転した。

メアリイは、憎しみに燃えた声で言った。

「デラ、覚えておおさ、おまえたちが、どんな目に会うか、いままで、あたしたちをいじめてきたいろんな道具が、この家の中で待っているわ」

ライラは、メアリイが、ピストルを構えているうちに、ほかの女たちから武器を取り上げるのだった。

「いまに覚えていな！ そのうちに、またひ



どい目にあわせてやるからね！」

デラは、横目ににらみながら、そうつぶやいたが、ほかのふたりの女たちが、メアリイにおどかされながら、デラを縛り上げると、ヒイヒイと、情けない声を出してわめくのだった。

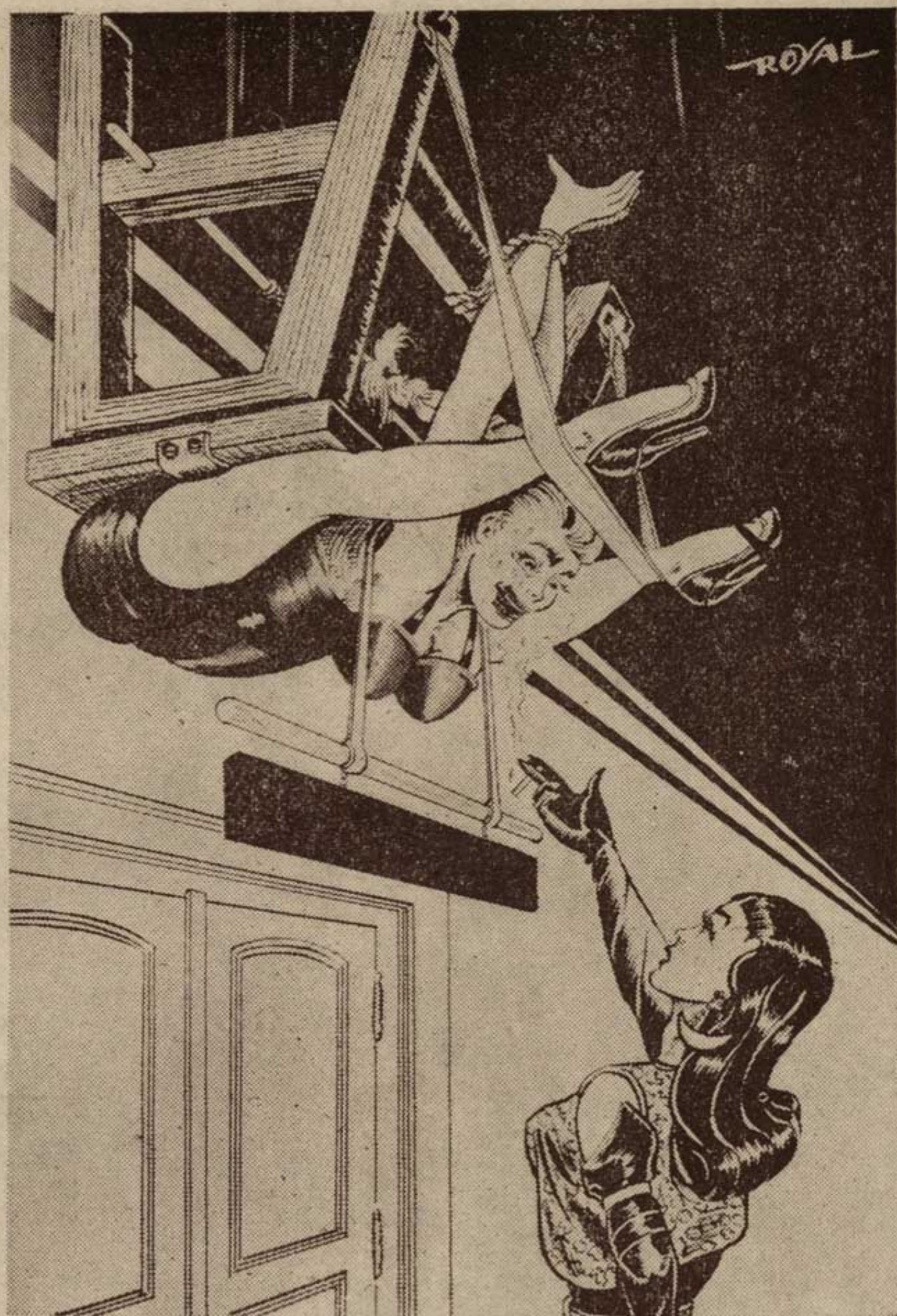
メアリイとライラは、いっしょうけんめい

だった。

マッジがきたら、残忍非道な彼女のことだから、どんな乱暴な仕返しをするかも知れない。

そう思いながら、ふたりは、あとのふたりの女たちを、次々に縛った。さるぐつわをかませて声も出ないようにした。





やがて、ふたりは、出口を見つけて、表へのがれ出た。
知らせをうけて、パトロール・カーが、サイレンを鳴らしてやってきたが、マジジはも

う観念していた。
さしも悪知恵にたけている脱走囚のマジジは、こうしてふたたび、刑務所にひかれていった。

「縛り上げられた女医師」の分類番号はUX
1135である。

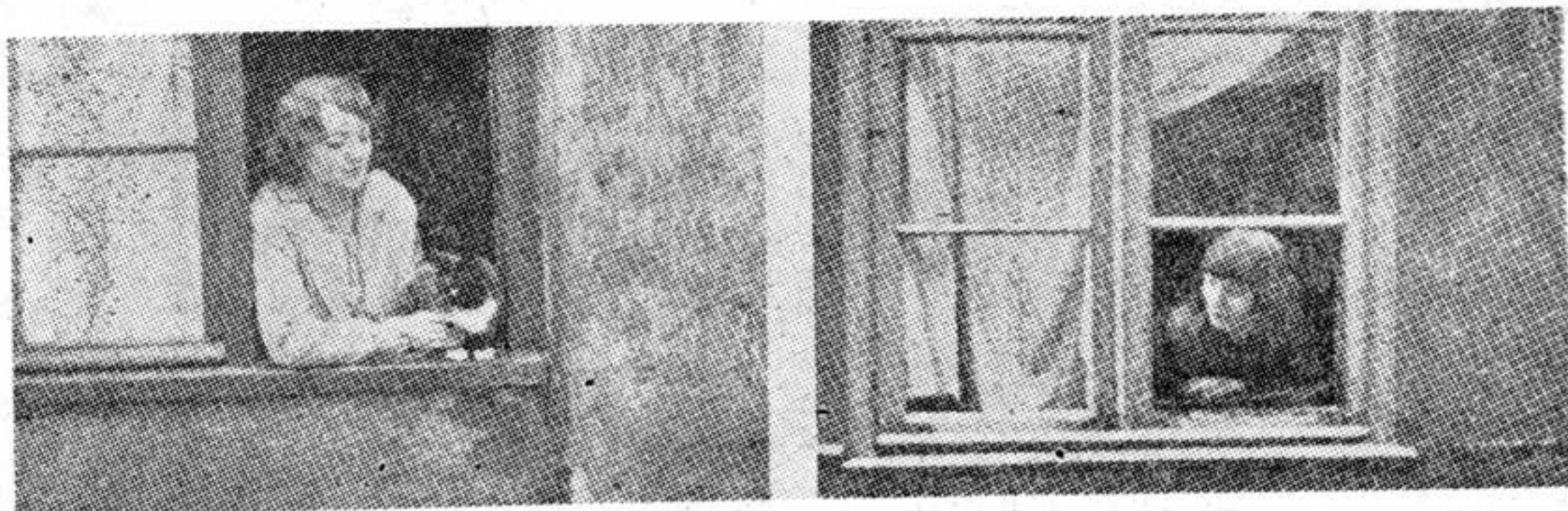
ご注文は横浜市中区北方町1の67、泰西出版資料会社、
または文献資料刊行会代理部へお申し込みください。

しかし、ライラとメアリイとは、ほっとしながらも、何か一種の名残り惜しさを感じているのだった。あの、いじめられ、犯された屈辱の瞬間は、また、彼女たちの心のそこにひそんでいた。いじめられる喜びをも呼びさましたからだった。

こうして、この本の物語は終わるが、原本には、もっと詳しい描写がある。

現在出ているのは、第二版で、第一版はアメリカでもすぐ売り切れたようである。

内容のためか、この本は、ヌートリクス社の本の中では改正特別定価で、日本国内渡し値段一部八ドル（二八八〇円）になった。なお、この



＜欧米MSの家めぐり①オーストリア・ドイツ＞

イリスの家と 変態娼婦バルバラ

欧米各国には、MSクラブ、MS関係のグループ、あるいはMSをとり入れた娼家などがあります。たとえば、オーストリアドイツの「イリスの家」（ベルリン・フリードリヒス・シュメトラアゼー一九四七年）ミュンヘン市外のマダム・スアレスの主唱する「真の鞭打教」、さらにイタリア・フィレンツェの「心の富集団」などです。

これらについてヨアヒム・エデルマン氏が詳しい報告を寄せられたので、それをもとに、新しい見聞をお知らせしようと思います。

ただし、固有名詞などはいっさい仮名を用いましたが、事実起こったこと、実在する団体、実在の人物が体験したことは、正確に書きました。

おやこ 母娘二代の娼婦

音楽の都として第二のパリ

としてヨーロッパで独特の地位を持ちつつつけている古い町ウィーン。そこには、ほかの古い慣習や、伝統とともに急速には改めがたい性愛の異常を楽しむ人たちの一群があります。

それは、十九世紀以前からもありましたが、十九世紀の後半、いわゆる「世紀末」と呼ばれた時代から、はっきりした存在となって、世の中の一隅に、その存在を主張するようになりました。

ほかの西ヨーロッパ、とくにフランスやイギリスでは、娼家が、こういう特殊な好みを持ったお客にも接して満足を与える女たちをそろえるようになってきました。

オーストリアは当時、ハンガリーと併合帝国を形作っておりましたので、この二つの国の首都ブダペストとウィーンとは、東のパリと呼ばれていたほど、文化的にも政治的にも重要な都でした。

この物語は、そういう、古いウィーンの町、とくに、娼婦や、娼家のあり方を念頭におかずには、ちょっと、よく理解しがたいのではないかと思います。

谷 貫 太

バルバラ——クリ色の髪を長く編み、鉄のシンのコルセットにウエストをひき締め、編み上げ式の半長靴をききませながら、第二次大戦後の奇跡の復興のドイツにその嬌名^{きやうめい}をうたわれた変態娼婦「バルバラ」も、その母のウィーンでの商売から、この道にはいつて来たのだといひます。

彼女は、一九三四年ウィーンの近郊に生まれ、まもなくミュンヘンに移りました、もちろん、母は娼婦でしたから、バルバラの父はわからずじまいです。母は、ヒトラー政権と同じ年に生まれた、この可憐な少女をいつくしみ、育てました。ヒトラーの全体主義教育のために、バルバラは、母の手から離れて、その少女期をすごすことになります。

合宿、共同生活、それも十二、三歳から二十歳までの女ばかりの共同生活、そこには、何か異常なものを育て上げるのにじゅうぶんな環境がありました。

バルバラは、十六歳の秋、上級生から、自慰を教えられました。上級生たちは、集まってきた、バルバラの恥ずかしい個所をもてあそび、いじくりまわしたので、バルバラは恥ずかしさと、快感との交ざり会った妙な気分を味わいました。

その日から、バルバラの血の中に、性感という、今まで存在しなかった楽しみが、味を覚え、その満足を与えないでは、からだが持たないという、母親ゆずりの傾向が芽ばえてきたのです。

共同生活では、ヤギを飼っていたので、上級生たちは、かくれてしばしばヤギと交わっているといううわさでしたが、バルバラも、十七歳のときにはじめて、みなが使っている、よごれたヤギと接しました。

ヤギはうわさどおり慣れきっていて、バルバラは、終わったあとで、訳もなく腹立たしくてたまりませんでした。

そんなソドミイ（獣姦）の悪習とともに、彼女は、上級生や下級生を相手にして、いろいろな同性の技巧を覚えしました。

ただ、バルバラにとって不思議に思われたのは、ヤギをも含めて、相手になった者がすべて、喜びのあとでは、打って変わったように、おとなしく、疲れきったようになってしまふのに、彼女自身は腹立たしい、いらいらした気持ちになってしまうとの違いでした。

夫の上官との情事

やがて、戦争が始まりました。母は、一九



四三年、ドイツの勝利を信じながら、病気で倒れました。

同年、バルバラは、政府からの推薦で、結婚しました。アルフレド・ベトゲと、かれはいいました。

もちろん、そのころのことですから、かれは、軍務についていました。なりたての少尉だったアルフレドは、うぶな青年でもあったので、大ドイツ政府が選んでくれたバルバラを、最良の妻と信じて、少しも疑っていませんでした。

しかし、バルバラは、心でアルフレドを愛していたが、自分のからだは、夫以外の肉体にひかれてゆくのを、止めることはできませんでした。

夫の上官のシュレーベ大尉は、バルバラの美しさのトリコとなっていました。かれは、毎週、木、金の二日、必ずやってきて、バルバラを愛して行ったのです。

木曜と金曜は、夫のアルフレドの当直の日だったのです。

こうして、表面では、平和だったバルバラの結婚生活も、戦争の敗色も濃い一九四四年の暮れには、ついに爆発してしまいます。

たまたま、友人と当直日を取り替えたアル

フレドが、木曜の晩に帰ってきてしまったのでした。

かれは、愛する妻の寝室に上官の姿を発見すると、一言も言わずに、シュレーベ大尉を射殺してしまったのです。

いかに、戦争末期とはいえ、これは明らかに殺人事件です。しかも、当時のあせりにあせた軍人たちの気持ちが悪く影響して、かれは軍法会議で、抗命罪によって、終身刑を言い渡されてしまいました。

バルバラは、弁護に立った士官に哀訴しましたが、聞き入れられず、夫は、囚人列車に乗せられて、はるか南のほうに送られてゆきました。

そして十日後、バルバラは、一通の電報を受け取りました。ハーケンクロイツのたてをつかんだ、ワシの紋章のついた用紙には、アルフレドが、北伊で爆撃されて、列車ごと全員死亡したというむねの文字が、冷たく並んでいるのでした。

バルバラの結婚生活は、こうして終わりました。

酒場 赤いケシ

一九四五年、ドイツはふたたび敗れ、バル

バラも、難民の列に加わって、廃墟と化したベルリンをあとにしました。

残っていた家財を売り、鈴なりの列車に乗って、彼女が着いたのは、シュヴァルツアーレ、という、小さな、いなか町でした。それでも、この小さな町は、戦争の被害もなく、難民をうけ入れてくれたのでした。

占領軍がやってきました。はじめて見るアメリカの黒人兵、乱暴な若い米軍に交じって、英軍を構成していたいろいろの植民地兵たちが、酒に酔っては、毎夜のように娘たちを犯していました。

バルバラは、宿舎に決められた農家で働いていましたが、ある日、畑の中で、突然、現われた米兵に犯されました。反抗する心とは別に、バルバラは、たばこ臭い兵士の息の下で、ようやく味わった「平和」と「女」とを感じていました。

こうして、バルバラは、村の中でも、ちょっとした酒場がある一角の店で、働くことになりました。

ローテル・モーン(赤いケシ)というその酒場は、その名まえほどは上品でなく、毎夜のように、原色のドレスの女たちが、外国兵と嬌声をあげる、下品たらしい、場末の酒場

でした。

よく、その店に来るゼーンカアという中尉は、好きがせず、黙りこくっているの、ほかの女たちはきらっていました、バルバラは、かれが、金払いがよいのと、なんとなく興味を持っていたので、よく、そばにすわっていました。

ある晩、かれはバルバラにささやきました。

「イリスっていう店、知ってるかい？」

「なに？ それ。この町には、そんな名まえのお店、なくってよ」

「ここじゃない、ベルリンだよ」

「知らないわ、あたしもベルリンに住んでいたんだけど」

「それはほかの娘からきいた。だから、きいたのさ」

「どんなお店なの？」

「どんなって、ちょっとひと口では言いにくいんだけど……」

「どなたか、知ってる女のひとでもいるのでしょ」

「いいや、——変わってるんだ。変わってるというのが一番びったりだ」

かれは、ひとり言のようにつぶやくと、また黙りこくってしまうので——、

「どんなの？ 変わってるって？」

「きみ！」とかれは、ちょっと改まったような口調でいいました。「きみは、女のひとで、変わったことの好きな人を知らない？」

「変わったことって？」

「変わったことだよ。つまり、女のひとを縛ったり、女の人に打ってもらってよろこんだりっていうような」

「ああ、それね」

バルバラは、母がひそかに隠していた古ぼけた写真のことを思い出しながら、そう答えました。

「あなた、あした、もう一度きてくださる。」

いいもの持って来るわ」

ぶいと立って、バルバラはほかの席へ移ってしまいました、かれは、まだ何か聞いたそうでしたが、彼女は、わざと知らんふりをしていました。

帰りぎわに、かれは、バルバラに近づいて、

「じゃ、あしたまた来るよ」

そういうと、ちょっとぐあい悪そうに、ニコリと笑って出て行きました。

その笑い方が、バルバラに、アルフレドを思い出させました。そういえば、かれはアルフレドとちょうど同じくらいの体格でしたし、

同じようにまじめそうな男でした。

バルバラは、家に帰ると、古い荷物を捜して、五枚の古写真を出しました。

焼け跡の奇妙な家

翌日、ゼーンカアはやってきて、その写真を見ると、目を輝かして、

「これ、ぼくに売ってくれませんか？」

そういいながら、かれは、ポケットから、三〇ドル出して、バルバラに握らせるのでした。

「いいわ、形見^{かたみ}なんだけど、いいわ」

つぶやいたその形見ということばが、かれにまた興味を感じさせたらしく、

「形見って？ おとうさんの、それともおかあさんの？」

とっさにバルバラはウソを言いました。

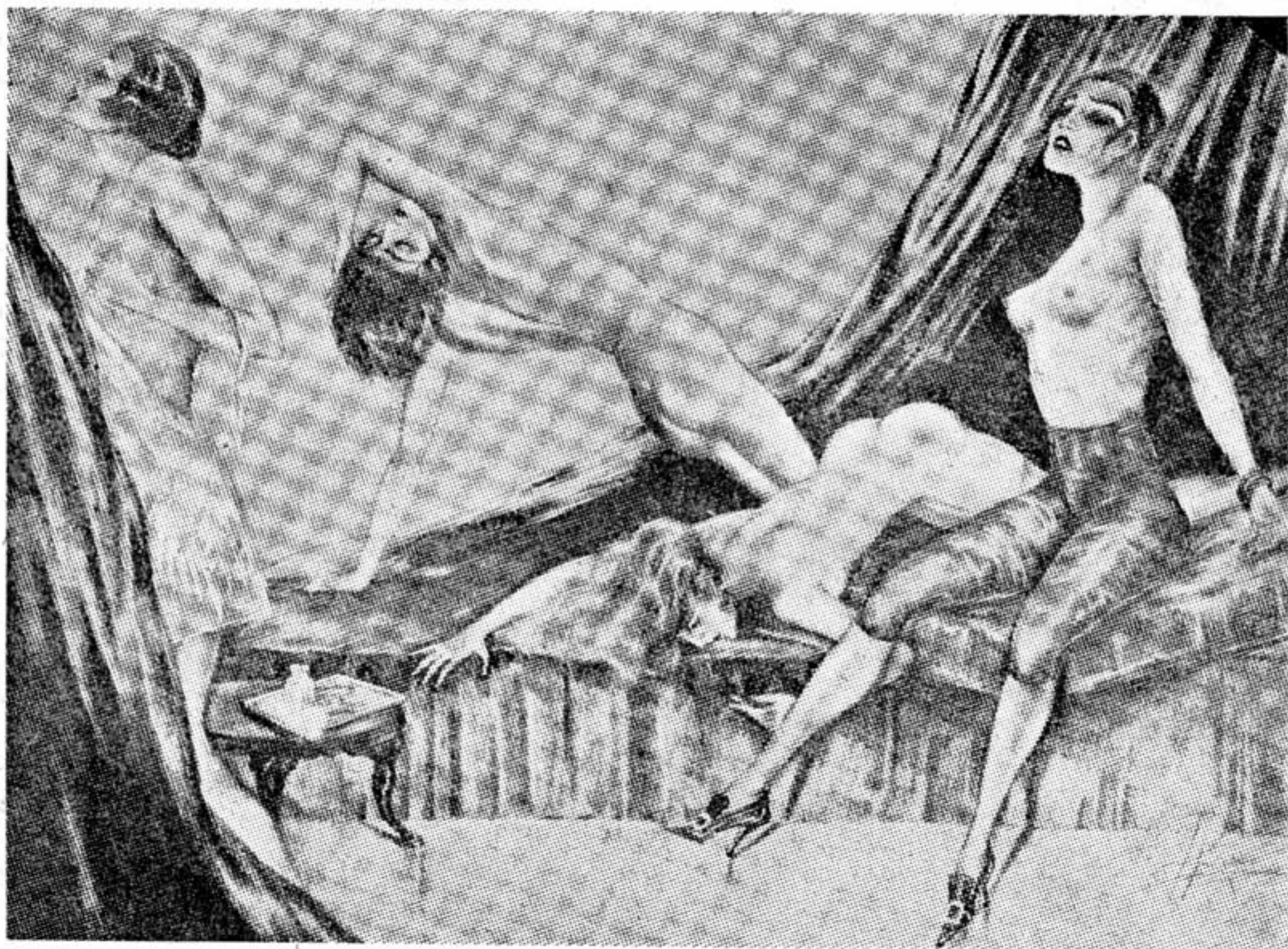
「死んだ夫のよ」

「へえー、きみ、結婚していたの？」

「戦争で死んだわ。もっと前なら、そんな写真ならいくらでも上げられたのに」

「そう。それは惜しいことをしたね」

バルバラは意識していました、男の関心が形見ときいた時、すでに写真から、自分自身に移っているのを。



男の視線は鋭く、チ
ラチラとバルバラのか
らだを探っていました。
た。

「きみ、こんど、ベル
リンまで遊びにいかな
いか？」

「いいわ、いつ？」

「あした行こうか」男
はかっさに決めると、
さっさと立ち上がり、
「休暇をとって来る」
そういうと、急いで
出てゆきました。

それから、一時間ほ
どして、バルバラは、
ゼーンカアの車の中
にいました。

まだ、戦争の跡の生
生しい両側の風景を見
ながら、彼女は、昔のこ
とを考えていました。

約四時間、まっ黒な
くずれおちた建物の残
骸が町じゅうにひろが

っているベルリンに着きました。町には、新
しい番号札が、英語で立てられており、かれ
は、地図を見ながら、右へ左へ曲がりなが
ら、西のはずれにある、一軒の焼けビルの前
で、車を止めました。

「ここだ」

「ここって？ どこ？」

「イリスだよ」

バルバラは、かれのうしろに従って、細い
階段を伝わって、地下に降りました。

よこれた鉄のドアをあけると、中は、うす
ぐらい、赤や青の電灯がともっており、たば
この煙でいっぱいでした。

そのそうぞうしい踊り場を抜けると、防音
扉があって、かれは、バルバラを残して、は
いってゆきました。

エルザという娘

三、四分待っていると、彼女は、うしろから
声をかけられました。女の、かすれた声で、
「フロイライン！ こっちへおいで、いまの
かたが待っているわ」

女は、意外に強い力で、バルバラの腕をつ
かむと、グイグイひっぱるようにして、横手
のドアをあけて、内部にはいってゆきます。

十メートルばかりのせまい廊下を通ると、その先がちょっとした衣装部屋べやでした。

「あなた、まだやったことないの？」

女は、バルバラにききました。

「やるって？」

「男をいじめて喜ばせることをよ」

「ないわ」

「じゃ相棒を捜してあげる、エルザ！」

エルザと呼ばれた、すらりと背の高い、ブロードの娘が出てきました。

金色のヒモつきハイヒールをはいて、まっ黒なレースのようなタイツをはき、それは、胸をおおって、両手にまでつづいています。からだの線がクッキリと見えて、すばらしい肉体の持ち主だということがわかります。

顔は、地顔がわからないほど作っています。両眼には、両側に眉墨まゆぐみを入れ、眉毛まゆげは、悪鬼のように、両方とも上にピンとはね上がっています。すばらしく大きく、青い目の両端は、墨のまわりをまた黒くぼかしており、くちびるは、あくまでも、どす黒いような紅で、あくどく描いておられます。

二つにあみわけたブロードを、ぐあいよく、クルクルとまとめ、その上に、鳥の羽の一ヤードもあるのを七、八本つけています。

両手には赤い、長手袋をはめて、ちょうど、フォリイ・ベルジュールあたりの踊り子を見るようでした。

「この娘、まだ知らないんだって、教えてやってね。かれ氏は、もうきてるの、うずうずしながら待ってるわ」

「わかったわよ」

おうへいな口ぶりで、エルザは答えました。そしてバルバラに向かって、
「むずかしいことじゃないさ。ただ、ヒイヒイいうまでいじめてやればいいのよ」
「でも——」

「ためらっちゃあだめよ！ 男をみんな、犬か馬か牛だと思えばいいのよ。やつらも、そう思ってもらいたいんだからね」

そういいながらエルザは、かたわらから、まるまると長いものを取り上げました。

「これ、これで喜ばせるのよ」

「これ、鞭むちじゃない？」

「そうよ、これが、一番お望みの品さ。なにしろ、あたしたちのからだでは、なかなか満足できないんだからね」

バルバラは、心に決めながら言いました。
ヤギに対して持った、あの激しい憎らしさが、ムラムラと胸につまって来るのを感じな

がら。

情け容赦ないムチ

「じゃ、衣装を替えたら。そんななりでは、めちゃくちゃだわ。ここにあるのなら、どれを使ってもいいのよ」

バルバラは、まっかなタイツと、黒い編み上げ長靴を選びました。

手には、同じように肩まである長手袋をつけ、頭には変わった形のトップ・ハットを。そして、一メートルばかりの生皮のムチを取り上げました。エルザは、それを見ながら、

「あんた、本当は経験があるんじゃない？」

「選えらびかた、うまいわ」

「ないわ。はじめてよ」

バルバラは、かたわらにある、木馬の形をした皮の台を、そのムチでピシリと打ちながら、答えました。エリザは、

「いい、あたしが先にやってあげる。よく見ていれば、コツはすぐわかるわよ」

彼女が、カーテンのヒモをひくと、チリーンと、鈴が鳴りました。ガラガラと重い引き戸が開いてゆくのが、わかります。

エルザが、カーテンを、サッとひくと、その前は、十メートル四方ぐらいのタイル張り

の部屋でした。

その中央には、ゼーンカアが、一糸もまとわず、丸裸で、うずくまっているのです。

エルザは、手に持っていた、長いムチを、力いっぱいタイルの床に打ちおろしました。

「けだもの、またきたの！」

男は、ものもいけません。よくみるとかれの口には、丸い玉のようなクツワが、しっかりとめられ、両手、両足は細いクサリでつながれているのです。エルザは、

「この前でこりたと思ったら、そんなに、このムチが恋しいのかい？ アメリカのブタ！ チンチンをしてごらん！ 犬のように、そう、犬のようによ！ 自分のみっともない姿を考えてごらん！」

かれのからだは、ムクムクとうごき始め、チンチンをした形になりました。

その男のアゴに、エルザの無情な美しい脚が、スラリと伸びて、

「この犬め、はいつくばるんだよ。期待しておいで！ もっと恥ずかしい目に会わせてやるから！」

ムチが、情け容赦もなく、かれの両腹にとんでゆきます。

男は、尻を上げた不格好な形で、四つんば

いになりました。その後ろから、エルザは、ムチを浴びせながら、

「そろそろ、ンドイツの美しい娘さんたちの前で、欲情していいのかい！」

ムチの手が、サッと、下腹にのびると、男は悲鳴を上げながら、倒れてしまいます。

その肩は、おそろしい苦痛に耐えるのがせいいっぱいようです。

なかなかうごこうとしないので、エルザは、いら立ってどなります。

「ブタ！ うごけ！ 動かないと、もっとひどい目に会わせるよ！ この間みたいに黒い女とかけ合わせさせてやろうか、それとも、シエパードがいいかい！ ぐずぐずしていると背中にもチのブラウスを着せるよ！」

男は、気を取り直したようにふたたび、チンチンの形をします。

その立ち上がったわき腹に、規則的に、エルザの長いムチが飛んでゆくのです。

赤い腹帯のような血のあとが、かれのわき腹をとりまきました。

エルザは、しばらくすると、手を止めて、衣装室の中から、おかしな器物を出してきました。それは、自転車の車輪を取り去ったようなもので、木の台の上に乗っていました。

「お乗り！」

男がクサリの音をさせながら、それに乗ると、エルザは、かれの一部分を、その台の一部につなぎます。

「走るんだよ！」

ピシリーッと床をムチが打つと、男は気が狂ったように、ペダルをふみます。

すると、かれの一部分がつながれた台の上の器械は、ゆっくりとうごき始めたのです。

それは、かれのからだに、無情な快感を与えらるしく、男は、まもなく、およそ、みっともない姿を露呈しました。

「そうそう、それが、アメリカブタの一番いいスタイルだよ！」

エルザは、ヒステリックに叫びました。

「あとは、このお嬢さんにやってもらい！」
エルザは、スウィットとカーテンのうらに消えました。

バルバラは、エルザと同じように、男を追いながら考えました。

そのときには、すでにバルバラに、例の興奮が訪れていました。彼女は、短いムチを無情に、背中に当てながら考えました。

「どうしてやろうか、どうやって、一番徹底的に恥ずかしめてやろうか」

悦虐の彷徨

⑥

連載
小説

異常の群れ

青山三枝吉

田上恵子・え



初対面の男の手で、無抵抗に縛られて喜ぶ料理屋のおかみ。男女のアブノーマルな痴態を平然と描き写す青年画家。ああ、この異常の群れ。

1

ある朝、私の家の郵便受けに、あつみのある一通の封書が送られてきた。

さしだし人は、私の記憶にない、茨城県の野井はるみというなまえが書いてある。

女性らしいが、どうもおぼえがない。とにかく、封を切った。

興味ある内容があらわれた。私は、いきもつかせず、読みおえた。

その文章を要約すると、つぎのようになる。

「わたしは、この茨城県の海岸にちかい療養所で、すでに五年間のベッド生活をおくっているものです。重症の結核患者です。現代の進歩した医学でも、もうわたしはなおるみこみはありません。病気を自覚し、むりを知りながら道楽をつくした罰です。べつに後悔はありません。わたしは衰弱し、いのちはあと三カ月ほどしかたないでしょう。そろそろ身辺の整理をせねばなりません。

ところが、わたしは、こまったしなもの、をたくさんかえています。死んだあと、それがみんなの目にふれたときのことを考えると、わたしは、たいへんに恥ずかしいのです。死んでしまえば意識もほろび、いっさいがなくなるのですから、わたしの心配も、つまらない虚栄な

のかも知れないのですけれど――。

しかし、せっかくコレクションしたものを、無趣味なひとびとの目にさらし、嘲笑やぶつを浴びるも、いやなことです。

そこで、あなたさま

におねがいがあります。この、こまったしなものを、あなたさまに、どうか、ひき取っていただきたいと思うのです。

おいそがしいことでしょうが、なにとぞ、いちどお目にかかりたく、お越しくださればしあわせにぞんじます――」

以上だが、じっさいの文面は、もっと礼をつくしたものである。どういう関係で、彼女が私を知り、私の住所を知ったか、そのいきさつも、なっとくのいくようにしるしてあった。が、それをここにのべることは省略しよう。

私はもういちど、文面を読みなおして考え、かるい興奮をおぼえた。さしだし人が女なまえであることも、私の好奇心をそそのかした。私はその療養所をたずねる決心をした。

2

丘陵の上に、濃い緑がかさなりあっていた。くもり日のために、その緑が黒っぽく、沈んだ色にみえた。



★前号までのあらすじ

私（松平）は、大学を出たが、サラリーマンになるのがいやで、花村駒代一座という旅まわりの女剣劇一座の裏方に雇われた。娘形の花村あやめは、座長の駒代の妹だがマゾヒストである。秋田県のある小都市で興行をうったとき、彼女は、私をある旅館へ誘った。そして、用意してきた縄で縛ってくれという。緊縛の中で、あやめは陶酔し、愉悅して、私と結ばれた。

そのころ、座長の旧友のむすこの阪東紅也という十七歳の少年が入座した。ある日、私は、芝居のハネたあとの楽屋で、紅也を責めている駒代の姿を見る。私のうしろにあやめがいた。

それが刺激となって私は、紅也を連れ出し女装の彼を縛りあげ、鞭でさいなんだ。あとをつけてきたあやめが、その場にとび込んできて、妖妬の刃を私にふるった。

花村一座にいにくくなった私に、さすらいが始まる。まず東京へ舞い戻って、場末の芸人アパート共楽荘にこもりこむ。女漫才師春風さくらの「若いツバメ」になったのだ。その隣室に、浪曲家東家不二丸が住んでいた。

だが、彼は、夜ごと女房を縛って楽しむサド趣味の人物だった。

私は、その奇妙な情事をのぞき見していたが、ある日、同じアパートに住む少女歌手南条マキを縛りあげてさいなむ現場を目撃した。マキが海老責めにされて尻をたたかれる光景は、私の嗜虐性を堪能させた。

やがて芸人たちは地方の夏祭りに出て行き私はまた雇い主を失う。そこで大学の先輩西条をたよって、東海地方の中都市にあるミューズ毛織会社の宣伝課に勤めることとなる。

仕事の上で知り合った三沢京美というモデルは、ロング・ヘアのエキゾチックな女。私は彼女と結ばれ、縄の味を教えこむ。はては彼女のアパートで加虐の快にあえぎ、彼女が大切にしている髪の毛で、彼女自身の排泄した尿をふきとりさえていじめた。

京美にパトロンのできて別れた私は、パル「白夜」の女・塩満悦子を得る。彼女は、私が東京へ出てきたあとを追って上京、再会して、東京タワーの見える旅館で、緊縛の悦虐にひたる。

だが彼女は、前に自殺の経験があり、やぐざと心中する。悦子が縛られてスリッパでぶつてくれといった思い出が鮮烈に残った。

と、私は思った。

ドアをノックした。

女の声ではいいという返事があった。

一瞬、私は胸をときめかせた。

ドアをあけると、一種異様なにおいが、私の鼻をついだ。

ながい年月を寝たきりでいる病人の身辺からだだよう臭気（しゅうき）なのだろう。

しかし、病室そのものは、まるでホテルかアパートの一室かと錯覚（さくかく）するほど、清潔に、こぎれいに整とんされていた。

ベッドには、ひとりの人間が、あおむけのまま、微笑をうかべて、私をむかえた。

「いらっしやい。松平さんですね。わたし、野井春海です」

私は、心のなかで、アッと声をあげた。

私をまねいた人物は、女性ではなかった。男だった。

なんだか、ペテンにかけられたような気もちで、私は自分の助平根性（すけこんじやう）を苦笑した。

「すみません、こんなむさくるしい男で」

私の心をみとおしたように、微笑をうかべたまま、野井はいった。

春海をはるみと書いたのは、あるいは、この病人の、かるいイタズラだったのかも知れない。

ひたいの広い、ほそおもての顔で、くちびるの色が、ツヤをおびて

赤いのが、私の目についた。年齢はもう、四十をこえていると思われる。

「いえ、べつに、どうも……」

私はどぎまぎした。

療養所の白いたてものは、海岸をみおろす丘の、松林のなかにあった。

私は上野から汽車で二時間、さらに十五分をバスにゆられて、ようやく目的の場所についたのだった。

第五病棟の七号室。

そのドアの前に、私は立った。ドアの横に「野井春海」と書いた小さな木フダがさがっていた。多人数が同居する病室ではなく、個室らしい。

——春海という名を、手紙にはわざと、ひらがなで書いたんだな。

ドアのノックに返事をした女性は、ふとったからだに白衣をまとった、つきそい婦だった。その女は、ぶあいそうなふくれツつらで、「どうぞ」と私にイスをすすめた。

「ほんとうにすみません。おいそがしいなかを、こんな遠いところまで」

ひとなつこい笑顔で、また野井はいった。

それから、つきそい婦にむかい、しばらく外へ出ていてくれ、と命じた。

ふとった女は、ジロリと私をいちべつして、おもそうな尻をゆすりながら、廊下へ姿を消した。

「ながくしゃべっていると、医者や看護婦がうるさいですよ。さっそく、れいのやつをお見せしましょうか」

そういうと、野井はまくらからあたまをあげ、そろそろとベッドの上に身をおこした。

「だいじょうぶですか」

と、私は心配せずにはいられない。

「すみません。手をかしてください。このベッドの下の奥のほうに、古ぼけたトランクがつっこんであるんですよ。そいつをひっぱりだしてくれませんか」

それは、たしかに時代がかった色と形のトランクだった。

いまだき、はやらない皮製のもので、かなり大きく、がっしりしていた。いかめしい錠がついている。

「ここに、カギがあります」

野井は、まくらもとの小さなひきだしの中から出したカギを、私の手にわたした。

そのときの野井の白いほそい手首に、私はゾッとした。錆びたカギをつっこんでまわすと、錠は、にぶい音をたててひらいた。

3

「ほう」

思わず声がでた。

トランクの中にぎっしりつめこまれていたのは、すべて責め絵、責め写真のたぐいだったのだ。

手紙によって、私はおよそのことは想像していた。が、この収集は、私の想像をこえた。

みごとなものであった。私がおどろいたのは、その量もさることながら、質のすばらしさにあった。

——なるほど。

と、私はうなった。これほどのものを、ほうりっぱなしにしては、マニアとして、死ぬにも死ねないだろう。

「いかがです」

野井の表情には、子どものように無邪気な、純真な自慢があった。

「すごいコレクションですね」

私は感心のことばを、すなおにのべた。

「くだらないものは、一枚もはいつておりませんよ。みんな、いいものばかりです。わたしも二年ほど前までは、病人とはいっても、まだ元気でした。家から、わざわざこいつを取り寄せ、毎日毎夜、ながめてはたのしんでいたものです。もっとも、そんな療養態度だったか

ら、病気は悪くなるいっぽうだった、でしような」

野井は声をださずに、口だけパクリとあけて笑った。

そして、ベッドの上に、トランクのなかみをひろげるようにすすめた。

私は、えんりょしなかった。

いわれたとおり、彼のベッドの足のほうのふとんの上に、そのけんらいたるコレクションをひろげた。

「一時から三時までの二時間は、安静時間になっていますから、だれもこの部屋にははいつてきません。ゆっくりごろんなさい」

「拝見します」

私は一礼し、それから観賞をはじめた。

極彩色の肉筆絵が多い。

江戸期浮世絵の版画によるものも、数十枚をかぞえた。単なる縛り絵ではなく、りっぱな春画になっている。これは、マニアにかぎらず、一般的な価値からいっても、かなり高価なものであろう。

現代の著名な日本画家、さしえ画家の筆になるものもあった。むろん、サインなどはない。が、筆致や画風で、それと知れる。

半分はチョンマゲと日本髪のかみあわせによる時代ものだが、私のような若い人間にとっては、現代風俗をたくみにとりいれた責め絵がとくにおもしろい。

たとえば、映画監督と女優。ショウの楽屋裏におけるファッションモデルとマネージャー。

ホテルの一室における社長と美人秘書。また、医者と看護婦。あき家のなかのぐれん隊と高校生というような、加虐者と被虐がわの男女のかみあわせである。

責め写真にしても、構図、ライティング、背景、小道具、モデルなど、こまかく神経のゆきとどいた、凝ったものであった。平面的な、味もそっけもない写真ではなく、感情やムードが、くっきりと演出されていた。

私は眩惑され、声もでなかった。

心は、たちまち豪華けんらいたる悦虐の世界に没入した。

「わたしはね——」野井は、しずかな笑顔を私にむけながら、ことばをつづけた。

「度を越したグロテスクなものは、きらいなんです。だから、ごらんのとおり、描かせたり、あつめたりしたものは、すべて、まず美しい絵であることが、第一条件になっています」

「たしかに、美しい……」

私は、うわごとのように、あいづちをうった。目は、絵に吸いついていた。

「きたならしく誇張された作品は、どうも好きになれません。デッサンの狂った絵なんか、まっぴらごめんです。女の肌から、むやみに血がながれている絵なんかみると、みぶるいします。残酷性にだけ媚びた作品は、いやしいものです」

「私も同感です」

「責め絵にたいせつなのは、まず、情緒ですよ。ロマンチズムですよ、ねえ、あなた。ロマンチズムのなかの悲そう味ですよ。緊縛された女体の、くるしげなポーズからにじみでた悲哀のムードですよ。それがなければ、とても、おとなの観賞には耐え得ません。この一連の作品をごらんください」

野井は、おびただしい量のなかから、とくに、ひとまとめにしてあ

る絵を、私にしめした。

それは、さっきから私も注目していた作品であった。

日本画のテクニクを駆使した、彩色の肉筆画である。画調はしかし、現代的な躍動感にみちた、新鮮なタッチだった。

「この絵かきは、宇多雪夫（うたゆきお）といって、まだ若いひとです。わたしがかわいがり、パトロンのようになってやっています。どうです、若いくせに、達者なものでしょう」

野井の口調には、おさえきれない自慢があった。

私はうなずくだけである。たしかに達者なものだった。

女体の流麗な線は、肌の立体的なやわらかさまで表現している。苦悶、恐怖、恍惚、陶醉などの表情の描写力は、まさに、真にせまった的確さである。

また、女を縛った縄のかけかたに、一点のウソもなかった。一筋のムダもなかった。

乳ぶさのしたを縛った縄が、つぎにどこを縛り、どこをくぐったかわからないうちに消えてしまう、といったような、インチキな絵ではなかった。

縄には、いのちがこもっていた。縄はサディズム心理の急所を、合理的に縛っていた。

女の裸体に、いくらグルグル縄を巻きつけたところで、急所の一本がゆるんでいたら、その責め絵は、すでに死んでいる。こけおどかにすぎない。みる者のところに、なんの感興もあたえない。

縛り絵とは、けっして安易に描かれるものではない。

血と肉と心をもった女体を描き、おなじく心をもった生きた縄が描けていなければならない。

ロマンチズムのなかに、かんべきにリアルな描写が要求されるのだ。

4

宇多雪夫という画家の作品に、私はひさしぶりに、ほんとうの責め絵を満喫した。

「松平さん、そこで、おねがいにはいるのですが――」

野井は微笑をやめた。

「書面でも申しましたように、これらの、こまった財産を、あなたにおゆずりしたいのですが」

野井は、こん願の目になった。

私はしかし、返事に口ごもった。

「さんねんながら、私は貧乏で、こんな高価なものをゆずっていたただけの、お金がありません」

そっちょくに私はいった。まったく、さんねんだった。

すると野井は、しずかな笑顔にもどった。

「失礼ですが、お金なんかありませんよ。ただ、これらの絵や写真のねうちが、ほんとうにわかるひとの手もとに、ひきとっていただきたいという気もただけなんです」

焼いてしまうのが、いちばん、かんたんなのだが……と、野井はいった。

しかし、灰にしてしまうのは、もったいない気がする。といって、自分の死んだあと、この古トランクを、他人の手にあばかれるのは、いやだ。

考えあぐねた結果、野井は、それまで見ず知らずの私に、白羽の矢をたてたというわけだった。

この気もち、あなたにもわかっていただけるでしょう、と野井はいった。

私にとっては、ありがたい白羽の矢である。私はうなずいた。

「わたしのいのちはね、じょうだんでなく、あとせいぜい半年なんですよ。けれど、わたしはもう、さどっているから平気なんです。五年もベッドに寝たきりなんですからね。死んでしまったほうが、よっぽどラクなんです。わたしはまったく道楽者で、やりたいことは、いままでにみんなやってきてしまったし……」

野井の柔和な白い顔が、また笑った。

そので、いいした目をみると、私は、月なみなはげましのことばをいう気になれない。

「ああ、これでさっぱりした。安心しましたよ。このトランクは病院の雑役夫にでも荷づくりさせ*」

*て、二、三日うちに、あなたのお家にお送りし

ましよう。それから……ああ、そうそう、わたしの家内が、府中で料理屋を経営しています。おついでがありましたら、寄ってやってください。そして、ひとつ、わたしの女房と、あそんでやってくださいませ。か。そのように、手紙をだしておきます。ええ、マゾなんです。好きなんです。わたしは家内は——」

そういって、野井はニヤリとした。

瞬間、私は首すじに水を浴びたようになった。

もしかしたら、この男は、狂人なのではないだろうか、という不安がひらめいたのだ。

すでに、午後三時にちかくなっていた。

私は散らかしたコレクションの山を、もどおりトランクの中へしまった。

ベッドの下にそれを押しこんだとき、安静時間の終了をつげるチャイムの音が、病棟内に、のどかに鳴りひびいた。

それから一週間後に、その豪華なコレクションは、トランクごと私の家に配達されてきた。

なが病みにたいくつした病人のイタズラではなかったのだ。狂人でもないらしい。

すばらしいプレゼントを受け取ったものの、私は彼に返礼すべきものを、なにひとつもない。

私はこころぐるしかった。

感謝のしるしに、月にいちどは、かならず往復四時間を汽車にゆられ、

彼を見舞った。

野井は私の来訪を非常



によるこび、

「女房すら、めんどくさがってきてくれないのに」

と、涙すらうかべるのだ。

私は、尼寺あまでらのロクサーヌをなぐさめるシラノのように、世間の話題をしゃべった。

アブノーマルに関してのあれこれも雑談した。

彼の寿命は、自分で予測したよりも、はるかにながらえた。

私は月にいちどずつ、一年のあいだ、野井を見舞った。

病室で二時間をすごして、私が帰るまぎわになると、彼はかならずいった。

「ぜひ、いちど、家内とお手合わせくださいよ。もう手紙で、あなたのことをなにもかも知らせてあるんです。あなたがいけば、よろこびますよ。なにしろ、好きなんだから」

お手合わせ、ということばに、なんとなく実感があり、ユーモラスなひびきもある。私は思わず笑ってしまう。

「しかし、私のような若僧わかぞうが……」

「いや、うちのやつは、若いのだが、とても好きなんです。いいじゃありませんか、ねえ、あなた、おためしな

さいよ。どうせ、あいてるんだし、亭主のわたしがこうしてすすめるんだから」

そういつて、野井は妙に皮肉っぽく笑うのだ。しつこくつて、自虐のにおいも感じられる。やはり、どこか異常である。

しかし、私はしだいに、彼の妻という女性に対して、興味をおぼえていった。

5

いくどもすすめられたあげく、私はついに野井の妻をたずねた。私もまったく、好色な男だ。

多摩川ぞいの町なみから、すこしはなれたところに、その「白泉閣」はあった。ただの川魚料理屋ではなく、高級旅館をも兼ねていた。どちらとも一流といえる、格式をもった堂々たる建物だった。

ふとい朽ち木の門をくぐってから、常緑樹の林の奥にひっこんだ玄関までが、およそ百メートルもある。

私はたじろいだ。

野井春海は、この高級料亭兼旅館のあるじだったのだ。

金にあかせてのアブ道楽、新しい責め絵画家を育てることも、古今の珍品を買いあさることも、有名女優をモデルにして縛り写真をとることも、なんでも、できるはずだ。

療養所のホテルのような個室に、自費患者として五年間も寝ていられるのも、当然だった。

私は、勇気をだして、おかみの信代に会った。

「いらっしゃいませ。お待ち申しておりましたのよ」

／いかにも料理屋のおかみらしい、あかぬけた三十四、五の女だった。職業的なあいそ笑いの底に、私を観察する目のひかりがキラッとうごく。

「どうぞ、さあどうぞ、おあがりくださいませ」

初対面とは思えぬ、如才のなさだ。くろうとの色気が、こぶとりのきもの姿からにじみでている。その貫禄にけおされ、私はまた、たじろいだ。

貧しい自分のふうさいをかえりみて、羞恥をおぼえた。

こなければよかった、と思った。

しかし私は、手をとられるように信代にひきあげられ、その夜、白泉閣の離れの和室で、かつてない、ゆたかな経験をした。

責め手がほんろうされるといふ現象に、私ははじめてぶつかった。あんどん型の電気スタンド。菊もようの絹の夜具。障子と縁をへだてた庭池には噴水の音。

信代はたいへんなベテランだった。

まるで芳じゅんな酒をのんで、こころよい酔いの世界へとろけこんでいくように、自分から悦虐のムードへおぼれていった。

主人からの推薦(?)を負ってきた人間とはいえ、私に対しての警戒心もなく、じつにスムーズに、ことははこんだ。

「ねえ、縄だってちゃんとそろえてあるんですよ。どんなのがいい？アサ、もめん、しごき、腰紐、男のへこ帯。クサリなんな、殺バツなのはいいやよ」

はやくも、すさまじいようなエロチシズムが、信代の全身からにおいでていた。

私は、圧倒された。どうなることかとそろそろおそろしくさえなった。

が、なにくそッと思いなおす。こんなチャンスは、めったにあるもんじゃない。

私は、緋のしごきをつかんだ。そして、水色ちりめんの長じゅばんすがたになった信代を、うしろ手に縛りはじめた。

ぼてぼてした弾力の、縛りがいのある肉づきだった。背なかへねじあげた左右の手首を、きりきりと縛りあげると、

「あら、慣れていらっしやる」

ほめるように、信代はいった。

手首を縛ったしごきを、胸もとへまわす。

もりあがった胸。やわらかい乳ぶさ。熟れた果実の汁が、内がわから皮をやぶって、じゅくじゅくとしみだすにも似た、なまめかしい女さかりの肌。

その熟れた肉体を、ようしゃなく縛りあげる。

「うッ、うッ……」

と、信代は声をあげはじめた。うっとり半びらきの目を、ななめうえにむける。

うすく紅をぬったくちびるも半びらき。

快感の波に、もう身をゆだねているのだ。なんという、きょう楽主義者。

私にも、その快感がつたわる。

縛る男と縛られる女、ふたりの呼吸は、舞台の上の、イキの合った役者のように一致していた。

赤いしごきは、やわらかい胸の隆起にぐいぐいと沈んだ。

両腕を背なかにしめあげると、信代はひざをくずした。

長じゅばんのまえが割れると、そのしたは、これも水色ちりめんの

腰巻き。

ふた巻き、三巻き、ぎゅぐゅと胸を縛ったしごきを、もういちど背なかへしぼりあげ、手首でとめる。

「あ、あ、あ」

と、うめき、信代は絹ぶとんの上に身をのめらせた。日本舞踊のひと手のみごなしに似たうごきで、やわやわと横になる。

むっちりした腰のまるみ。長じゅばんのすそ、腰巻きのすそがみだれ、白い足がこぼれる。

ぞくり、と私の胸がしびれた。妖しい陶酔の世界の展開。

「あ、ねえ、あなた、ちょっと待って」

ふいに、信代がいった。

「なんです」

「おねがいがあるの。あたしのね、いまのこの姿をね、主人のところへ送ってあげようと思うの」

「えッ？」

「じつはね、絵を描くひとがね、さっきから、つぎの間にきているのよ。わるいけど、呼んであげてちょうだい」

信代の語気は、命令にちかかった。

「そ、そんなこと」

私はあわてた。この場に第三者があらわれようとは、夢にも思っていない。

が、信代はかまわずに、しどけない縛られた姿のまま、隣室へ声をかけたのだ。

「いらっしやい、雪夫さん」

「ええ」

と、ひびくように返事があり、ふすまがあいた。

雪夫、ときいて、私にはすぐに思いあたる人物があった。

れいの、たくみな責め絵を描く、宇多雪夫ではないだろうか。

「おじゃまします」

長髪の若い男が、敷居ぎわで、私に一礼した。

オレンジ色のスポーツシャツに黒いズボンという、むぞうさな格好の男だった。片手にはスケッチブックらしいものを持っている。

ほんとうに写生するつもりらしい。やっぱり、れいの責め絵画家だった。

おじゃまします、といったが、これ以上のじゃまはない。

6

「すみません、あなたもモデルになってください」

宇多雪夫は、ぬけぬけと私にいった。

いやともいえず、私はだまっていた。

「だいじょうぶよ、雪夫さん。このかたも、なかなかよ。あたしたちはかってにつづけるから、かわずにスケッチしてちょうだい」
信代は、上気した顔でいった。

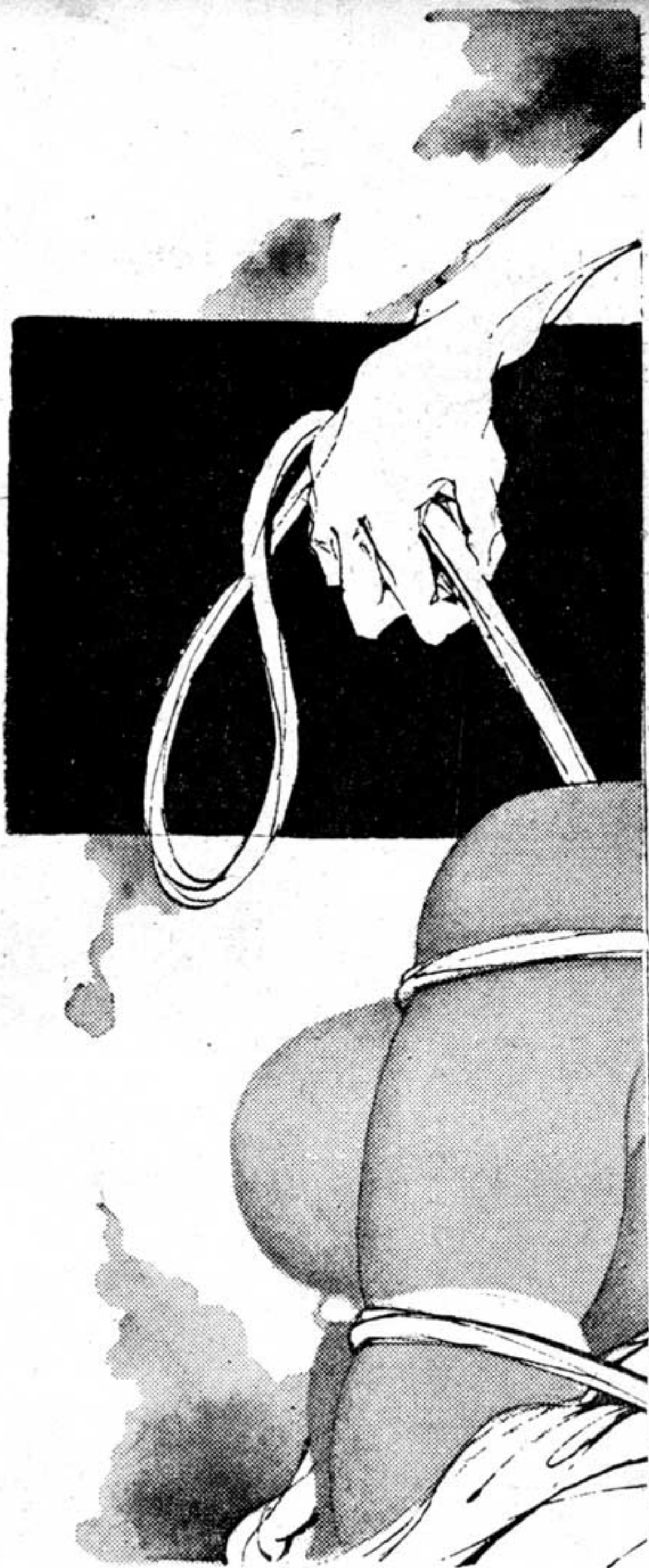
「ええ」

と、こたえ、宇多雪夫は、なれたものの腰で畳の上にすわると、スケッチブックをひさにひろげた。
エンピツを右手に握りなおした。冷静な表情である。

「さあ、つづけましょうよ、あなた」

艶然と、信代は私に笑った。そ





男。

その初対面の男の手で、無抵抗に縛られ、よろこぶ料理屋のおかみ。

この男女のアブノーマルな遊戯のさなかに、平然とあらわれ、くりひろげる痴態をかきうつそうとする青年画家。

異常の群れだ。

しかし、この夜の一室の人間たちは、この異常を異常とも思わずに、それぞれのプレイを、たのしみはじめたのだった。

「もっと髪の毛を前にたらし、長

の切れあがった目もとの色っぽさ。

「どうぞ、ご自由に」

宇多雪夫は、にこりともせず、そんなことを私にいう。たいした男である。

——こいつはどうも、はかられたかな。

私はそう思ったが、いまさらしかたがない、どうともなれ、という気になった。

こんなアブノーマルなことって、あるものなのだろうか。

他人の男にむかって、自分の女房を縛りにいけ、とすすめる療養所の患者。むろん、縛りにふずいするものも、ゆるしてあるのだ。

それを承知し、のこのこと実行しに、府中くんだりまでやってくる

じゅばんのすそをみだして」

宇多雪夫は、そんな注文をだした。

青年画家は、しだいに苛酷なポーズを要求しだした。

「べつの縄でおかみさんの足を縛り、エビ責めのかたちにしてください」

私は、そのとおりにした。

白い肉塊が縄にくぐられ、くびと背なかから、前に折れまがった。

「くううッ」

という、うめき声が吐きだされた。

「つぎは、さかさエビをやってください」

宇多雪夫は、画家らしいするどい目で、そのほかの感情は冷酷なほ

どあらわさずにいうのだ。

私は、まるでサイミン術にでもかけられたように、そのとおりにうごく。

きれいな足首をそろえて縛り、その縄を、尻から背なかへつよくつりあげ、手首にからけて、さらに引っぱって首にまわす。

苦痛の声といっしょに、喜悦のあえぎをもらし、ユミのように、信代のからだはしなった。

「う、う、う、ひい、い、い、いッ」

その声は、完全なマゾヒストであることをあらわしていた。

長じゅばんも腰巻きも、みだれほうだいにみだれて、単に、素肌にとまっている、ぬのきれにすぎなくなっていた。

——信代は、この夜の痴態を絵にして、療養所の野井のところへ送るといった。

もしや、彼女は、夫の容態をさらに悪化させる目的で、そんなことをするのではないだろうか。

私はふと、そんなスリラーめいたことを空想した。

野井がはやく死ねば、それだけはやく、この大きな「白泉閣」や、そのほかの財産は、信代の所有物となる。

そして彼女は、どんな男とも、あたらしく結婚できるわけだ。たとえば、この青年画家とも——。

信代と雪夫のあいだに、かなりの関係があることを、私はいやおうなしに知らされた。信代はまったくその不貞を、かくそうとしないのだ。

——野井は、こんな信代のふしだらな生活を、ひそかにさぐらせるために、私をここへ寄こしたのではなからうか。

そんな疑念も、わいた。

むろん、それは私の思ひすぎだろう。

野井や、信代や、私

などが、ふしだらなどという、常識的な、通俗的なことばを使うこ

としたいがすでに、おかしい。

この夜、私はただ、たのしめばよいのだ。

甘美な愉悦に、身をさせることだけが、つとめなのだ。

雪夫の命令で、私はついに、信代を全裸にして縛りあげた。まばゆいばかりのツヤをもった裸身。

そこへくいこむ縄、縄、縄。

信代は、つねに美しいポーズで縛られた。なれている。洗練されている。縛られじょうず、とでもいうのだろうか。

縄に手足をくくられた白いケモノは、ふたりの男の前に、かすかな羞恥をみせ、やがて羞恥以上の歡喜の声をあげてみもだえた。

「信代さん、今夜はほんとうに美しいよ」

雪夫までが、エンピツをおいて感嘆した。

私は、その若い画家の存在に、はげしく、嫉妬した。殺してしまいたいほどの嫉妬心が、むらむらと燃えたのだった。

(つづく)

二人だけが楽しむ大人の絵本？

好き人の筐底に隠された夜の秘密！

秘められた名画と

禁じられた場面集

この場面をマネしないで下さい！

夜のムードにマッチした
新形式の秘芸画入

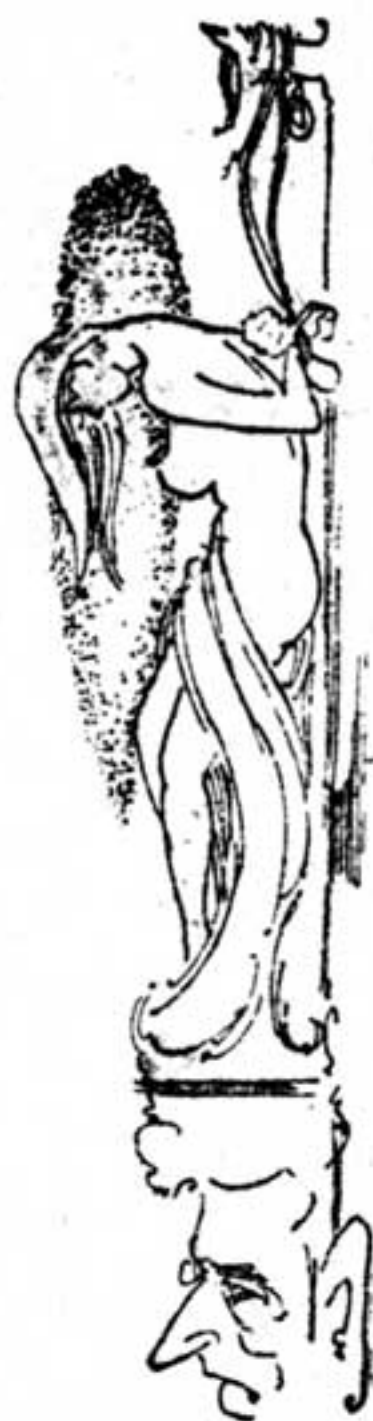
千共 五〇〇円

▼カタログ切手30円封入申込の方に急送す

東京都世田谷局二十一号(イ)

福寿会

読者サロン



責めを望む女性を

小生二十二歳のサラリーマンです。二十五歳から三十五歳までの同性のかたで、責められたい、というかたはおりませんでしょうか。衣服を一枚々々脱がし、素裸にして『炎帝廟』の風見中尉のように責めたいと思うのです。

大阪または和歌山地方のかたで、小生の責めに耐えられるマニアのかたがおられたら、ぜひご連絡ください。お返事待つ。

(大阪・和歌山由夫)

浣腸の相手がほしい

小生は初めて投稿するサラリーマンです。毎月の『風奇』と『画報』を愛読しては浣腸の研究をしています。

研究といっても趣味にはいり

ますが、約二年ほどつづけていますが、なにぶんにも相手がないたため、貴誌の『読者サロン』をおかりして、呼びかけたいと思います、投稿しました次第。

どなたか、おいでにならないでしょうか。まことにかってですが、同性(男性)より女性のかたを希望しております。

浣腸責めにもいろいろありますので、その点を教えたり、また教わりたいたいと思っています。お相手くださるかたがおいででしたら、『読者サロン』にお申しでくださるよう、お待ちします。わたしは四十二歳です。

(東京・塩見)

東京・讓治氏に一筆

小生「風俗奇譚」五月号からの読者です。とくにこの欄を読み、同好の士が多いことを知り

毎号の発売が楽しみです。

つきましては、五月号の「読者サロン」の「東京・讓治」氏と文通したいと思うのです。

小生兄貴の望むような美少年ではありません。というのは二十四歳だからです。

でも、兄貴のご要望は、どんなことでもききたいと思えます。ぜひお友だちになってください。誌上でのご返事をお待ちします。

(千葉・山田)

魅力あるフォトで

貴誌の『画報』と『風俗奇譚』の両誌を愛読していて気づくことは、やはり、絵より写真のほうが実感がでることです。

ところが、このフォトも、単に放置した状態では、興味が半減するものです。同じ縛りにせよ、そこには加虐の表情があつてこそ、興奮もし、マゾとしての快美感もわくのではないのでしょうか。

また、女性にしる、男性にせよ、そこには自然セックスへの刺激なのですから、やはり、パントリーなども、できるだけさげろほか、普通のパンティーより細めのものを使用してもらい

たい。

これなどはシャカに説法でしようが、動きのある写真でマニアを喜ばしてもらいたい。

(広島・田上専造)

男同士の遊戯を……

最近、男性ヌードやホモのものが多くなったことをうれしく思います。そこで、小生のグラフィア案を二、三あげてみました

① 男性の肉体の各所をクローズ・アップ。急所はグリーフかフンドシでかくす。

② グリーフをしたふたりのたわむれ。

③ 外人と日本人少年のたわむれ。

④ 裸の男ふたりの恍惚境。これは上半身だけのクローズ・アップがよいと思う。

⑤ 上半身は裸体、下半身はバレエ・タイツをはいたもの。

右の企画を次号でご採用ください。

(大阪・伊藤)

欲しい女性の切腹姿

小生は、切腹マニアのひとりとして、お便りします。

『風奇』8月号を拝見いたしました

ところ、小生渴望の物語「全裸美女の凄艶切腹凶絵」の登場に心から賛辞を贈ります。

心にくいまでに描写された若く美しい女性の切腹の情景は、マゾに悩む小生の心を満喫させてくれました。さし絵も実に美筆で描かれており、りっぱなものでした。ここにあらためて作者・及川湜氏と画家のかたに敬意を表します。

今後とも、この種の女人切腹ものをどしどし掲載、われわれマニアを喜ばせていただきます。

(兵庫・K・K)

ボクでよかったら交際を

健様、あなたが友だちをお求めのようでしたが、もしボクでよろしければ、ぜひお友だちのひとりに加えていただきたい。小生は二十四歳、何も知らない男ですが、体格がほぼボクと同じようですので、なんとなく近親感をおぼえるのです。そこで、あなたにいろいろと教えてえただきたいと思うのです。

また、できましたら、あなたの縛り写真をぜひ拝見させていただきたいのです。体重六〇キロのあなたの裸身はきつとすば

らしいことでしょう。ご住所お知らせください。

東京健様 (東京・M・T)

小玉さん一度会って……

久しぶりに投稿します。ニュースター・モデルを登場させながらのフンドシ・フォトは、新鮮な魅力を感じます。

ところが、やはりフンドシ男の魅力は、あの大きな前袋のフクラミにあると思うのです。それに付随するのがポーズです。この点、小玉さんはなんといつてもNO.1だと思います。

ああ。悩ましい。あの小玉さんの大きなお尻にはおをつけてみたい。さぞ暖かいでしょう。また、あなたのフンドシは、どんなにおいがするのでしょうか。さぞ甘いにおいがたまたまようことでしょう。

小玉さん、いちどお会いください。お返事を誌上に……。

(東京・山田性)

ボクをいじめて……

ボクは三十歳の男性です。どなたか、ボクを思いきりいじめてください。縛られたいのです。イモ虫のようにころがされ

打たれたいのです。

現在わたしは、宣伝カーの運転手をしていいます。妻があるの、住所は書けません。もし小生を縛ってくださいるかたがありましたら投稿欄にご投稿を……。

(男)

浣腸マニアの女性

ボクは初めて投書する一愛読者です。

そして、二十歳の男性です。

小生はずっと以前からS・Mおよび浣腸マニアです。プレイをするときは、いつも同性とやっています。ムチはもちいずもっぱら網を使用します。

それから浣腸ですが、プレイをするさいは、いつもガラス製の浣腸器に水、食塩水、牛乳、グリセリンなどを二〇〇CCから五〇〇CCほど注入します。

またこのほかにソーセージやガラス棒を使用しますが、ピンポン玉や卵は無理のようです。最近、同性とのプレイにあき

元東京中野病院外科部長 上谷文一著

慢性淋疾短期根治

★新薬盲信の害即ち慢性淋疾の本態尿道側管淋の病理を明らかにし側管壁に生成される防壁の薬剤は菌に到達不能となり根治至難再発する理由★現行全療法の慢性淋根治至難の理由★難治淋を一回淋糸消滅十日以内絶対根治の合理的無痛無害直接殺菌の一方方法説明★全国根治患者礼状集

価送料共百円

発行 東京都中野区宮園通り四の五

上谷外科医院

発売 東京都中野駅前20番地(南口大通百米左側) 宮園書店

てきました。そこでS・Mおよび浣腸マニアの女性を望んでおるのですが、どなたかお相手くださる女性はおらないでしょうか。

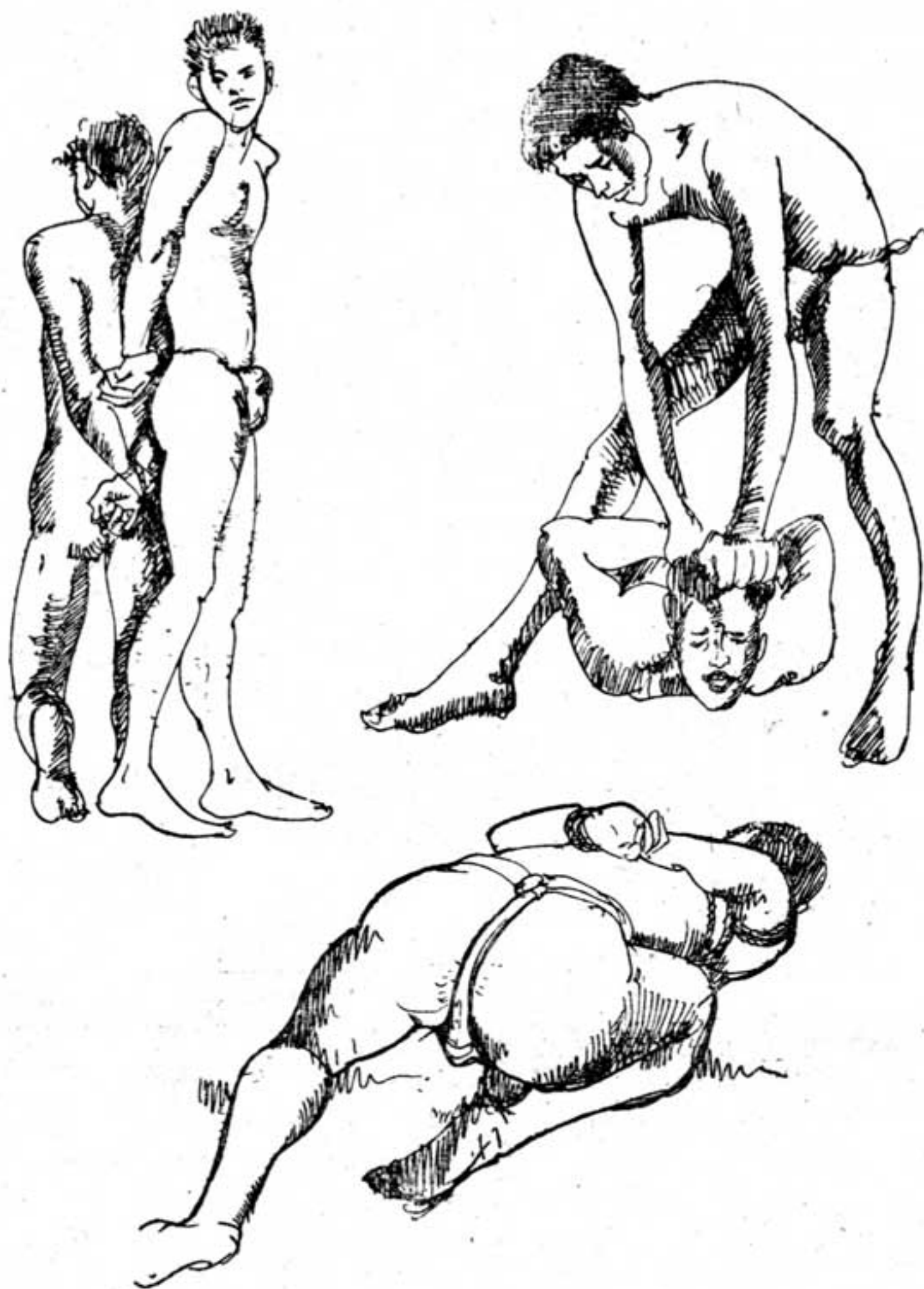
おられましたら、左記の住所にお便りください。年齢は問いません。お待ちします。

(東京都大田区調布鶴ノ木町三〇四島田製作所内・島田竜治)

若者よフンドシを

グラビアの禪男に魅せられ『風奇』8月号を買いました。小生、大学にはいったところか

ら、もう十年近く越中フンドシを愛用しています。最近、若い人はもちろん、老中年層の間でもフンドシを始める人が減っているのは残念ですが、それでも貴誌の読者欄を



フンドシー本にした美少年とたくましい男とをつぎつぎに縛るのも魅惑である。また臀部姿も楽し〈東京・中田康男〉

読んでみると、以外にマニアが多いことを知り、うれしく思いました。われわれ愛禪党のために、大いに発展することを祈る。

(神奈川・越中禪生)

白フンより赤禪の魅力

小生、熱烈な男責めファンで六尺ふんどしマニアです。とくに赤禪が大好きという変わりもの。芦立氏の「赤禪斬り

込み隊」が忘れられず、ときどき読みかえています。

さらしの六尺フンドシも好きでときおり締めますが、やはり赤禪にまさるものはありません。

小生、近くの呉服屋で赤木綿一反を買い込み、同棲ちゅうの二十歳の青年に縫わせては愛用しています。なかなかオツナものです。もちろんMのかれも赤禪マニアなので、泳ぎに行くときはふたりに赤禪一本。よく注目のマトになります。

寝るときも赤六尺一本の素ッ裸。この赤フンで青年を縛りあげて加虐を楽しんでいます。このような意味からして、プレイの着衣としては、赤フン以外にないと考えています。

(青森・赤禪一本生)

初めて活字になった喜び

編集部の皆様へ――

先日はうれしいお便りありがとうございました。また原稿料までご送金くださり、八月十日拝受いたしました。

ボクの書いた文章が活字になるとは、夢にも思いませんでした。あまりのうれしさから、天

にも登る気持ちでした。何か急に、自分が自分でなくなつたように感じられ、過去の暗かった生活が吹き飛んでしまひました。今後とも勉強したいと思ひます。なにとぞご指導くださるよう、お願い申しあげます。右お礼まで……。(三重・林正和)

夏川さんの責めどころ

わたしは西湖に住む一商人です。商売は化粧品店。そのわたしが浣腸マニアであることを前置きしておきます。

現在F子という恋人がいます。彼女に一度でよいから、浣腸をしてやりたい。とつね日ごろから思っているのですが、まだ交際間がないだけに、それを口にしたす勇氣がありません。

もちろん、F子と結婚した場合は、夫としてF子を組みふせイヤがるであろう浣腸責めもやってみたいと思つています。

さて、それとは別に、わたしと同じ神奈川県内に浣腸マニアの夏川絹子さんがいるのは意外でした。わたしの恋人が夏川さんのようなマニアに仕上げられたら、どんなにしあわせだろう

と思つています。そこでわたしは、F子は第二として夏川さんを同県の一しきで、ボクの恋人の化身として、空想の中であなを責めてみたいと思ひ、ペンを取りました。

絹子さん、ごめんなさい。まず、ボクは夏川さんにヒマシ油をビールビンで一本ぐらい無理やりに飲ませるでしょう。

夏川さん、あなたが、いくらイヤがっても、ボクの両手は、堅く閉じ、歯をくいしばるあなたの朱唇をこじあけるでしょう。「あう、あ、ううう……」

あなたは、美しい顔を振りながら、必死にボクの手を拒むでしょう。だが、いくら抵抗しようとも、あなたの両手は、ピンと大の字に柱に縛られているのですから、どう防ぐすべもないはずで。

あなたは、むせ返りながら、ゴクゴクとヒマシ油を飲みくです。あとは時間待ち。

ボクはゆっくりあなたのハダカを觀賞するでしょう。夏川さん、あなたは救われたくても、人を呼ぶことはできないのです。なぜなら、あなたは一糸まとわぬ恥ずかしい姿態なのです。

あらゆる角度から「悩み解消の自宅療法を教ゆ」小冊子・楠山栄三著・コンドーム二個・すりもの・希望の方は100円送金・

SEX

◎早く終る・女性がなげく・手軽に治療・五〇〇円送金せられよ・クスリとズバリそのものを書く性愛の本・進呈・太く恥づかしくない・立派に育てる療法器・コッソリ使える・カタログ無代進呈・性・臭・媚薬・素人でも扱える・副業通信販売・御自由・方法伝受す・一県一店代理店・乞書面

愛慾の炎をもやす……木の実ガラナ……

酒・ウイスキーなどの「粉末」にしました。ボケツト瓶十回分・五〇〇円・特用千円

東京葛飾区本田中原町三五六番

白水荘

(どなたにも個人名で密送)

優生相談室

つぎに、ボクは、薬局で買求めたグリセリン(大ビン)を美しいあなたのアヌスに注入させます。アナタは、苦痛からボクに許しをこうでしょう。でもボクは許しません。

こうして腸の中をきれいに洗滌したボクは、はじめてあなたに飲み物を与えます。

冷蔵庫からとりだした五本の牛乳を、ヒマシ油を飲ませたときのように、あなたの口中に流し込むのです。やがて、あなたの体内にたつした白い液体は、腸をす通りし

て排泄するでしょう。飲んだときの白液はうっすらと黄金色に輝きボールに排泄されます。「さ、飲むんだ。飲まないといつても、ボクは――」

一度体外に出された液体はさらにあなたの口中を割り、ふたたび胃に送りこむのです。

「うッ、よ、よして……」

あなたは、汚物をきらいイヤイヤをするでしょう。でも、あなたの手は、さっきも述べたように、大の字に縛られているのです……

ここまでの責めは、だれでも

考えていることでしょう。そこでボクは、新しいころみをすることにしました。それはウィスキーによる浣腸責めです。そうなんです。浣腸器に丸ビンのウィスキーを詰めこむのです。それを夏川さん、あなたの扉の奥深くへ挿入させるのです。アルコールは、口とは逆にアヌスから腸に浸透するのです。酔いの回りは変わりません。あなたの美しい顔は、ほんのりと紅がさし、白い肉体はポーッと湯上がりのように紅をさす。ボクは、さらに鶏卵を十個挿入します。ワセリンは用いませ

でしよう。

「もう一つ！」

ボクは、さらにムチを鳴らして命じます。またタマゴがあなたのアヌスから白い首を現わします。

「止めるんだ！」

ボクは、ストップを命じます。だが、丸いタマゴは、ポトリ……

「へたな女だ。罰則としてムチを受けるのだ」

ボクは、豊かなあなたのヒップにムチを打ちこえるでしよう。

「ヒーター、ヒーター」

あなたは髪をふり乱しながら、悲鳴をあげて偉大なお尻を上下にゆさぶるでしよう。その上下運動で、残りの卵は、まるで馬がフンをするように、ポトリ、ポトリとアヌスからボールに排泄するでしよう。

「泣け、叫べ。ほえろ！」

ボクは、狂人のように、波打つあなたの臀部へムチを打ち込むでしよう……

(神奈川・上田大介)

△訂正△画報風俗奇譚9月号「読者の広場」に投稿された桜井氏の一文は、本人の知らないうちに名まえを借用されたそうです。取り消します。

ニューフォトのセクシードレス

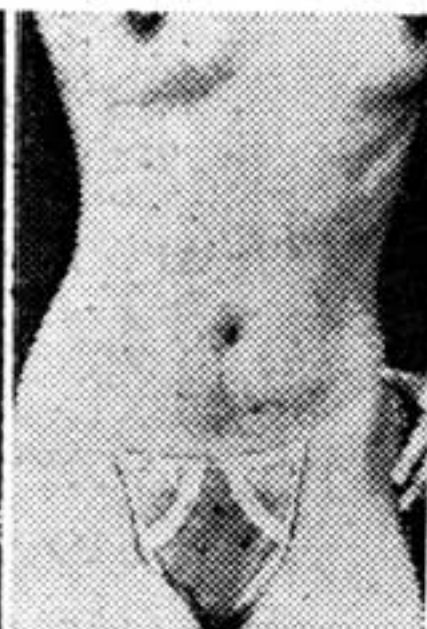
—愛好者の期待を集め新製品発表さる—

悩殺スタイルのドレス各種、および
ビキニブラジャー・ビキニパンティ
バタフライ・アミタイツ等……

(一ビスとして1,000円以上お買上の方に)
幸運のマスコット、パンカチーフ進呈。



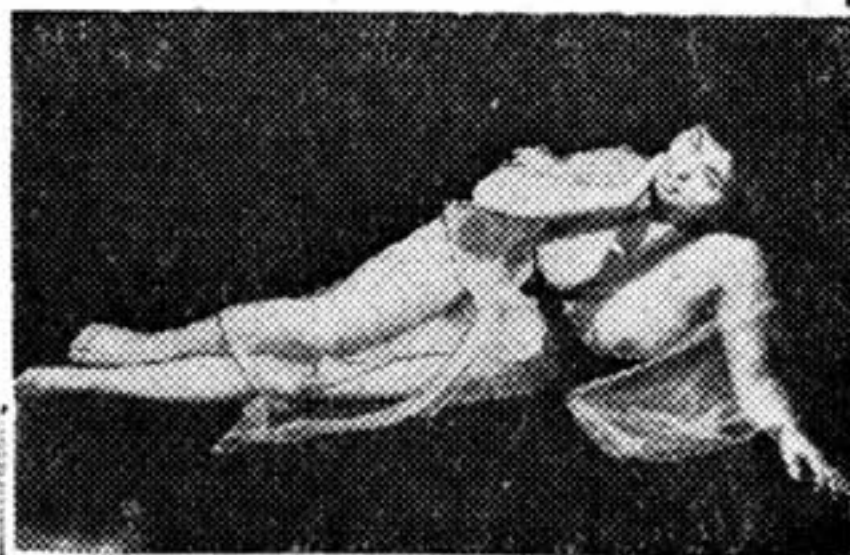
ビキニE
メダル生地 白色
¥ 650 円 50



バタフライ
各色
¥ 370 円 30



チャック付
パンティ 藤色
¥ 550 円 50



透き通り長襦袢 (ピンク)

ナイロントリコット ¥ 2,300 円 150

濃艶下着に依るヌードモデル写真分譲
50円同封、雑誌名記入の上申込みあれば、直ぐに各種ドレス、下着類のカラー写真入りカタログ送呈致します。

東京都杉並区大宮前6~414
ニューフォト社 洋品部

『風俗奇譚』在庫のお知らせ

ご注文は現金書留か振替為替が便利です！

△36年度V八月号(一五〇円)

多色口絵II白い肌をよごしてやるんだ……
グラビアII裸身痛まし・海辺のふたり緊縛・椅子の残虐・床の間も責め場・緊縛の表情・足を責めるほか……
特集IIフェチズムの人たち
珍奇収集館主人……
わが愛するお尻……
ふんどし・マニアの女……
レザ・フェチの女たち……
写真・残虐なるサディスト・ハンブルグの血に狂うインゲボ……
あたしはレスポスに命を賭けるムチに生きる令嬢……
ほも禁秘帖⑩男色者の異性関係
女装者の告白手記……
浣腸とお灸と縛り……
中世紀の拷問諸刑具のいろいろ
田上恵子女体責め絵画集……
全裸美女の凄艶切腹図絵……
連載小説・炎帝廟・虐殺指令・悦虐の彷徨……
サロン・マソキスチカ・ホモの窓・女装愛好の部屋……

七月号(一五〇円)

多色口絵II赤いハイヒール……
グラビアII縛悦の姿態・魅虐の世界・足責めのポーズ・受縛の白い人魚・女学生サディスト・うしろ方形縛り・木馬上の六尺姿・ポイントには白禪……
特集II責めさいなまれる女と男
お銀母娘しぼり……
乗馬服を着てのプレイ……
夫のお仕置きがうれしい……
女体を責める……
アブの世界のブライバシー……
サロン・マソキスチカ……
悦虐の果てに……
ホモの窓・女装愛好の部屋……
わがいとしき友に……
ほも禁秘帖⑨初会の生態……
マゾヒストの手紙から⑫……
浣腸ふたりプレイの記……
ノーマルとアブノーマル……
私の好きな被虐の見せ物……
ハイヒールのワンダ……
女装講座・女の肌をつくる……
続・ある完全女装……
イギリス近着フォト……
犬を連れた若奥さん……
白と黒の交感……
連載小説・炎帝廟③・虐殺指令……

悦虐の彷徨③(一五〇円)

多色口絵II美しきいけにえ……
グラビアII妍を競う艶縛姿態集しごきで縛られて・寝乱れ縛姿・全裸に縄が・縄の悶悦・縛られたポリウム・男の縛りプレイ・踏んづけ海老責め六尺と縄の魅惑……
特集II女装に陶酔する男たち
ああ女装の夜はふけて……
男性の心の底に眠る女装願望
女装する男たち……
女装のあたしを誘惑した男……
女装花ひらくとき……
限らない女装へのあこがれ……
私の女装のお師匠さん……
ある完全女装……
マゾヒストの手紙から⑪……
ふたりのマゾヒストの女……
サロン・マソキスチカ……
ホモの窓・女装愛好の部屋……
ホモ禁秘帖⑧……
フアンタジック・ショート……
夜行動物……
女性の残虐なる責め場集……
怪奇人形館の秘密と恐怖……
浣腸のある風景……
豊満な白いお尻の魅力……
女体に加えるウナギ責め……
連載小説・虐殺指令・炎帝廟②……
悦虐の彷徨②……
五月号(一五〇円)
多色口絵IIムチをふるう女……

グラビアIIふたり縛り、制服は嘆く・狼藉の一瞬前・荒縄が肌を噛む・どうされるのかしら？・悦虐の時が来る・羞恥のなかから・首輪につながるで・縛られた男・ムチ打つ女……

特集II鞭に憑かれた男と女

鞭よ、愛しておくれ……
鞭打の魅惑……
だれも持っていない鞭の関心……
ムチで鍛えられた女……
あたしの鞭打の獲物……
ムチと皮紐の一夜……
ふくよかな処女の尻に……
愛と復讐と鞭と……
6人の受難の女……
灼熱地獄・冷水地獄・生きている的・ふたりさらし……
ほも禁秘帖⑦狂崇の対象……
同性マゾヒストとの会話……
ヌートリクス画廊……
乗馬マニア9人の女たち……
ヌートリクス・コーナー……
女騎手強制調教所……
サロン・マソキスチカ……
ホモの窓・女装愛好の部屋……
あたしは肉体まで女になった……
猫責め地獄……
連載小説・炎帝廟・悦虐の彷徨……
四月号(一四〇円)
多色口絵II赤い靴のドミナ……
グラビアII太鼓しぼり・木にく……

くられて・荒小屋を背に・石の階段は冷たい・古雅の中庭で・緊縛悶姿・早く叩いて・冷蔵庫の上に・シヤツも破れて・ひじ曲げの拘束はか……
 特集・東西古今刑罰残酷物語……
 刑罰にひそむサディズム……
 世界残酷刑罰の生態……
 刑罰と拷問のいろいろ……
 江戸封建社会の刑罰……
 昔の刑罰は残酷だった……
 花井お梅の獄中日記……
 申城残酷記……
 マグダレナ殉教秘史……
 尻打ちの世界泰西名画集……
 責められる女の姿……
 晴雨流女のしほり方・伊藤晴雨マゾヒストの手紙から⑩……
 鼻の穴がピコピコうごく……
 ほも禁秘帖⑥……
 サロン・マソキスチカ……
 ホモの窓・女装愛好の部屋……
 私がマゾニアになったのは……
 私のいけにえになった処女……
 鞭打流腸小説・鞭魔ロベール……
 三月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ雪の露台・村上ユキ
 グラビアⅡ雪の女・雪にころが
 されて・妖艶切腹の図・制服
 椅子責め・裸身ながながと……
 特集・マゾヒストの世界……
 マゾ小説・でんすけ地獄……
 赤禪斬り込み隊……
 絵物語・毛皮を着たヴィナス

K氏自虐帳(告白小説)……
 妖異の世界……
 乳房・尻・頭髮フェチシズム
 サディストの使用したムチ……
 職業サディストの女……
 女体責め画集……
 グラインダー地獄・また裂き
 変型責め・車責め・納屋の首
 吊り・あやつり責め……
 江馬美久・田上恵子の傑作画集
 ほも禁秘帖⑤妖美なる野郎たち
 私の女装告白体験記……
 私の女装半生記……
 二月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ縛愁・囚花・制服は
 悲しからずや・乳房をかむ縄
 ハリツケ縛り・緊縛・拘束の
 写真と責め絵画集……
 妖美なる女体責め絵集……
 三人のソドミア……
 鞭打悦虐小説傑作特選集……
 一月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ血を好む大公妃
 責め絵特集Ⅱ空中緊縛ほか……
 色刷写真Ⅱふたりプレイ・オン
 パレード・レザー・フェチシ
 ズムほか……
 グラビア・妖美吊り艶姿・ころ
 がし責め・ハリツケとさか立
 ち・閨怨のポーズほか……
 特集・ソドミアとレスボス……
 八35年度V十二月号(一四〇円)
 特集・伊藤晴雨責面写真自選集
 多色口絵・野ざらし……

責め絵スケッチ集……
 晴雨女体緊縛写真集……
 伊藤晴雨さんのプロフィール……
 晴雨さんの雪責め……
 グラビアⅡ石段の緊縛裸女・め
 しい鳥・石垣の前で・長じゅ
 ばんも乱れて……
 十一月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ水地獄……土井啓子
 女体責め絵Ⅱ丸太小屋の惨・岩
 場ハリツケ・竹しばり責め・
 射撃のマト・ほか……
 グラビアⅡ艶麗無残・はなやか
 な足吊り・犬の首輪のブラジ
 ヤー・吊るし責め他……
 特集・戦争残酷の記録……
 十月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ女体知恵の輪……
 色刷写真Ⅱ美しき囚虜・あかり
 も淡くほか……
 グラビアⅡ白衣の佳人・長椅子
 と女・白衣も乱れて……
 特集・サディストの乱れ……
 九月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ空中鞭打……
 原色写真Ⅱ巖頭の裸女・つるさ
 れた白魚……
 グラビアⅡ落花の景・裸女無残
 二人しばり……
 特集・女装する男たち……
 八月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ受縛二重奏……
 口絵Ⅱスレ小屋の残酷……
 グラビアⅡスタンドの美女……



<B5判>

280 円

風俗奇譚5月臨時増刊
 マゾヒストの天国特集号



<A5判>

250 円

風俗奇譚8月臨時増刊
 サド小説とマゾ読み物特集号

特集・レスビアン生態……
 七月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ落花図……
 グラビアⅡ恋慕受縛・姐上の白
 魚・肌もあらわに……
 特集・食人症……
 六月号 (一三〇円)
 多色口絵Ⅱ痛ましき祭壇……
 グラビアⅡ樹間のニンフ・密室
 の呪縛・足づり裸女……
 特集・フェチシズム(淫物症)……
 夏の臨時増刊号(一八〇円)
 法悦特集五月号(一四〇円)
 悦虐特集三月号(売り切れ)
 春の臨時増刊号(二〇〇円)
 艶妖特集二月号(一四〇円)
 創刊臨時特集号(売り切れ)



画報風俗奇譚

△在庫のお知らせ▽

各号とも在庫が少なくなつてまいりました。お申し込みは、お早めに、現金書留か振替が確実です。

△36年分▽

画報風俗奇譚・第16集

9月号(一八〇円)

色刷り口絵Ⅱお小姓責め△田上恵子・古正英生え▽
 グラビア①縛虐惑悦女の60態Ⅱボロ舟の上で・髪も乱れて・石の階段の縛愁・不自由な姿態・乳ぶさを焼く・フジの根もとで・酒場のスタンドで・縛女のメニュー・縛女の供物・痛められる女体・ぬれ縁の縛態・タヌキ吊り……他
 グラビア②男の別世界Ⅱ女装を責める・縛られた女装者・立ち木に縛られて・棒しばりの姿態・白壁を背に・目かくしの世界……他
 責め絵集Ⅱ橋責め6景△田上恵子・古正英生・え▽

画報風俗奇譚・第15集

8月号(一八〇円)

色刷り口絵Ⅱふたり責め△田上恵子・古正英生え▽
 グラビア①魅縛縄欲の姿態Ⅱ岩場の縛姿・慕情の姿態・クサリでつなぐ・セロファンつつみ・ネグリジエ一枚で・セーラー服の縛姿・木の股しばり・女の切腹絵巻……他
 グラビア②男妖の園Ⅱたたずまい・野原にひとり・受縛のな

画報風俗奇譚・第14集

7月号(一八〇円)

色刷り口絵Ⅱ女責め火と水と……
 グラビア①緊縛競艶悦虐の肌くらべⅡ縄のデュエット・寝巻き乱れて・首をひっぱる……他
 グラビア②男性悦虐ポーズ集Ⅱ鎖しばり……他
 画集Ⅱ男の世界△マックレン▽
 女を責める画集Ⅱしぶき責め・木馬責め・階段の責め・野原の杭に……ほか△古正英生・江馬美久・田上恵子▽
 ルイス・アピラとその作品……
 (マゾ絵物語)踏んでちょうだい
 (絵物語)美少年はオレが頂くぜ
 (絵物語)江戸城大奥の無残地獄

画報風俗奇譚・第13集

6月号(一八〇円)

色刷り口絵Ⅱ責められる女責める女△田上恵子ほか▽
 グラビア①Ⅱ木馬責めの少女・艶美なる切腹・受縛の置き物・つい立て責め・ハシゴしばり・艶縛のひと……他
 グラビア②男性緊縛悦虐のポーズ集Ⅱ縄と足の加虐……他
 ルイス・アピラ・シリーズⅡ鞭をもつ女・縛られた女3態……
 凄艶責め絵4人集Ⅱクサリをまとって・谷川づけ・美しき人間椅子・背中を焼くローソク△田上恵子・古正英生・江馬美久・小田利美▽
 妖美な展覧会Ⅱ便器のそばの少女・女騎手△ゴダールほか▽
 (絵物語)悪魔作家の仕事部屋……
 (絵物語)処女タナの人式……
 楽しきかな足の魅力……その他
 画報風俗奇譚・第12集
 5月号(一八〇円)
 名彩写真Ⅱ自己陶醉・ふたり愉

諸国責めばなし・男責めの巻④
 スートリクス・フォト・ギャラリー……その他

悦・ひとり燃えて……………

グラビア①Ⅱ緊縛二重奏・セー
ラ・服乱れて・制服落花・草
はらで・碁盤いじめ・陶酔の
寝姿……………ほか

グラビア②妖美の花園に咲く姿
態Ⅱ縄の妖美・柱しばり2態
・靴のまま・あたしを愛す・
ふたりしびれ・そり責め…他

白い肌無残絵Ⅱさかさ縛り・歯
車責め・油地獄へ古正英生・
江馬美久・田上恵子Ⅴ

女装紳士録……………

(絵物語) 騙れる美少女ドラ……………

(サド絵物語) 黒眼鏡の野獣……………

(時代絵物語) 若武者裸の出陣……………

諸国責めばなし・男責めの巻②……………

グエンドリンの降伏と冒険……………

風変わりな展覧会Ⅱ奴隷市場……………

レスボスの花園・ムチを持つ……………

女・淫楽殺人へ藤田嗣治・モ……………

ロオほかⅤ……………その他

画報風俗奇譚・第11集

4月号(一八〇円)

色彩写真Ⅱ野外受縛4態……………

グラビアⅡ石どうろう縛り・蝶……………

蝶しばり・屈辱の姿態・首吊……………

りのポーズ・棒で責める…他……………

口絵Ⅱ無残ノ責められる女8態……………

(絵物語) 女子同性愛クラブ……………

(写真物語) ロープと鞭のプレイ……………

諸国責めばなし・男責めの巻①……………

女装コンテスト・女のレスリン……………

グ・処刑の部屋・サド女とマゾ……………

男・ホモの恋人・女サディスト……………

もう一つの世界……………他……………

女は何を考える?Ⅱロックス・マ……………

トウシエックらのアブ名画集……………

女装紳士録……………その他……………

画報風俗奇譚・第10集

3月号(一八〇円)

色彩写真Ⅱ艶縛クワルテット……………

グラビアⅡ雪中縛女・残酷な耳……………

責め・艶治吊り姿・緊縛立像……………

・浣腸のとき・縛囚のひと……………

おむつの代用・人間風……………ほか……………

口絵Ⅱ哀艶無残責められる女……………

伊藤晴雨責め写真集……………

(絵物語) 男はあたしのしもべ……………

(絵物語) 天道白蛇教異聞……………

(写真集) 尻打ちの世界……………その他……………

画報風俗奇譚・第9集

2月号(一八〇円)

色彩写真Ⅱ肌もあらわに・制服……………

無残・裸姿の緊縛……………

グラビアⅡ女性刑罰史絵巻……………

女体責め悦虐画集……………

異常な性風俗展覧会……………

(絵物語) 女を責める5態……………

(絵物語) 山小屋のいけにえ……………

(写真物語) 深夜の危険なショー……………

(絵物語) 皮ハギ小屋……………その他……………

画報風俗奇譚・第8集

1月号(一八〇円)

色彩写真Ⅱ女体羞姿・縛虐重奏……………

グラビアⅡ盛装無残・腹切り悶……………

・禪姿の男・クモしばり…他……………

口絵Ⅱ女体責め絵巻……………

鞭打10のア・ラ・カルト……………

自分を愛すへヘゲマンⅤ……………

女装マニア・愛されるよろこび……………

(絵物語) 縄と鞭に魅入られた女……………

(絵物語) 女の責め絵巻……………

女をいじめる5景……………その他……………

画報風俗奇譚4月臨時増刊

緊縛女体・ポーズ・女性責め絵読物集(大判)二八〇円



△35年分▽

画報風俗奇譚・第7集 (一八〇円)

画報風俗奇譚・第6集 (一八〇円)

画報風俗奇譚・第5集 (一八〇円)

画報風俗奇譚・第4集 (一八〇円)

画報風俗奇譚・秘蔵版 (二〇〇円)

画報風俗奇譚・第2集 (一八〇円)

画報風俗奇譚・第1集 (売り切れ)

秘蔵版風俗画報・第2集 (三〇〇円)

秘蔵版風俗画報・第1集(売切)

画報風俗奇譚1月臨時増刊

凄艶女体緊縛写真・責め絵悦虐秘画集(大判)二八〇円



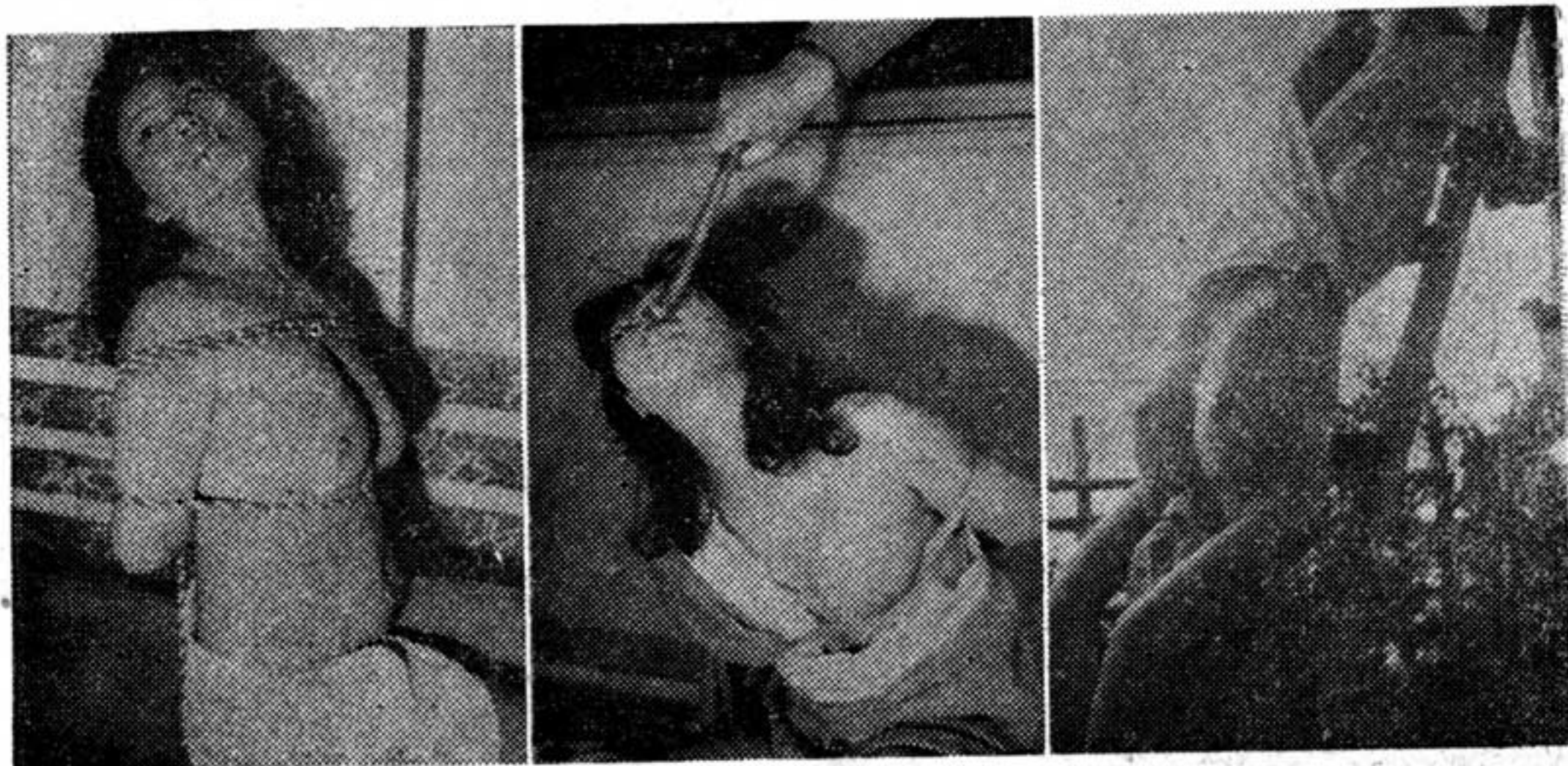
代理部の分譲写真

一覧

ご注文は略号を明記のうえ
振替か現金書留をご利用な
さるとご便利で確実です！

女体責め悶悦の姿態！

- ★女囚緊縛ポーズ(略A 6) 三枚三〇〇円
- ★野 外 縛 り(略A 7) 三枚三〇〇円
- ★凄絶切腹六態(略A 8) 六枚八〇〇円
- ★全裸緊縛ポーズ(略A 9) 三枚三〇〇円
- ★腎 部 責 め(略A 10) 三枚三〇〇円
- ★水責め・湯責め(略A 11) 三枚三〇〇円
- ★本格鞭打プレイ(略A 12) 三枚三〇〇円
- ★豊満なる緊縛女体(略C 6) 三枚三〇〇円
- ★海老責め地獄(略C 7) 三枚三〇〇円
- ★眼 帯 の 女(略C 8) 三枚三〇〇円
- ★さるくつわ艶姿(略C 9) 三枚三〇〇円
- ★制服の乙女縛り(略C 10) 三枚三〇〇円
- ★裸女棒しばり(略C 11) 三枚三〇〇円
- ★密室の呪縛(略D 6) 三枚三〇〇円
- ★全裸変形地獄図(略D 7) 三枚三〇〇円
- ★無残二人しばり(略D 8) 三枚三〇〇円
- ★浣腸悦虐フォト(略D 10) 三枚三〇〇円
- ★浣腸陶酔ポーズ(略D 11) 三枚三〇〇円
- ★力つきた処女(略P 1) 三枚三〇〇円
- ★蛇が白肌を(略P 2) 三枚三〇〇円
- ★迫るローソクの炎(略P 3) 三枚三〇〇円
- ★全裸責めの魅惑(略P 4) 三枚三〇〇円
- ★晴れ着もあらわに(略P 5) 三枚三〇〇円
- ★股裂き三人選(略P 6) 三枚三〇〇円



モデル別好みポーズ集

☆舟木喜代子のBG緊縛

- ▼大の字縛り(略F 5) 三枚三〇〇円
- ▼ハダカ男馬のり(略F 6) 三枚三〇〇円
- ▼豊艶乳房しばり(略F 7) 三枚三〇〇円

☆風早由美子の妖美緊縛

- ▼樹間のニンフ(略H 1) 三枚三〇〇円
- ▼嘆きのセーラ服(略H 2) 三枚三〇〇円
- ▼死のベルト誘い(略H 3) 三枚三〇〇円

☆井神せい子の豊満縛姿

- ▼窓ぎわの残虐(略I 1) 三枚三〇〇円

☆村上ユキ特選緊縛フォト

- ▼全裸後ろ手縛り(略M 1) 三枚三〇〇円
- ▼お灸灼熱地獄(略M 2) 三枚三〇〇円
- ▼本格縛り責三態(略M 3) 三枚三〇〇円
- ▼豊 麗 切 腹(略M 5) 三枚三〇〇円
- ▼閨房股間縛り(略M 6) 三枚三〇〇円
- ▼凄絶雪責め(略M 7) 三枚三〇〇円
- ▼古風な緊縛(略M 8) 三枚三〇〇円
- ▼椅子の上の無残(略M 9) 三枚三〇〇円

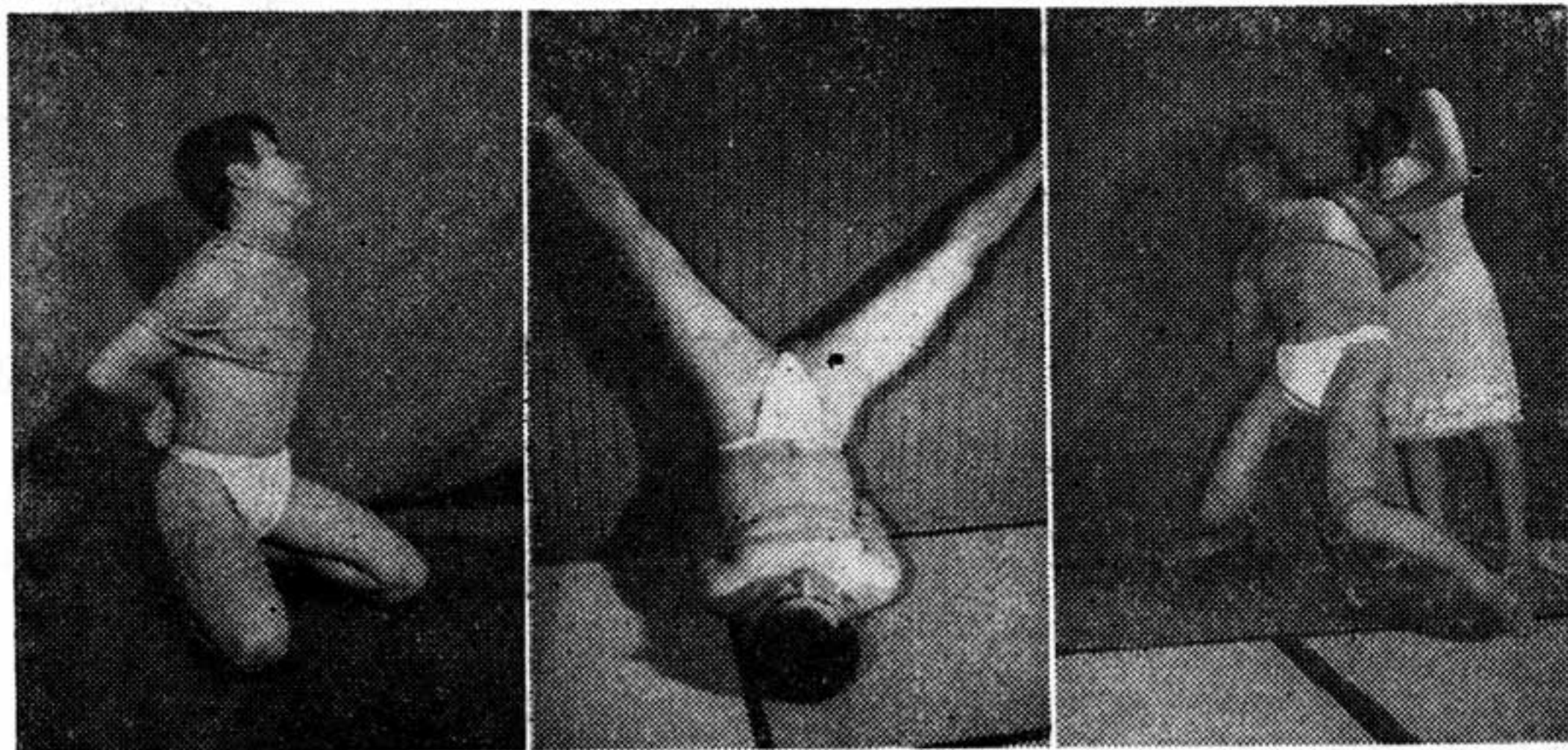
☆西牧えり子の悦虐縛り

- ▼中国服悦虐姿態(略N 1) 三枚三〇〇円
- ▼いたぶられ姑娘(略N 2) 三枚三〇〇円
- ▼乙女の折り(略N 3) 三枚三〇〇円
- ▼全裸いたぶり(略N 5) 三枚三〇〇円

本誌独占ノ男性緊縛の魅惑ノ

★肌くらべ全裸縛り(略Q1)三枚三〇〇円
 ★花ひらく受縛天国(略Q2)三枚三〇〇円
 ★血みどろのリンチ(略X8)五枚五〇〇円
 ★悦 虐 の 表 情(略X9)三枚三〇〇円
 ★本格吊るし責め(略X10)三枚三〇〇円

☆輝姿二人プレイ(略B18)三枚三〇〇円
 ☆輝姿一人プレイ(略B19)三枚三〇〇円
 ☆輝姿ふたりの男(略B20)三枚三〇〇円
 ☆全裸の男性美(略B21)三枚三〇〇円
 ☆輝姿一人緊縛(略B22)三枚三〇〇円
 ☆青竹十字背負い(略B23)三枚三〇〇円
 ☆輝姿股間ポーズ(略B24)三枚三〇〇円
 ☆変形縛り責め(略B25)三枚三〇〇円
 ☆純白の輝姿(略B26)三枚三〇〇円
 ☆虐げられる輝男(略B27)三枚三〇〇円
 ☆三角木馬責め(略B28)三枚三〇〇円
 ☆竹を背負って(略B29)三枚三〇〇円
 ☆輝姿開脚の図(略B30)三枚三〇〇円
 ☆全裸の男(略B31)三枚三〇〇円
 ☆変わり海老責め(略B32)三枚三〇〇円
 ☆緊縛悦虐境(略B33)三枚三〇〇円
 ☆踏んづけられて(略B34)三枚三〇〇円
 ☆男を責める男(略B35)三枚三〇〇円
 ☆おれのエモノ(略B36)三枚三〇〇円
 ☆首しぼり3態(略B37)三枚三〇〇円
 ☆無残、男責め(略B38)三枚三〇〇円
 ☆縛られた輝男(略B39)三枚三〇〇円
 ☆輝姿の悦虐境(略B40)三枚三〇〇円



▼鼻責め嗜虐(略N6)三枚三〇〇円
 ▼哀花受難(略N7)三枚三〇〇円
 ▼制服の少女虐め(略N8)三枚三〇〇円
 ▼悦虐の園の女(略N9)三枚三〇〇円
 ▼棒責め立ち姿(略N10)三枚三〇〇円
 ▼棒責めの伏姿(略N11)三枚三〇〇円

☆西条さくら豊艶緊縛

▼乳房地獄責め(略S1)三枚三〇〇円
 ▼腹部への嗜虐(略S2)三枚三〇〇円
 ▼悶姿の祭壇(略S3)三枚三〇〇円
 ▼ゴムひもの責め(略S4)三枚三〇〇円

☆高月まゆみの縛悦姿態

▼砂浜荒縄しぼり(略T5)三枚三〇〇円
 ▼あばらやの恋縄(略T6)三枚三〇〇円
 ▼碁盤責め三態(略T7)三枚三〇〇円
 ▼野外十字架縛り(略T8)三枚三〇〇円
 ▼犬になった女(略T9)三枚三〇〇円
 ▼車中の拘束(略T10)三枚三〇〇円

☆島崎ユカ魅縛のポーズ

▼裸身は嘆く(略U1)三枚三〇〇円

△サデイスチンのポーズ▽

☆女王様としもべ(略W1)三枚三〇〇円
 ☆ドミナのムチ(略W2)三枚三〇〇円
 ☆女に虐待される(略W3)三枚三〇〇円

<読者の原稿を募集します>

本誌では愛読者各位の原稿をお待ちしています。左記の要項にしたがい、どしどしお送りください。

☆創作 (四百字25枚以内)

S・M・H・Fなどアブチックな世界にテーマを求めたもの。

☆告白体験記 (四百字20枚以内)

あなた自身の体験、またはあなたのまわりに秘められたアブの世界に関するもの。

☆アブニュース (3枚以内)

「ホモの窓」「女装愛好の部屋」「サロン・マゾキチスカ」に収載する、町に落ちているニュースなど、その他、サド、マゾ、浣腸などに関するもの。

☆口絵・カット (枚数制限なし)

かならず墨描きのこと。筆でもペンでもかまいません。ただし折れないように送ってください。

☆編集上の企画・アイディア

表紙をはじめあらゆる面に対する企画・アイディア。詳細なもの、ヒントだけのもの、いずれも可。

★採用の分には、規定の謝礼をお送りします。なお、応募原稿は採否ともにご返却いたしません。

■編集室だより

☆「このごろ、読み物がよくなったね」ということばは、しばしば聞く。まことにありがたいことだと、うれしくうけたまわっている。執筆陣が、それぞれに、自分の持ち味をじゅうぶんに発揮するようになったからであり、重ねて、読者諸氏のご叱正ご鞭撻の結果と思う。もちろん編集者の功績ではなく、読者を含めて、本誌を愛してくださるかたがたのお力と、感謝している次第である。

☆読者のかたで、よく、男ばかりに編集方針をしぼってしまえ、といつてこられるかたがある。本誌が類誌よりも男同士のテーマに力を尽くしているのは事実だが、本誌をささえている読者の比率を考えると、そうたやすく踏み切るわけにもいかない。いずれ、なんらかの形で、男ものの特集をする企画はもっているが、どうか、ご自分ひとりの趣味に走らないようにお願いしたい。とにかく、この性向はいろいろあるのですから……。

■月ぎめご購読の方法

風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月 (一冊)	一五〇円
三カ月 (三冊)	四五〇円
六カ月 (六冊)	九〇〇円
一カ年 (十二冊)	一八〇〇円

画報・風俗奇譚 (各送料とも)

一カ月 (一冊)	一八〇円
三カ月 (三冊)	五四〇円
六カ月 (六冊)	一〇八〇円
一カ年 (十二冊)	二一六〇円

★本社に直接ご注文の場合は、現金書留か振替が確実で、ご便利です。ただし、振替は日時がかかりますゆえ、あらかじめご了承ください。

風俗奇譚 十月号

定価一五〇円

昭和三十六年九月二十日印刷
昭和三十六年十月一日発行

編集人 高倉一
印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一ノ三五

発行所 文献資料刊行会

振替東京 四二四九四番
電話東京(291)二四三〇番